

# ケース記録

ケース記録内での名前	性別	年齢	最後に在籍した学校	婚姻	インタビュー実施日	インタビューア	ケース記録執筆
B	女性	27	大学	未婚	6月23日	小杉、寺地	小杉
C	男性	28	大学院	未婚	6月29日	堀、寺地	堀
D	男性	26	大学	未婚	7月2日	久木元、寺地	久木元
E	女性	29	大学	未婚	7月4日	久木元、堀	久木元
F	女性	26	専門・各種	既婚	7月5日	小杉、寺地	寺地
G	男性	28	大学	既婚	7月6日	小杉、寺地	小杉
H	男性	23	大学	未婚	7月7日	堀、寺地	寺地
I	女性	29	専門・各種	未婚	7月9日	堀、寺地	堀
J	女性	20	高校	未婚	7月19日	堀	堀
K	女性	25	大学	未婚	7月20日	堀、寺地	堀
L	女性	30	大学	既婚	7月21日	小杉、寺地	小杉
M	男性	28	大学	既婚	7月22日	堀、寺地	寺地
N	女性	27	大学院	既婚	7月24日	堀、寺地	堀
O	男性	26	専門・各種	未婚	7月27日	久木元、寺地	久木元
P	男性	24	大学	未婚	7月30日	小杉	小杉
Q	男性	29	大学	既婚	7月30日	小杉	小杉
R	女性	27	大学	未婚	8月10日	小杉、久木元	久木元
S	女性	27	高校	未婚	8月20日	堀、寺地	堀
A	女性	24	短大	既婚	6月22日	堀	堀

## Bさん

26歳女性。就職のことも考えて大学は薬学部に行き、薬剤師となる。今は薬剤師専門の派遣会社で派遣社員。待遇はいい。将来はカフェを開きたくて準備中。

### 1. 学校時代について

高校までは北関東の都市に住んでいた。高校は地元の普通科進学校。同じ中学から進学した人はいない。中学時代は卓球部だったが、高校は家が遠いことがあり部活はやっていない。成績は上のほう。高2の時に理系コースを選択。

「文系の教科のほうが好きだったんですけども、でも、将来考えたら理系へ行ったほうが何かと有利かと思ひまして、で、理系を。…(中略)… 理系の何か生物、生物が得意だったので、A大学にある園芸学部か、どこかの理系の学部か薬学部かぐらいで考えていたんですけども。」

理系のクラスは女子が少なく10人程度。女子は女子で仲が良かった。特に担任の先生と仲が良いとかいうことはなく普通の感じ。誰かに影響を受けて生物が好きになったというようなことはない。友達も皆、進路については迷っていたので、クラスの友達で話すことはあった。

「(受験したのは?) 園芸学部も受けました。でも、何か全然わからなくて、全然受からなかったの。結局受かったところに行った。…(中略)…もう1個違う学部もうかったんですけども、薬学のほうが就職に有利そうだったので、こっちを選んだというか。」

### B 大学薬学部に進学

「最初は研究方面に行こうかと思っていたんですけども、大学に入ってから、研究に行くには大学院まで行かなきゃいけないということに気づいたんですよ。そこまで勉強したくないと思って」

「授業は思った以上に大変。大学って遊ぶイメージだったんですけど。高校よりも大変だなと思って。」

### 大学生活

東京に出てきて。1年目は寮、2年目から一人暮らし。高校時代の友達とは、東京に出てきた友達とはたまに会う程度。

サークルは軽音楽部に入り、ロック系のバンドでベースを弾く。

「(サークルは熱心に?) そうです。どっちかという、そっちがメインになっていました。」

「クラスでは、寮のときの一緒の友達が結構仲がよくて、放課後とか、そのサークルの友達が多かったです。」

「(進路のことなど、友達の影響は?) それはどちらかという、先輩のほうが影響がありま

した。先輩がこういう実習に行ったりとか、いろいろな話を、企業とかもいろいろ聞かせていただいて、だんだん決まっていた感じです。」

サークルの先輩から聞くことが多かった。

## 就職活動

就職を意識したのは3年生の前半ごろから。

「(薬局に決めたのは?) 最初、単純に給料の面と、お休みの面と、労働条件は、薬局が病院とかよりも、研究よりも一番よかったんです。給料はそんな上がらないんですけど、安定しているなと思って。それで、決めたというのものもある。」

薬剤師試験は卒業直前なので、それを通る前提で就職活動を始める。4年生の初めごろからだった。

「3社、気になっているところがあって、そのうちの、1社目で受かったから決めちゃったような気もする。一番ここが受かったらいいな、次、落とされたらこうって決めて、最初に受けたところで受かったの。」

「(選択の基準は?) 薬局でも調剤だけやるところと、あとドラッグストアと調剤と両方あるところがあって、いろいろやれたほうがおもしろそうだったんでその両方やりたいなと思ったんです。…(中略)…あとはあまり転勤とかしたくなかったんで、東京に主に展開しているところと、あとやっぱり給料という感じで決めました。」

会社訪問は特にしていない。インターネットで会社情報を見て、そういった条件をチェックして、あとは面接に行った。

「面接も、2次とか、3次とかはなかった。けっこう、ちゃつと行って、ちゃつと決まったような気がします。…(中略)… 薬剤師は足りてないので、まだ今のところは売り手市場なので。来てくれたらありがたいだった。」

## アルバイト

大学ではアルバイトをした。コンビニとレストランのウエイトレス。食品工場でサラダを詰める短期バイトもした。仕事は週1, 2日しかできず、ほとんど稼げなかった。

## **2. キャリア**

最初の薬局は大手のチェーン店。サービス残業ということはなかったが、残業は多かった。また、有給休暇が使いえなかった。

「何かそういう空気ができ上がっていて、有休は絶対に取っちゃいけないみたいなのがあって、だれ一人申請する人がいなかった。病気でも使いえなかったです。何でも使いえなかった。」

2007年の4月に入社して、2009年の12月に辞めた。

「やりたいことが出てきたので、このときはシフト制で土日休みじゃなかったんですけど、

土日休みにしたいなと思って変えた。」

次の仕事は 2009 年の 9 月ごろから探し始めており、翌月からの勤め先を決めてからやめている。2 番目の仕事は、パートの薬剤師。調剤だけにして時間もきっちり決まっていて残業もない。賃金は最初は低かったが、交渉してあげてもらい、残業代を考えると最初の職場と変わらない水準になった。

それを 2011 年 3 月まで続け、今は 3 番目の会社に。今度は派遣。薬剤師ばかり登録している派遣会社である。パートの時は週 40 時間で 300 万ぐらいの年収だったが、派遣に変えて、週 35 時間で 400 万ぐらいに増えた。

「(転職のきっかけは)パートよりも派遣のほうが時給が高いということに気づいたというのが(笑)。派遣というのは、あまり存在に気づいていなかった。…(中略)…働いていたときに、職場に派遣の人が来たんですよ。話を聞いたら、何かよさそうだなと思って、で、調べたら、完全にこっちのほうが待遇がよかった。」

「薬剤師免許を持っていれば、だれでも登録できるんです。ただ、いろいろなところに派遣されるので、ある程度、経歴が少しはないと、1 年目から派遣をやる人ってあまりいないと思うんですけど。」

### 薬剤師としての知識

「(大学で勉強しただけではだめですか?)大学 4 年の知識は今なにも使っていないですね。実践して覚えていくことなので。」

「(新薬とかの知識は?)新しいのが出たときは、勉強します。出ますっていうので勉強会があったりとかはします。結構頻繁にあります。」

「(薬剤師として一人前という感じはありますか?) 薬剤師としては全然ないです。結構ふらふらしているんで。(上司から怒られたりは?) 薬局長から怒られるっていうことは最近はないですけども、昔はよく指導、指導というか、教えてもらっていましたけど。最近怒られるのは、どちらかという患者さん。(笑)何か 1 個間違えたりすると命にかかわってくるので。」

「(薬剤師の仕事は好きですか?) 好き? どうなんでしょうね。どっちかという、私は仕事は仕事ですね。やりがいはあると思うんですけど、で、仕事内容のわりに給料がいいというのがあります。(笑)」

## 3. 将来について

### カフェを開きたい

「(土日休みにした理由は?) カフェとかの経営とかに興味があって、そういう勉強がしたいなと思ったので。(どういうふうに勉強するんですか?) 知り合いでそういうのをやっている方がいるので、そういう方に教えてもらったり。やっぱりそっちに合わせなきゃいけなかつ

たんで。」

「(なぜカフェに?)もともと興味があったんですけども、気づいたら薬剤師になっていて、何かあきらめていたんです。けど、そういう何かやっている人と知り合えたので、だったら何かやってみたいなと思って。」

教えてくれているのは、30前半ぐらいの男性。カフェを自分でやっている。友達の知り合いだった人。

「あこがれはありました。でも、全然本気では考えていなかった、どうせ無理だと思っていたので。でも話を聞いていたら何か、結構余裕があったんで、時間、余裕というか、薬剤師というあれがあるので、だから、大きいもとがあるので、別にちょっとぐらいほかのこともできるんじゃないかと思って。」

「音楽が一番趣味として、大きくて好きなんです。なので、そういう音楽を働きながら聞きたいっていうのが最初だったんですけど。薬局でロックとかパンクとか流せないんで。

(笑) だったら自分でお店を持ちたいなっていうのが最初のきっかけではあったんです。」

「(どのくらい本気で?) 結構今は真剣に学んでいます。(具体的な場所とか?) 何か、ここにできたらいいなみたいなのはあります。(資金は?) 考えています。」

「(カフェをやっても薬剤師は続けていく?) いや、あまりないですね。カフェがうまくいったらそっちのほうやりたいです。できたら30代のうちには、そちらにシフトしたい。」

#### 4. 育った家庭について

両親と兄、それに祖父母の6人家族。田んぼがあり、祖父母は自家用の米を作っている。両親はともに教員。勉強をやらされたという感じはなく、勝手にやっていた感じ。家には本はたくさんあった。

「絵本があって。それを幼稚園のころは毎日読んでいた記憶がある。あとは漫画、だんだん漫画になっていきましたけれども。」

携帯電話は高校時代から持っていたが、特にほしいと言った記憶はない。家が遠かったから、迎えに来てもらったりする必要性からだった。

両親に対しては、進路を決める時にも結構事後報告が多かった。転職の際もそうだった。「そうですね。むしろ休みが取れやすくなったので、実家に帰りやすくなったので喜んでます。(笑) 1年目は全く帰れなかったんで。」

カフェの話は父親にはまだしていない。「余計な心配をかけたくないんで、うまくいってから言おうかなと。」

#### 5. 結婚について

独身。今は結婚は考えていない。30を超えたぐらいだと思う。今はカフェのほう大きい。

## 6. 友達関係・シェアハウス

「(友達が多いほう?) どうなんだろう。自分じゃちょっとよくわからないですけども、少なくはないと思うんですけど」

一緒にライブに行ったりする趣味が共通する友達が多い。大学の頃からの延長上の友達も、社会人になってからの友達もいる。

1年半ほど前から、友人4人で賃貸住宅を借りて暮らしている。最初の会社で知り合った友人とそのまた友人。皆同じ世代の女性。

「はやっているみたいです。結構多いみたいです。安いので。楽しいです。」

2人1部屋で、夕食は個人個人で。冷蔵庫には名前を書いている。いつまでと特に決めてはいない。

## 7. その他

「(あなたのこれまでを理解するのに大事なことって?) 何だろう。でも、そういう何か、カフェをやるにしても、人との出会いが自分にとってすごい大きかったのがあるんですよ。出会えなかったら多分ずっと薬剤師やってたと思うんですよ。疑いもなく薬剤師の道しかないと考えていたので。そういう人と出会って、あ、違う道もあるかもしれないって、可能性がやっぱり広がったなと思って。(その方も友達の友達でしたね。) そうですね。なので、最近はあるべく広くするように、人とのつながりっていうか。前は深く狭くでよかったんですけど、それが楽だったので。最近はあるべく広くいろいろな人と話したいなと思って。」

「それもあって、派遣というのもしっかりいろいろなところに行けるんですよ。それもおもしろいなと思ったので、派遣というの。給料が一番だったんですけども、いろいろなところへ行けるというのも一つの要因です。(特に正社員になりたいと思わない?) そうですね。私は今はそうです。」

## Cさん

九州出身。公立小中学校から、県内で有数の進学校に進む。高校卒業後にいったん京都にある大学の理学部に進学するが違和感を覚えて1年で辞め、東京の大学の農学部へ再度進学する。多趣味で、旅、登山、サイクリング、料理（調理師免許をもつ）、昆虫採集、柔道（二段）、写真を嗜み、ネットワークも広い。現在はNPOの活動に職員として従事しながら、大学でも非常勤職員として教えている。

### 1. 学校時代について

こどもの時はアトピー・ぜんそく・肥満のため内向的だったが、囲碁の習い事をきっかけにガキ大将のような存在になる。

「何か言うのもなんですけど、昔ちょっと肥満児だったんですよ、体質的に、あと、ありとあらゆるアレルギーがあってぜんそくもあって、そばとか卵とか牛乳とか、何でもあったんですね。水泳でぜんそくは克服しようというのもやってて、でも、プラス何かでも趣味やろうかということ、おやじの大学時代の後輩が道場の師匠をやってたんで、紹介していただいて、そこからのつきあいですかね。そのうちに全部解消されましたけどね。アレルギーとか、肥満も全部解消されて、何で始めたんだろうっていう。

結構内向的だった気がしますね。友達は多かったんですけど。囲碁、友達か、内向的だったのもその囲碁で、おれのやっぱり師匠が、そういった子供の教育にもすごい力入れて、内向的なやつをバシバシたたいて表向きにさせる、何ですかね、すばらしい師匠で。」

公立の小中学校で学ぶ。昆虫が好きで博物館と様々な関わりを持っていた。

「僕は昆虫が好きなんですね。トンボとか、あと、ガですね。小学校のときから、採集とかするじゃないですか。たまに珍しいのをとったら博物館に持っていくとか、また、博物館の方も、僕1人じゃなくて何人もいたいんですけれども、面倒見てくださって、そういう調査に同行するかい？ とか、分析とかやらせていただいて。」

高校は囲碁の一芸推薦で進学校に進む。高校では生徒会長。部活は柔道、ラグビーや、囲碁も部活もやっていた。

大学は生物に関心があったので知っている助教授が所属していた理学部に進んだが、人とかかわりがいいことに不満を覚え、本を読んで関心を持った教授のいる大学に再進学した。

「最初ちょっと違う大学に、京都のほうで理学部だったんですよ。ただ、ちょっとおもしろみがなくて、何か。1カ月ぐらいでやめまして。人とのつながりがいいというのが、なんで、今の大学では大学1年から今の教授のところにつかせていただいてやっているんですけど」

も。

（最初の理学部に入ったのは）生物が、生態系というんですか、そういうのを保全したいなというのもある。 （入学から）2週間ぐらいして、たまたまそこも知っている助教授の方がいらっしゃって、その関係で入ったんですけれども、でも、ちょっと何か、そのお話をじかに伺うと教養科目が多いとか、もう社会から隔離されたというんですか。ちょっと自分には向かないなと思ひまして、それを考えたら、もうすぐに何かにとりかかれる場所に行きたいという意味合いで今の大学のほうに行かせていただいたというのが背景ですかね。大学の教育者になりたいというのは、もう中学のときからずっと思っていたんで、ただ、やはりちょっと何かあまりに無機的過ぎる感じとか、ちょっとそこに疑問を感じて。」

大学時代は仕送りをもらわず、奨学金・アルバイト・授業料免除を活用しながら、自分で生活を賄った。

「仕送りとか一切もらっていないですね。授業料も含めて全部やってたんで、なんで、その途中で1年間仕事したり、海外行ったりとかいう機会もあったり、研究も含めて行って来たんですけど。」

親は出そうとするんですけどね、突っぱねて。だって、もう出たら出ただろうみたいな、あとは自分で稼いで何ぼでしょうと。全然苦勞もしていないですし、むしろやったおかげでいろいろネットワークも広がったりとか、職も身についたりとか。」

## 2. キャリア

学部には5年間所属し、その後大学院に進学。学部在学中に訪問した国が現在関わっているNPOの本拠地であり、それが縁で現在のNPO法人で働くようになる。現在は、NPO職員として経済的に自立している。

「もともとこの〇〇（関わっているNPO法人）の本拠地がイギリスなんですね、発祥は。そこだとほんとうに、何ですかね、議会で、国家予算の中に組み込まれるような団体なんです、ここは。」

事務局長が、何か指導教官のお弟子さんとかいろいろと関係があって、僕も個人的に存じあげていまして、その学部時代に最初にイギリスに行ったときに一緒に視察をしていただいたんですよ。その方がどうだということ、東京にいていいから、いろいろな仕事があったら手伝わない？という話で。」

NPOに必要なスキルは、企業の立ち上げに関わらせてもらったり、他の事務局員の人から学ばせてもらったりして身に着けている。

## 3. 将来について

中学の時から将来は大学で教職に就きたいと考えているが、政策に携わるような仕事も志

向している。専門は地域研究。

「今のある種悩みで、(アカデミックな)常勤のほうにすぐ行ってもいいですけど、またちょっと別の話が今あって、ちょっと。農業関係の政策をやっている研究所のようなところに働きに来ないかと、5年ぐらいでっていう話で。だれかがやっぱりそういうのをやっていかないと、もう今の省庁にはとても任せられないですから、彼らにはですね、現場が見えないもんですから、なんで、ぜひやりたいかなと思って、思いますね、それは、できる範囲で。」

結婚については、1年半前から考え中である。

#### 4. 友達について

交友関係は極めて広く、東京にもA県にも多くの友達がいる。友達は趣味でつながっていることが多い。特に囲碁をきっかけにした知り合いは、年齢を超えて様々な分野にわたっている。

「親友って呼べる人で多分15人ぐらいいます。大親友で。なんで、あと、それ以外にも仲いい友達とかはいますけど。各世代で、高校もそうですしね、中学、囲碁関係もそうですし、囲碁関係はもう親友を越えて兄弟みたいな感じですけどね。」

就職活動はしたことがないが、もしするとすればネットワークを活用するという。人とのつながりの重要性を痛感している。

「就活っていうのがありますよね。僕は就活したかったら、じかにそういった企業の人でネットワークある人を呼んで、飲んでみてみたいな話をするっていいいます。コネクションは最高の就活形態ですよ。僕はもうほんとうに近くの後輩とか学生はそういう就活させないで、個人的に紹介してます。」

何にしてもそうです。人とのつながりですね。それが最後の武器になりますよね。

いろいろな方々にもう大学1年から、囲碁つながりとか、いろいろなつながりで、ほんとう社会人の方とか、そういった会合とか、囲碁つながり。

でも自分でアンテナ張らんとだめですね。自分からつながりをつけるっていうのは、やっぱりどんどん広がっていきますね。」

自分のネットワークの原点は、囲碁である。囲碁をきっかけに、年齢を超えた付き合いが展開している。

「高校のときからいろいろなことを、常にそういった自分の枠外の活動っていうんですか、年代関係ない、多分それは囲碁が原点です。小学校のときから、言ったら、じいちゃん、ばあちゃんっていうんですか、周りにいつも、おじさんもそうですけどね、いろいろな先生がとかやってるじゃないですか。だから、就職とかされたいんだったら、囲碁をやらせれば、すぐに見つかります。」

(自分の活動は) 囲碁の世界から外に出る感じじゃないかな。そういう人たちと会う機会というか、幾らでも、この大学で変なふうに幅きかせられたのも、その囲碁のおかげで。ほかの趣味もそうかもしれないですけど、やっぱ続けて、しかもネットワークを外にも広げるっていうのをやれば、いまだに世の中コミュニティーって広いなって思いますよね。こんな新参者の若者がいきなり話しに行っても、(囲碁の関係者は) 話を聞いてくれますね。」

自分のネットワークを展開する上で、趣味を継続する重要性があると感じるようになった。「1本の趣味だけだっというのは、多分根詰まる可能性がありますよね。何ですかね、壁とか考えちゃったりする。例えば、何ですかね、ちょっと囲碁とか、何段とかあるじゃないですか、あれで真剣に上がれないとか、柔道もそうですよ。トーナメントが抜けられないとか。それだけでやってしまうと、ちょっと重い趣味になってしまうかもしれない。それをしてもいいんですけど、それ以外にも、何かこう、またちょっと違う方向性のっていうんですかね、そういうのもあると代償が常にきく、それをやっているうちに、またそのもとのをやっというとかできますし、何かね、それをすごく感じますよね。大学でもサークルも山ほど入りましたしね、ほどよく、ほんとうに、それはありますね。コアな部分、コアな趣味と、何かちょいちょいやっていけるものとか、最終的には娯楽系ですかね、無理のわからない範囲とかね。」

現在の学生が孤立している状況を憂いており、個人的にも働きかけをしている。「新しく入った新入生、あれどうなのっていう話をして、引きこもり系の子とかもいっぱい僕はサークルに入れていきますよ。囲碁とかESSとかにしても、僕なんかがいるとは多分思っって来ないんですよ、そのサークルに。囲碁、ESSのイメージだとそういうドメスティックな人たちが集まるような限界かと思って来たら失敗するんです。違います。みんなでも外に、リーダー格になっていきますよ。いろいろなことができる、仕向けるっていうのを、食事もそうですよ。おいしいものをしっかりと考えて食べる。食育とか言いますが、実際日常生活からできるんですよ。みんな興味を持つ、重い話じゃなくて、これうまいじゃんとか、最近はいしん坊になんですけど。でも、ほんとうね、それも解消できますね。」

現在は被災地の支援にも関わっている。自分の専門やネットワークを生かしながら、積極的な活動を展開している。

## 5. 家族について

父は写真家で、主に東南アジアの人や風景についての写真を撮ってきた。母は困難を抱える子供たちのための学校の教員をしている。兄弟は弟が1人。

「(両親には)やっぱりものを言えというんですかね、うちの家もそうかもしれないですけど、でも、しっかりとものを発言すること、返事をしろとか、礼儀とか、そういうことを結構大分長期的に言われた気はしますね。

## Dさん

26歳男性。東北地方出身。地元の大学の情報関係の学部を卒業し、東京でシステムエンジニアとして就職。仕事の忙しさに加え、会社の状況の変化、さらに震災の経験などから、出身地にUターンして生活スタイルを変えることを考え始めている。

### 1. 学校時代

東北地方の生まれ。小・中学校の頃は、親の仕事の都合で県内を転校していたが、中学校の途中からは県庁所在地で暮らし、大学卒業までその自宅に住む。

高校は地元の進学校だが、「正直、勉強だけをするという感じの、つまらない学校だったと思っています」。将来IT系の仕事をやりたかったこともあり、2年のときに理系を選択。しかし高校時代は全然勉強せず、成績は下から数えたほうが早かった。

高校時代、教師との関係はよく、職員室に「暇な時間に話しに行ったりとかしていた」。部活は物理部だったが、「部室になぜかパソコンが置いていまして、とりあえずそれをいじって、飽きたら帰る」という感じで、文化祭の出展などを除くと「実質、帰宅部だった」。物理部のときの友人とは縁が続いていて、今でも会うことがある。

地元の予備校に通いつつ一年浪人してから、地元の公立大学に進学。「ちょうど浪人したときに、自分の友達がその大学に入ったんですよ。それでちょっと興味があって遊びに行ったんですけど、そこで会った教授がちょうど（その後の入試の）面接官で」。もともと地元志向が強く、地元の大学に行きたいと考えていた。

「何か外に出るのが怖かったんですね、正直言って。今なら知らない土地にいても大丈夫だと思いますけどね、当時はやっぱり怖かったですね。」

### 大学時代

入学したのは情報関係の学部。サークルには入っていなかった。「1年生のときから研究室に強制配属という学部なんですよ。ですから、別にサークルに入らなくても、そういうつながりの範囲で友達とかはできたので、特にサークルに入りたいとかは全く思わなかったですし」。

最初の研究室は自分の意思とは関係なく割り振られるが、その後2度研究室を移る機会があり、2度とも移った。最終的に選んだ研究室は、「卒業しやすそうだったから」というのもあったが、「分野的にも、ほかのところよりはまだ興味あった」ため、コンピュータネットワークに関する研究室に所属。「学校自体のレベルがあまり高い感じではないので、死ぬほどやらなくても何とかできるという感じでは」あったものの、進級の条件になる必須の演習があったり、卒論が義務だったりして、勉強については厳しい大学だった。

## 就職活動

就職活動は3年の頃から始めた。当時はまだ「売り手市場と言われていた時期」の最後の頃で、東京から大学に企業が説明をしに来ていた。そのため、隣の県まで行くことはあったものの、就職活動のために東京に出向くことはなかった。

情報関係の学部だったこともあり、同級生の多くは情報系の会社などに絞り込んでいたが、自分自身は情報系のところの話を優先的に聞いたものの、「大学に来た企業を、ジャンル関係なしに片っ端から説明を聞いていた」。勤務地も、東京に行きたいと考えていたが、そうでなければ帰省しやすいところというぐらいの考えだった。

その中で、第一希望だった東京のソフトウェアの会社に「すんなり」内定する。そこを希望した理由は、「やっぱり単純に給料がよかったというのと、あと、東京へ行きたかった」。その会社には、自分の大学からは「数年前に1人採用実績があったくらいで、我々の代で久しぶりに採用があったという感じ」（大学の同期で同じ会社に入った人もいた）。

## 2. キャリアと仕事の状況

新卒時に就職した東京のソフトウェアの会社に、現在もシステムエンジニアとして勤務している。入社したころは仕事にも意欲的だったが、「去年ぐらいまでは、わりと気持ちは上向いていたんですけど、最近は停滞傾向ですね」。

「朝は9時に着くように行っています。大体、家を出るのが、比較的家が近いので、8時15分ぐらいに家を出て……。 (帰宅時間は) 最近は10時、11時、12時くらいですね。」

仕事が忙しく、自分の時間がとれないことに不満を感じている。

「上を見ていると、上司とか、夜遅くまで働いていて、上司って、自分が昇進していったら、将来、なる姿じゃないですか。そういう人たちが夜の12時ぐらいまで働いているのを見て、なりたいたいと言えば、さすがにお断りしますという感じなので。(その上司の年齢は?) 35ぐらいですね。(10年後ぐらいの自分の姿が) あれだったら絶対嫌ですね。(上司たちも、12時まで働くというのは) 本来、あるべきじゃないと思ってやっていますが、やっぱり企業顧客を相手にする会社ですので、納期とか、そういうのを考えるとそうなっちゃって。」

会社の状況の今後まで考慮すると、転職することも考えている。

「会社の体制も、裁量労働制になって、みなし残業になろうとしているんです、今、うちの会社。それもあって、残業代が20時間ぐらいで上限で、そういう会社さん多いですけどね。でも、それだったら、もう少し労働が軽いほうがいいですし、やっぱり自分の時間は欲しいですから。……別に会社を変えようと思っているのは、私に限った話じゃなくて、結構いろいろな人から話を聞くと、裁量労働制になるんだったら、この会社に見切りをつけようという人は中で多いですね。」

## 副収入

年収は700万円だが、会社の給料は500万円。仕事とは別に、海外のソフトを日本語化（ローカライズ）するプログラムを作成し公開するサイトを個人で運営しており、このサイトのアフィリエイト広告の収入が200万円くらいある。サイトの運営は浪人していた予備校生時代に始めて、現在まで9年にわたりずっと続けている。

「パソコンが好きだったので、パソコンのいじり方はわかっていたくらいで、予備校時代に読んだ雑誌にこれのやり方が書いて、何かできると自慢できちゃうぞとかという感じの内容だったんですけど。それで自分でやってみて……。」

このサイトには、現在1日1万3,000から、休日だと1万8,000ぐらいのアクセスがある。ただ長くやっていることもあり、サイト運営にかかる時間はさほど長くない。

「(サイト運営の作業は) 帰宅後にやったり、休日にやったりして、大体1回、最近は面倒くさがっているの、30分とか、多くて1時間ぐらいでやって更新しちゃいますね。(短時間でできるのは) 慣れがありますね。さすがに9年間やっていると、大体、生活の一部として更新が組み込まれちゃっているの。(続けられている秘訣は?) 惰性です。惰性しかないですね。」

ただ、アクセス数が多いため、多数のアクセスに対応できるようなサーバーをレンタルしており、その分維持費は高く(「結構、お金をつぎ込んでいるんですよ」)、アフィリエイトの収入がすべてそのまま利益になっているわけではない。それもあって、この収入をメインにして生活するといったことまでは考えてはいない。

## Uターン志向

こうした中で、今の会社を辞めて出身地にUターンすることを、半年ぐらい前から考えている。東京で、同じ業種の他の会社に移っても大きく状況は変わりそうにないためUターンを考えており、また出身地で今と同じ仕事をするのも難しいのが実情であることから、今とはまったく異なる仕事をするようになってもいいと考えている。単に転職するというよりは、Uターンすることによってライフスタイル自体を変えることが意識されている。

「(出身地で生活の基盤を) 構えたいですね。もうちょっとスローライフで。最近、ちょっと週末、土いじりしたいんですよ。昔、小学生のころに、自分で家に土を耕すところがあったので、勝手に畑を耕して野菜を植えたりしていたんですよ。最近、週末、野菜を買って、自炊したりしているんですけど、やっぱり東京の野菜っておいしくないんですね、スーパーに売っているのは基本的に。もう自分でつくりたいなみたいな願望があるんです。」

「(Uターンへの関心も、仕事の面というよりも) どちらかといえば自分の生活スタイル(を重視するからこそ)。今の大学生とかはみんな、就職は大体、給料がよくて、大手企業でというので、自分もそうだったんですけど、やっぱり3年目ぐらいになると現実も見えてきて、自分の生活スタイルってどうすればいいんだろうという考え方に入ってくる時期にあ

りますね。今、ちょうど入社4年目なんですけど。(今の時点での理想は?) 田舎でスローライフ。(土いじりしたりしながらという感じが) 理想ですね。」

「(今の) 生活スタイルは変えたいと思っているので、今の企業にいる限りは(変えることは) 見込めないの、自分からいる環境を変えるしかないですね。(ライフスタイルを変えるのは) できれば1年から2年ぐらいのスパンでやりたい。ただ、……(出身地で何ができるかを積極的に探るという段階) まではまだいっていませんね。」

それでも、Uターンしてどんな仕事があるのかは、それなりに調べている。公務員の採用試験にも、既に応募している。

「(出身地の) 求人情報を見ているんですけど、(理系の仕事だと) やっぱり下請けとか、そういうのしかないんですね。……転職サイトとかに登録して、ぴらぴら見ているんですけども、やっぱりいいのはないですね。転職がないのをやっぱり探しているんですけど、ないんですよ、なかなか。社会人をやっている限り、会社の都合で飛ばされちゃうので、ほんとうに転職が嫌だったら、自分で事業を起こせという話になっちゃうんですけど。」

「とりあえず手始めに公務員試験ぐらいは受けてみようかなと思うんですけど。受かる気はしない、記念受験ですけどね。地元の市役所。実は願書は出しているんですけど。一般事務職という感じで募集しています。(中途採用という枠はなく) 新卒扱いですね、28歳未満というくりだったので。いけていないですね、あの採用は。もう少し、社会人経験ある人とかを入れて多様化を目指したほうが、行政としてはいいと思うのに、最初から経験浅いような、何も経験していない人とかをいっぱい入れて、行政の将来になるかと言われたら、そうは感じないです。(採用試験は) 来月です。公務員の試験問題集をやってみたんですけど、うーん、何かというのがあったので。知っているか、知らないかの世界ですね。何か勉強する意味を感じなかったの、やめちゃいました。それだったらもっとやることがあると思う。本を読むとか、もうちょっと自分の視野を広げるほうに時間を割きたいので。」

### 3. 家族

家族構成は両親と弟。父親は高校教員をしていたが、自分が就職したときにちょうど退職。母親は専業主婦。弟は今も実家で両親と暮らしており、土建の仕事をしている。

父親は物理などを教えていた。「(そのことは、自分が理系方面に関心を持ったことに関係が) あると思いますね。私が小学校のころに、親が学校の実験室に連れていってくれて、いろいろ見せてくれたんですよ。やっぱりそういう関心は少なからずありますね。ちょっとかたい父親でしたけど、いろいろやってくれたと思います。」

「(進路の選択の際に、両親から) 反対はされませんでしたね。そこは全くされませんでした。……アドバイスもなかったですし、ほんとうに、今思えば、何も言われていないです。あと、多分、(自分が) 地元志向だったので、仕送りとかもなかったから、経済的に負担がなくて、親にとってもよかったんじゃないですかね。」

「最近、祖父とかも亡くなって、(将来的に) 親も亡くなるから、今まで育ててくれたから恩返しをしたいとか思う気持ちもあって、戻りたいというのはありますね。」

### 東京のいとこの存在

東京に住んでいる同じ年の親戚(いとこ)がいて、身近な関係が現在に至るまで続いている。東京への就職や、Uターンを考えることなどにも、そのいとこの存在が影響している。

「(東京周辺に親戚はいるか?) 親戚、東京と、あと、千葉にいます。東京の親戚には月一ぐらいで泊まりに、遊びに行ったりしています。いとこの家です。(子供のころから仲がよかった?) そうですね。もともと東京に来る前から仲がよかったので、その親戚は。」

「(そのことが、東京の会社に就職しようと思ったことに影響したか?) それはありましたね。困ったときに頼れるというのはやっぱり気持ちとしてはありました。それがなかったら東京を選んでいなかったですね。」

Uターンのアイデアも、このいとこと話すことがあるという。ライフスタイルを見直そうという考えも、このいとこの姿を見ていることが背景にある。

「Uターンのアイデアは、最近、いとことよくそういうのを話しますね、生き方とか。(いとこは) 今、都内で薬剤師をやっています。もともと東京生まれ、東京育ちで、東京就職なので。彼の生活スタイルが私と対照的で、定時で帰れて、自由に時間があるという感じなので、やっぱりそういうところから生き方については大分考えさせられます。何かSEをやっているのがばかばかしく思っちゃいますね。何でこんなに命削ってやっているのにといいはあります。(収入の面では、自分の方が) 上ですけど、自分の時間がない上での、犠牲を払った収入なので、ぶっちゃけ、定時で帰れるんだったら、収入は大幅に下がっていいと思っているんですよ。」

このいとこからは、新しい提案も受けている。

「いとこから、何かビジネスをやってみないとかという話も来ていて。ちょっと親戚同士でやるという恐怖感はあるんですけどね、身内同士でやって、こじれたときの跳ね返りが怖いというのはあるんですけど、仮に失敗するにしても何かやってからのほうがいいかなとか思ったりしているので、ちょっとそこでタイミングは揺れています。」

## 4. 結婚

現在恋人はいない。将来的に結婚したいという思いはあるが、Uターンすることとの関係も考えている。

「(結婚は) したいですね。ただ、ほんとう将来的という話で、今、例えばUターンとかするとなるとやっぱり一人のほうが動きやすいので、とやっていると、そのうち時期を逃して独身とかなっちゃうような気がするんですけどね。」

## 5. 趣味

休日は音楽鑑賞（クラシック）。これも U ターンへの思いとつながっている。

「土・日だったら、土曜の午前中で大体、家事を全部終わらせちゃって、最近、私、クラシック好きなんですよ、ぼけーっと音楽を聞きつつ、あとはホームページを更新しつつ、それが飽きたら買い物へ行ってとか、そんな感じですね。あと余裕が、タイミングが合えば、クラシックコンサートへ行ったりとか。」

「大学時代にホームシアターセットが欲しくて、バイトして、安いホームシアターを買ったんですよ。サラウンドの音楽が鳴るやつだったんですけど。2万円くらいのちゃっちゃいやつですけどね。それ買ったら、ホームシアターはサラウンドだから、サラウンドの音楽が聞けるソフトが欲しいと思ったんですよ。それで買ったのがそのソフト、クラシックで、そこからはまっちゃいましたね。」

「地元に戻りたいという話であるんですけど、やっぱり地方って文化的なものが弱いので、そういう何か文化をもたらすものみたいなのはやりたいなみたいのは感じているんですけども。東京でよくあるんです、名曲喫茶みたいな、音楽を流しながらコーヒーを飲めてみたいな、ああいうのが地方って全然ないので、そういうゆったり空間でのんびりみたいな、やってみたいですね。……コンサートとか行くと、やっぱり東京の人たちって、何かあまり真剣に聞いていないんですよ。地方の人たちって、回数も少ないから、ものすごい真剣に聞くんですよ。だから、潜在的需要はあると。」

「結構、CDを買うので、大体、部屋に置けなくなると実家に送りつけて、親に聞いてもらって、その繰り返し。結構、CDをばんばん買っちゃって、量が今、1,000枚以上になっちゃっているんです。さすがに処分に困っているんで、将来的には何かどこかの図書館とかに寄附しちゃって、そうすれば、私の社会的役割にもなるのかなみたいな感じではいます、文化をもたらすという意味で。」

## 6. 震災

U ターンというアイデアには、震災の経験も影響している。

「私、江東区に住んでいるというのもあるので、ちょっと住んでいるところが危ないなというのがあります。……（液状化は）自分の住んでいるエリアは大丈夫でした。隣の地域のほうは結構、砂ぼこりが舞ってましたね」

「（地震は、将来のキャリアを考える上で大きかったか？）大きいと思いますよ。東京というのは、世界一災害危険度が高い都市でもありますし、ほんとうにあのクラスが襲ってきたら、もう生きるか死ぬかになっちゃうと思っていて、ちょっと大げさな話ではありますがけれども、そういうリスクも考えると、やっぱり東京にいるのって、そういう意味でも危ないのかなというのを感じていますね。」

「（震災の）当日、たまたま家にいて、さあ出かけようというときに地震が起きてきたので。（帰宅難民に）ならなくてよかったです。」

## Eさん

29歳女性。東京近県で生まれ、幼稚園のときに都内に転居し、そこで育つ。第一志望だった教育関係の会社に就職し、やがては教える仕事につきたいと思いつつ、配属された営業の部門で働くが、入社後半年を待たずに、望んでいた教育の部門に異動する。地方と東京での勤務を経た後、父の仕事を継ぐことを考えて退職。父の仕事を学ぶ合間に、とって非正規の事務職員として勤め始めた個人指導の塾で、過去の経験もあって再び教える仕事に登用される。結婚が決まったため、父の仕事を継ぐことは一旦凍結し、ペースを抑えながら塾の仕事を続けている。

### 1. 学校時代

地元の公立小学校・中学校を経て、都立高校の外国語コースに進学。その高校を選んだきっかけは、「(習っていたピアノの教室が)ちょうどその高校の近くにありまして、たまたま」。英語の勉強と水泳部の部活に熱心に取り組む高校生活を送る。

「そのときから大体その学生さんとかが……漠然とした感じなんですけど、雰囲気とか結構気に入って、パンフレットを見たときに、そのときも英語がすごく好きで、その高校は外国語コースというのが、都立のわりには珍しくそういうコースがあったので、それも含めて全体的に雰囲気もよさそうだなというのと、レベル的にもそんなすごく高過ぎず、まあ、頑張ればぐらいな感じも、場所も近いと結構条件がそろったので、そこにしたいなというのが最初のきっかけで、それで、一番はやっぱり英語がそれだけ学べるんだっただけというので、第一志望に決めて。」

「(高校は) やっぱり英語の授業がメインで、約半分近く英語の授業だったので、ほんとにネイティブの先生とじかにしゃべったりとか、そういう授業もあったので、すごい充実していたというのと、あとは私の中では部活も、水泳部に入っていたので、それも小さいころから習っていたというのもあって、水泳部にも入ってみたいというので、なので、部活と勉強と確かに忙しくて大変なときもあったんですけど、それ以上に今思えば充実していた3年間だったなというのはありました。」

### 進路選択

高校は外国語コースだったが、大学の進学に際して、外国語と特に関係のない分野に進む同級生も少なくなかった。自身も、教育関係の仕事につきたいという思いから進路を考えていった。たまたま、自らの関心や条件に合った大学の指定校推薦が得られることがわかり、推薦でその大学に進学する。

「高校時代に興味を持ち始めたのが、私はもともと小さい子がすごく好きなので、教育関係とか、幼児関係の勉強とか、将来はそういう仕事とかについてみたいというのはあったので、それに生かせるような大学かなとまず大まかには考えていまして、そのときに母のアド

バイスもあったんですけど、そういう教育関係につくのであれば、心理とか、そういうのも学んでいたら何かしら役に立つんじゃないか、もちろん子供だけじゃなく、親御さんとか、大人とも接するわけだし、一般の社会に出たときでもそういうのが役に立つんじゃないのかというアドバイスを受けて、私もそれがどういう世界なのかなと全く、嫌だなという拒否反応はなかったの、そのまま結構すんなり受けたので、じゃあ、心理を学べて、なおかつそういう保育系の免許とか、資格とかが取れたら一番いいよねという話をして、そういう感じでパンフレットとか、資料を見たり、あと、高校の進路相談とか行ったときにそういうところで聞いたら、私の行っていた大学は両方できるよ、こっちで心理の勉強をしながら、免許も取れてできるよというのを聞いて、それじゃ普通に受験しようと思っていたので、センターを受けるとかいろいろ考えたんですけど、その高校がたまたま指定校推薦をとれますということで、それで入れるのであればということで、評定とかを見てもらって、だったら大丈夫ですということで、なので、急遽試験を受けることになって、推薦で。」

## 大学時代

進学したのは、人文学部児童学科。資格取得の関係で、多くの授業に出る必要があり、勉強で忙しい毎日を過ごす。

「もうほんと朝から晩まで正直忙しい、中高より忙しかったかなというぐらいな4年間で、1限から6限までが毎日という感じで。本来の単位数だったら、普通に4限ぐらいで1日とか、半分ぐらい休みになったりとか、私もそういう学生生活だったと思っていたので、楽に遊べたりとか、バイトできたりとかするんだと思っていたんですけど、やっぱり両方とるといので、資格を取る授業を含めると、普通の卒業単位数の1.5倍近くの単位をとることになると、時間数を組み合わせると結構……。 (かなり授業に打ち込んだという大学生活?) そうですね、はい。」

## 就職活動

児童学科ということもあり、幼稚園や保育園などへの就職が多い中で、そのままそうした道に進むのは、世界が狭くなってしまうかもしれないと思った。そこで、学んだことを生かせる一般の企業に就職することを考えるようになる。

「私の中ではそれは正直、もちろんそれ (幼稚園や保育園への就職を視野に入れた授業や勉強) はそれで楽しかったし、就職につなげてよかったんですけど、狭くなっちゃうかな、社会がそれだけの感じになっちゃうかなというのが、先入観というか、何かがあって、だったら、理想を言えば、就職が難しいとか言われている時代ではあったんですけど、これを生かした、社会に、普通の一般企業とかに勤めて、教育関係とか、そういうので学生時代学んだこととかを生かせる職業をまず探してみて、それで、ほんとになかったり、入れなかったり、できなかつたりで自分なりにあきらめがついてであれば、そういう幼稚園だったり、保

育園だったり就職すると、とりあえず悔いがないようにやってみようかなとか思って、もう無理なのは承知でいろんなところからの会社にエントリーシートを送ったりとかしたんですけど、運よくというか、そこで、企業のほうで採用していただいたので、結局そっちなほうに行かなかった。」

そのため、就職活動は同級生から離れて一人で進めていくことになる。

「ほんとに個人的にパソコンで、あとは、何でも送ってもらって、どんな感じの会社かというのを自分で調べて、でも、この辺だったらという感じでエントリーして、出さないことには無理かな、1人50社、100社とかいうのは当たり前ぐらいのときだったので、自分にそんなすごい能力が云々とかいうわけでもなかったんで、数こなさないと無理だろうなと思っていたので、そうしたら、来るところ来るところからとりあえず出そうみたいな感じでいたんですけど、結果的には運よく1社目でという感じで。」

「(応募する会社を選んだ基準は)自分の考えと似ていた考え方というか、子供に対してだったりとか、教育に関して何か価値観的なものが似ているとか、あと、仕事の内容が、ただ単に会社という中でも何となく教えたりとか、そういうのをしたいとかいうのも、やってみたいというのがあったので、もちろん入社してすぐにはできないけれども、何年間か学んで、営業とか、そういうのをやったらそういうこともできるという、確定ではないんだけど、そういうことも可能性としてはありますというのだったり、というのがやっぱり、会社の考え方が一番自分と似ているなというので幾つかエントリーをして、優先的に。」

最終的に、第一希望だった、教育関係の事業や出版をしている会社の内定を得る。第一希望だった会社から最初に内定が出たため、就職活動は非常に短いものになった。

「(就職活動期間は)短かったですね。パンフレットとか集め始めたのが年末、秋口ぐらいで、たしかエントリーを出したのが2月ぐらいだったと思うんですよ。決まったのが、4年生の4月で。2月からなので、2カ月ちょいぐらい。ほんとうまくいくわけがないと思って、「こんなうまくいったって最後にどーんと来るんだよ」とか周りに言われて、私もそうだと思っていたので、次の会社の面接のスケジュールとかを組もうとしていた矢先にだったので。」

## 2. キャリア

入社した会社では、最初に1年半営業の仕事をやること、かつ地方の勤務になることがあらかじめ知らされていた。それを終えてからなら、もともとやりたいと考えていた教育に直接関わる業務に配属される可能性もあると伝えられ、望んでいた仕事ではなかったが取り組んだ。

「私は最初営業で1年半とかやってもらいますという条件だったので、最初から東京じゃなくて地方勤務だったので、その初めてというのと社会人としての初めてというので、もうほんととあつという間に過ぎたみたいな感じで、営業は、自分は全くそういう関係のことは、どっちかといえば苦手なほうだったので、もう言われるがままというか、言われたとおりにやる

感じで、そういうときは正直つらいときも確かにあった分、逆にアポイントをとれたとか、やっぱり今まで以上にすごくうれしいとか、達成感とか、何かそういうのもあって、つらいのもあったんですけど、だからといって別にやめたいとかそれはなかったんですよ。それが普通とか、これは仕事としてやらなきゃいけないことなのかなと多分日ごろ中で思っていたのか、何もかもがほんと初めてだったので、こういうのが普通なのかな、何か比較できるものもなかったんで、でも、ここで頑張れば、もしかしたら興味のある部とか、に行けるかもしれないというので何とか乗り切ったかなみたいところが今思えばありました。」

興味をもっていて、やがてはその仕事をしたいと思っていたのは、「指導部」の仕事であった。それは、毎日子供にファックスでプリントを送り、返送されてきたものを自分が添削して送り返して勉強を習慣づけ、加えて週1回はその家に電話をして、保護者に勉強の内容などを報告するというもので、その際に保護者からも子供の取り組む様子などを聞き、翌週以降の指導の方針を調整する、という形で進められる。中学生以上の場合は、夏休みや冬休みに希望者に対して塾のように講習を行うことがあり、そこで教えることも含まれる。

実際には、4月の入社後、しばらく関東地方のある県で営業の仕事をしたが、1年半も経たないうちに、幸運にも急遽この「指導部」の仕事に異動することが決まる。7月に1カ月間の研修を受けて、8月から九州に赴任し、そこで「指導部」の仕事について。転勤自体はあまり深く考えていたわけではなかったが、絶対に都内や自宅からがいいという考えもなかったという。九州という、東京から離れた場所での勤務になったが、自分がやりたかった仕事ができることの方が大きかった。

「(仕事の内容は)確かに塾とかと比べれば教えるという内容のあれでは、全然規模としては違うんですけど、自分の好きな子供と接するだったりとか、そういうところではほんとにやっぱりこっちのほうが向いているとか、好きだなとか、もちろんつらい、大変なこととか、仕事なのでやらなきゃできないこととか、こなさなきゃいけないこととか、時間外とか、そういうのも、正直きついときもあったんですけど、それを乗り越えられたのはきっとそれ以上に何か自分の中で楽しかったりとか、苦でない部分のほうが強かったかなとは思う。」

九州で1年半ほど勤務した後、東京の「指導部」に移る。数年後に退職するまで、そこで勤務を続けた。

## 退職

父親は保険の代理店を営んでいた。母親は専業主婦だったが、父が多忙なときにその仕事を手伝うという形で関わっていた。退職という選択の背景には、一人娘である自分が父の仕事を継いでもいいという思いがあった。

「それ(父親の仕事)を自分が継いでもいいかなというのもあって、それと時期的なものも

あって、やり始めるんならもうそろそろかなというのあって、それで、時期と父親のほうの、もしするのであれば、研修だったりとかいうのを含めると、結局一人前としてなるにはそこからまた何年もなので、自分もいずれ結婚したりとか、家庭を持ったりとかしたらまたできなくなったりとかとなると、今のうちにしておいたほうがいいのかとか、いろいろ、漠然とではあったんですけど、家族とも話して、じゃあ、そろそろそういう時期なのかなというので、だったら研修とかでも丸一日というわけではないけど、時間があいたときに仕事をやれるような感じで、正社員にはなれないけども、派遣とか、そういう感じだったらやれるんじゃないかというので。」

### 塾での仕事

保険の仕事を引き継ぐことを視野に入れて、その勉強をしながら他の時間は調整がつきやすいように、正社員ではない形で仕事をしていくことを考えて退職した。しかしその後結婚が決まったため、保険の仕事を引き継ぐことはひとまず先送りになり、当面は結婚後も現在の正社員ではない形の仕事を続けていくことになった。そこでどんな仕事をするかと考えた時、やはり教えることに関わる仕事に心が向かった。

「教えるということがやっぱり好きだったのと、前のときにファクスとかで間接的な感じだったので、それをやっているときに子供がだんだんできるようになったとか、親御さんから「やっているうちにできるようになったんです」とかいう報告を受けると、自分が何をやったわけじゃないけど、少しでもそれで役に立っているとか、そういうふうに言ってもらえるのがすごくうれしくて、間接的にそうやって携わるんだけど、そうやって直接やってきているのも、実際夏期講習とかで生徒と会って話したりしたときにそれが楽しいな、おもしろいなと、直接質問できたりとか、話したりとかいうのもしているのは楽しかった。そういう関係であるかなと思って探して。」

現在の仕事は、ハローワークで探した、個別指導の塾の仕事。ただし当初の仕事内容は事務だった。望んでいたのは教える仕事だったが、同じ事務をやるなら一般企業よりも教育関係の方がいいと思い、事務の仕事で半年ほど続けた。その過程で、前の会社での教育経験を話すなどしている中で、事務ではなくその塾の個別指導を担当してみることを打診される。一時は事務をやりつつ、人手が足りない時は指導もするという形だったが、やがて後者がメインになり、現在では指導の仕事だけを担当している。また、この塾の会社は家庭教師もやっていたため、家庭教師の仕事もやるようになり、現在ではそれが中心になっている。教えている(いた)のは、小学生から高校生まです。

幼稚園や学校で教えたくないというわけではないが、集団よりも個人に対して教えるという、これまでやってきた指導の形は自分に合っていると考えている。

「集団でいると、個人となったときに、集団だと正直目に入れられる範囲がほんとに限られてくるんだなというのがつくづく実習だったりとかで感じたのと、あと、友人で実際にそう

いうのについている人もいるので、やっぱりそういう話を聞いたりとかすると、本来の業務以外のこととかもちろんそういうのも出てきたりとか、それはやむを得ないことなので、それも確かにしょうがないことなんですけど、なので、そうなったときに集団だったら、個人個人、一人一人それぞれに応じた何か指導とかのほうは私はまだ見られるかなとか、自分でもそっちのほうに向いているのかな、この子にやりつつこっちもやってとか、自分がそれこそパニックになって逆に周りに悪影響なんか及ぼすようなあれだから、自分がだったらその子に完全につきっきりになって、その子のことをわかった上で、前やっていた心理とかも生かしながら、その子のタイプとかわかりつつなおかつ指導もできるというほうが自分には合っているのかなとか思って。」

### 3. 家族

小学校のときから多くの習い事やっていた。「ピアノ、水泳、あと、期間は短いんですけど、英語教室、習字、合唱と、一番多いときはそれだけやっていましたね」。ピアノは大学卒業まで続け、今でも趣味で弾いている。水泳も、高校で部活に入るなど熱心に取り組んだ。

「ピアノはどっちかといえば、父親が、自分が聞いたのを自分の子供にも弾かせたいなという思いがあったのと、あと、水泳は母がやっぱり、自分が泳げなかったというので、別にそんなプロとかのあれじゃなくて、最低限だけは泳げたらいいだろうなというので最初習わせたみたいなんですけど、それ以外は私が興味を示したとかで、英語は確かに将来ちょっとこれから必要になってくるだろうというのを見越して両親が、知り合いの人だったんですけど、基本的なものとかだけ、簡単なことを教えてもらったみたい、あんまり強制的にとというのはそんなになかった。……（両親は）ほんとに好きなこととか、やりたいことは結構やらせてくれましたね。できる範囲でというか。結構、それは今では感謝していますけど、はい。」

#### 就職のときの判断と親

就職のときは、自分の判断で決めたが、両親はその判断を尊重してくれた。

「もちろん（親に意見を）全く聞かなかったわけではないんですけど、仕事の内容とか、そういうのは別に両親も言わなかったというのもあるんですけど、私が多分聞けば何か答えるぐらいの感じで、基本的には私をすべて尊重していたので、自分が勤めるんだし、自分がやりたいことを見つけてやってくれればいいかなという感じで、ほとんどあんまりタッチもしなかったです。（学校の先生からも）アドバイスとかは受けてはいたんですけど、かといってそれをすべて100%うのみにしていたかという、そこまではしていなかった、あくまでも参考程度みたいな感じで、先生のと、進路相談の方の話を聞いた上で、家で親と話して、それをまたもとに自分で結局決めたみたいな感じが多かったですかね。」

地方に転勤することについても、否定的に言われることはなかったという。

「正直九州に行ったときとかは「そんな遠いの？」という、ちょっと驚きはあったみたいな

んですけど、そういう会社に勤めた、だったらその時点で反対をしても、そのときにしていればというあれだったんですけど、それを言ったときにも、あなたが、私が決めたことなのだったら、それはやむを得ないこと、父は自分がひとり暮らしとかをしていたので、女の子でもこれから女性社会とかいうので、自分で何でもやれるとか、そういう意味ではすごい、どっちかという応援するほうなので、昔からあんまり、一人っ子という結構過保護的な感じに思われるんですけど、うちは小さいころから全然そういう感じではなかったもので、逆にいろいろなものをそれこそ吸収させて、いろいろなものをやらせてという感じだったので、多少心配なかった、寂しくなかったといえようそののかもしれないんですけど、私は別にだめとか、何で行くのかとかいうのはなく、頑張ってくればみたいな感じで、そのかわり帰れるときがあれば帰ってくればぐらいな感じで、どっちかといえば応援してくれた感じですね。」

#### 4. 友人関係

学校時代の友人関係とは今でも連絡をとっている人が多い。高校・大学とも、同級生の多くとは異なる方面に卒業後進んだが、そのことは影響せず、今も友人として普通に付き合いがある。

#### 5. 結婚

質問紙調査に回答した時点では決まっていなかったが、このインタビューの時点までの間に、2つ上の都内勤務の男性と結婚することが決まる。

相手と知り合ったのは、調査年の2月ごろの「合コンパーティーみたいな感じの」集まりがきっかけ。友人と行くことになっていたが、行く途中その友人から体調を崩したという連絡が入る。キャンセル料を払うのも…と思いそのまま参加したが、その会で相手と知り合う。相手もまた、人数が足りなくなったため声をかけられ、乗り気ではなかったが参加した。たまたま帰りに一緒になり、話をすると似ている部分が多いと感じたのがきっかけになったという。

その後「自然に」結婚しようということになり、11月に式を挙げる予定になる（このインタビューは7月）。結婚後も、当面は今の仕事を、担当人数や日数などを減らしつつ続けていく意向。

「(結婚後、子どもができたら) やっぱり自分が子供とかに携わっていた部分があった以上、余計に自分の子供は自分で見てあげたいなというのが何かあって。(純粋な主婦になりたい?) できることなら。ただ、経済的なことだったり、相手の考えだったりにもよるけれども、まだ全然ほんと結婚とか、そういうのがないときから、もし自分がそういうことになったら、自分はできるんだったら、条件がそろうんだったら、自分の手で育てたいなという思いはあったんです。でも、どうしてもそうせざるを得なければやむを得ないなと思って、そ

ういう話もしたときには、彼もそういう考え方だったんですよね。それで、それができるんだったら、そうしてくれていたほうがいいと。……ほんとにそういうことがあるかどうかはわからないんですけど、そうなったときには多分一時休みというか。今の仕事がたまたま運よく休業とかいうよりかはいつでも復帰できるような形態に一応なっているので、だから、会社にもそれは伝えた上でという感じにはなると思うんですけど。……（塾という、午後から夕方以降が勤務時間になる仕事なので）多分（子どもが）小学校とか行かないと無理なのかなという感じ。」

## 6. 父の仕事を継ぐかどうか

結婚が急に決まった中で、父の仕事を継ぐかどうかについての考えも揺らいでいる。

「このご時勢……（父の仕事をめぐる環境が今後）どうなるか、全く想像もつかないとかいう、自分自身がそういうふうに言われてきつつある中で、それで、（父がやっていた頃と同じ環境が続くとは限らない中で）私がそういうことをする（引き継ぐ）のは（父にとって）申しわけないというか、そこまでしなくても、別に父としては残したいとか、全然そういうあはれないと（父は言っていた）。逆に私がそういうふうに（継ぐと）言ったことのほうが（父は）びっくりしたぐらいだったので。」

そもそも継ごうと思ったのは、自分自身が営業を経験したことがきっかけだった。

「今の父のお客というのは父親自身が何か営業でいろいろやってきたお客さんたちなので、その人たちのおかげで今の自分たちもあるみたいな感じを社会人になってから気づかされて、やっぱり営業のとき正直きつかったり、つらかったりというのを経験したので、それをもし父がやめたりしたときに手放すとかなので、ちょっとどうなのかなと思ったときがあって、そういうんだったら、自分がもしやれる内容、やれる業務というか、やれることなのだったら、やってみてもいいかなと思って、親に話をしてみた。……（父が努力をして開拓してきたお客さんなのに）全然違う人のお客になっちゃうんだったら、それが自分のできることなんだったら、自分がやってもいいかなと思うようになったので。」

結婚など、自分の状況も変わる中で、継ぐ話は「とりあえずはいいかな」と考えている。

## 7. 震災

震災の時期と、結婚相手との出会いの時期が重なったので、震災がすべてではないにしても、転機になったのは確かだと感じている。

「（出会いの時期が）まさにそれ（震災）ぐらいのときだったので、それで価値観が変わったというか、そういうことがあったから自分の中でもいろんな、今まで感じていなかったこととか、感じなかったことが感じるようになったりとかなので、それが地震なのか、その出会いだからなのか、自分たちでもよくわからない部分もあるんですけど、多分もしかしたら両方があったからそういうことになったのかとかいろいろ、まさにあの時期、ほんとにあのと

きという感じだったので。」

## 8. その他

順調に人生を進んできたように見えるが、節目節目で自分自身で決めてきたという実感がある。また、先にめざすものがあつたからこそ、めげることなく進むことができたし、教えることに対する関心は早い段階からあつて、そのやり方は仕事の中で変わっていったものの、その関心自体はずっと保持していた。

「中では自分で、挫折まではいかないですけど、努力だったり、確かにきつところはちょこちょこ、一つ一つ大きなまとまりで見ると順風満帆で来ているなど自分でも納得することはするんですけど、だからといって全く何も考えずにというか、言われるがまま来たかと言われると、それほどでもないなみたいな。どっちかという、頑固な部分があるので、結構自分の意見とかを、人の意見も聞くんだけど、結局最後は自分で決めちゃうみたいなのところがあるので、自分が違ったときとかもだれのせいとかというわけではなく、自分が違ったんだなみたいな感じにはなるんですけど。」

「多分一つ一つこれをやりたいからこうしたとか、ここに入ったとか、その営業とかも確かにやめちゃえば簡単だし、楽になるし、で、全く思わなかったかといったらそれはうそだったのかもしれない、自分の中でもほんとに嫌いになっちゃったので、全く思わない日がなかったかと言われるとうそになるかもしれないんですけど、それはきっと今が試練のときなんだと思った部分と、あと、何年後かにそういうことを自分ができるんじゃないかという、確定はないにしても、いや、できるだろうという望みを持ったのと、せっかく入れたんだしというので、まだ入って間もなくだったので、その後どうなるかわからない、これが何年も続いていって、ずっとこういう状態だったらもしかしたらめげていたかもしれないんですけど、始めたばっかだし、これがずっと続くのか、それとも今だけなのかもわからなくて、見切りをつけるのは早いのかなとかみたいな感じはあつた。先にやりたいことがあつたから何とか我慢できたのかなということはあるかなと思います。」

周囲の人間関係がよかったことも、続けられた一つの要因だったと考えている。

「確かに……人間関係もよくないと多分やれないというか、あれもあつたと思う。先輩とか、上司の方もすごくよくしてもらつたというのがあります。」

## Fさん

26歳女性。専門学校卒。生まれ・育ちともに都区内東部で、現在勤務している職場も、実家の近くにある自身の出身幼稚園。幅広い交友関係をもつ。

### 1. 学校時代

通っていた地元の中学校は、1学年5クラスで、全校でおよそ600人の生徒がいる学校だった。地元を含む通学区域が荒れていたこともあり、Fさんは、都心部にある全学区の高校に行きたいと思っていた。中学時の部活に関しては、1年時に運動部に所属していたものの、仲のよかった友人を含めていじめにあい、2年時に別の運動部に転部した。

高校進学の際に中の上程度の学力だったFさんは、推薦入試は不合格だったものの、1日8時間以上の受験勉強を経て、一般入試で無事に希望の高校に入学した。小学校3年時から一緒だった親友（上の上の成績。推薦入試でFさんより先に合格）と一緒に学校に通いたいという思いも、受験勉強に励んだ理由として大きかった。

高校時代はダンス部に入り、週2回の活動の他に、前述した親友と公園で自主練習に励んだ。これとは別に、高校にはボランティアをするゼミが週1回あり、そこに参加して、土日に老人ホームなどにボランティアに行くこともあった。また、放課後はスーパーのレジ打ちのアルバイトをしたり、期間限定で学童保育や児童館で働いた。後者のアルバイトは、進路選択に悩んでいたFさんの現場を見たいという希望から、担任の先生のアドバイスを受け、母親を介して紹介されたものである。

### 2. これまでのキャリアや働き方について

#### 学生時代の進路選択

幼稚園の先生になろうと初めて思ったのは、小学校のときだった。幼稚園のときにお世話になった先生が好きだったことや、子どもが好きだと思ったことがきっかけだった。祖母が長期にわたって入院していたこともあり介護職に関心をもったこともあったが、高校3年で進路を考える際には保育も含めた現在の道を志すことに決め、専門学校への入学を選択した。

高校の進路指導時には教師に大学や短大も勧められたが、Fさんの決意は固かった。

「大学、……4年かけるか、2年かけるかで同じ資格が取れるなら、私はすぐにでも保育士をやりたいからと。高校のときにアルバイトで、学童保育と児童館のアルバイトを担当の先生から紹介してもらって、やっていたんですよ。だから、今すぐ私は現場に出たい。だから、2年間で取れる資格を4年もかける必要はないと思うと言って。……4年かけて取るんだったら、その間に何か、大学の友達の話とかを聞くと、結構遊んでいるじゃんみたいな、バイトに励んでいるとか。いや、別に私、そんなバイトに励むんだったら、現場でどんどん経験したいし、と言って。」

高校3年時のクラス約40人のうち、多くが大学に進み、専門学校を選んだのはFさんを

含め3人程度だった。そうした状況で専門学校を選ぶことに抵抗を感じる瞬間も多少あったが、クラスの雰囲気がかかったことや先生方の応援、学校名よりもその内実や雰囲気に目を向けて進路を考えている周りの姿を見たことで、自分で考えたとおりの進路を選択した。

専門学校見学時に勉強、部活、行事どれもが盛んな雰囲気が高校に似ていると感じたことや、高校選択のときも自分で見学に行って決めて充実した高校生活を送れたことなどを理由に、学校を決めた。この学校選びの際にFさんが活用したのは、後でも述べる、路上ライブ通いをきっかけにできた友人関係から得られた情報だった。

「……当時、高1からずっと好きで行っていたから、まわりが高2、高3とか、大学生とかだったので、その中でも結構、保育を目指している人とかも多くて。その人とかに『私も、保育を目指そうか、今、介護を目指そうか迷っているんだけど、ちなみに保育だったらどこの学校がいい?』とか。」

「友達が行っている学校は(説明会に)行きませんでした。……その友達がまさに生徒だから、生の話が聞けるじゃないですか。学校説明会とかってあまり信じられなくて、結構飾っているというか、いい面しか聞けないから、だったら文化祭とかを見たほうが、生徒の本当の姿を見れるし、先生の対応も見れるし。」

### 社会人になってから

専門学校卒業前の就職活動時には、行きたいと思っていた2つの幼稚園の採用に落ちている。Fさんが就職活動をしていた時期は倍率が高く、しかも希望していた地域(現在勤務している地域)は子ども数の割に幼稚園数が少なく、また退職する教員もさほど多くなかった。現在勤務している幼稚園は、Fさんが卒業した専門学校が送った卒業予定学生の名簿の中から幼稚園の先生がFさんの名前(旧姓)を見つけ、縁をもった。2005年から4年間勤めたが、もう少し小さい子どもと関わりたいと思い、円満退社の後に、一時期は保育園に職場を移す。

「せっかく資格を2個、幼稚園教諭と保育士を持っていたので、年少、年中、年長と全学年を見たから、今度はもっと小っちゃい子とかかわってみたいなとか思って……。自分も、その当時、結婚したかったから、いずれ結婚して子どもができれば、そういう保護者の立場とかも同じ立場になるわけだし。勉強じゃないけど、ちょっと行って、いろいろそういうのを経験したらいいかなと思って挑戦したんですが、……」

しかし、上司と馬が合わず、体調を崩して入院した後に、精神面の不調から医師の診察を受け、退職する。その後、他の職種で働くことも考えたが、仕事を探しているうちにやはり保育園・幼稚園での仕事が好きなことに気づく。そして、別の保育園に派遣で勤務するも、派遣切りにあう。この間約1年間だが、正社員として再び現在の職場に戻った。

ヒアリング時点で、Fさんが勤めている職場には12名の先生がいて、1度退職した期間を除いても、ほとんどがFさんの後輩にあたる。離職率は高い。土曜登園がある週も含めると、

週あたり 50 時間以上働いている計算になる。年収は手取りで 200 万円を超えるくらい。

「結局、その幼稚園に勤めた子も 1 年でやめちゃったりしたので。それを考えたら、人間関係もそこそこだし、別に生活できない金額でもないし。去年、結婚してからは 2 人になったから、彼の収入は多少不安定だろうと最低のラインは保っているみたいだから……。 (自身の収入面に関してはしょうがないという感じがあるかどうかについて、) 何より自分が好きな仕事だから、別に……。」

### 3. 交友関係について

#### 小学 3 年からの親友の存在

前述したように、F さんには小学 3 年生からの親友がいる。2011 年春からその親友が教育関係の職業に就いて職場の近くに引っ越したため、以前のように時間が空いていれば遊ぶということはできなくなったが、それでも連絡をして会っている。親友が結婚した相手が地方の出身でいずれ家を継がなければならないので、頻繁に会えなくなるだろうことが悩ましい。F さんにとってその親友は、昔から知っている部分がある理解者であると同時に、新しい発見を与えてくれる存在である。

「趣味は、彼女の場合は私にないものを持っていて、彼女に対して、お互いそうだから、結構、一緒にいると、共感し合える部分と、毎回新鮮な部分があって。あっ、そんなことやっている、えー、おもしろそう、行きたい、行きたいとかが結構お互いにあって。会うたびに、えっ、そんな趣味、始めたのみたいなものがあるから。」

#### 対人関係観の変化

F さんは、調子を崩して 2 つ目の職場を退職した後に派遣で働こうと考えたときに、対人関係についての考え方が変わったと言う。

「1 つの園にこだわる必要はないんじゃないかなというのがすごい自分の中で思えるようになって。そこから結構、人づき合いが変わりました。自分をすごい支えてくれている人の大切さというか、それまでも友達のことはすごい大事にしているつもりだったんですけど、結構、つもりだったらしくて。深い子とはすごい深くつき合うんですけど、その親友だったりとか。だけど、八方美人じゃないけど、浅く、広く……。」

「周りからは結構、友達多いよねと言われるタイプだったんですけど、私の中では、いや、どこまでが友達というんだろうみたいな、ちょっと冷めた感じがあって。今は、結婚式のときも、会場の大きさにこれだけしか呼べない、どうしよう、誰を呼んで、誰をごめんなさいしよう。じゃ、2 次会をもっと大きい会場にして、呼べなかった人を呼ぼうとか、すごい思ったときに、『私、自分のつき合い方変わったな』とすごい自分で感じて。広く、浅くは変わらないんだろうけど、でも、その浅くがもっと深くなったというか。」

## 趣味の音楽から広がるつながり、進路に関わる情報の収集

Fさんにとって趣味の音楽は、そこから広がりつながる人間関係も含め大事なものである。特に関心を持ち始めたのは高校生時代。家が厳しくそれまで1度しか原宿には行ったことがなかったが、高校に入り、同級生と行ったときに、街のおもしろさを感じると同時に、路上ライブにも興味を持ち始めた。

「ダンスを始めて、いろいろなダンスに使う曲とかを聞くようになって。あと、カラオケもはやり始めて、友達とカラオケに行っ。自分が聞かないジャンルの曲とかも聞くようになるじゃないですか。あっ、楽しいな音楽ってというのがあって。……そういう路上ミュージシャンに通っている自分も楽しいなみたいな、そこでつながる出会いもすごい楽しいというのがあって。最初は、その人たちの音楽も好きだけど、そこで出会う仲間と、毎回、違う仲間がどんどん増えていく、その友達の輪が増えていくのもすごい楽しくなって。今は、また別のメジャーアーティストの方のライブとかによく行くんですけど。それでも、やっぱり友達の輪がどんどん広がってって。なので、結婚式も結局、ライブ三昧にして。」

「高校に行ったら、……近いじゃないですか、渋谷も原宿も新宿も。大人じゃんという。『私、原宿行ったことない』と言ったら、じゃ、行こうよと行ったのが最初で。人の多さにびっくりして。上野は魚くさいのに、原宿は香水くさい。『何か安いし、おもしろい。何だここ』となって、2回目に行ったときに。そのときに路上、音楽とかも興味を持ち始めて、路上ミュージシャンとか、ゆずとかいいよねと友達と行ったら、路上ミュージシャンを見つけて、あれがうわさの路上だってみたいな。最初は…、ただそんな感じだったんです。」

『音楽だけじゃないんだね、楽しいのって』みたいな。そういう友達とのつき合いも楽しいし、音楽を通じて今の仲間もいるし、それを通じてだんなとも知り合ったし、だから、結構大きいですね。」

Fさんにとってこの趣味をきっかけにしたつながりは、人間関係自体の充実だけでなく、前述したように、専門学校への選択に必要な情報の収集の場ともなった。路上で集う友人たちは、年上かつ保育の道を目指している人も多かった。同じバンドをおっかけている、たまたま路上で出会った人と友だちになり、そういった人たちとの関係の中から進路に関わる情報を得ていた。

## 地元という場

生まれてから今に至るまで、地元とそこでの人間関係は、Fさんにとって重要である。例えば、都心の高校への入学希望を親に反対されたときに、近所のもんじゃ屋のおばちゃんが味方をしてくれた。

「実家の近くのもんじゃ屋さん(の)おばちゃん、私がおなかの中にいるときから知っているから、おばちゃんに愚痴を言いに行っったんですね、お母さんがいるけど。『おばちゃん、聞いて、お母さん、こうでこう言うんだ。お父さんもこう言うんだ。でも、私は、そういう

つもりで行くわけじゃないし、この学校に自分で行きたいと思ったから行きたいと言っているのに反対される』と言ったら、『やりたいことがあって行くんだったら、あんたの道なんだから、親にとやかく言われて、それで諦めるんだったら別に行く必要はないんじゃない？それでもあんたが行きたいなら行けばいいんじゃない？そうしたら、私はあんたに協力するよ』と言ってきて。」

「……お母さんにその場で言うてくれて…。『娘がこれだけ強い意志を持って行きたいと言っているのに、あんた、それ、反対するの』みたいなの。『それで反対するなら、私は悪いけど、あんたたちじゃなくて、娘の味方だよと。……自分の娘を信じなよ』みたいなことを言うてくれて。そのときはお父さんとかも『じゃ、もういいんじゃない』みたいな。で、高校はオーケーで。」

「血はつながっていないんですけど、その人の妹さんの子どもたちが、私の兄弟関係と全員同い年なんです。だから、何か自分の甥っ子、姪っ子と同い年だからというのもあるし、ほんとう一月に何回もおばちゃんのところへ行って、用事がなくてもおばちゃんのところに行ってしまうのがあるから、おばちゃんの中でもほんとう娘状態なんです。」

また、地元という場所で働くことの価値も、Fさんにとって大きい。

「……地元がすごい好きで。しかも出身園で働けるって、一番最初は簡単に格好いいと思ったんです。何か自分が幼稚園の先生大好きで、幼稚園の先生になれたらいいなと思い始めたところで、最初は何かやりたいぐらいな感じだったんですけど、思い始めた場所で、実際にその夢をつかんで、それをそう思った最初の原点で働けるってすごいなと思って。給料とかで考えるんだったら都心のほうが高いんですけど、でも、それが実現できるのってすごいことだなと思って、就職はそこにしたのもあります。」

こうした地元に対する愛着がある一方で、自立のためという理由と、プライバシーがないと感じたり、プライベートと仕事の分離をしたいという理由で、2008年夏から、実家や職場がある地域とは少しだけ離れた場所でひとり暮らしをした。

「いろいろ挑戦したいと思って。どうせ、幼稚園をやめると決めたときに、じゃ、実家も出て、ちょっと自分で家事とか、年的にはそろそろ結婚とかもあるかもしれないし、今のうちにいろいろやらないと、今の自分、親に頼り切っているなというのがすごいあって。」

「彼氏との姿を見られたくないとか、プライベートと仕事を分けたかったんですよ。ひとり暮らしをするまでは、……出かけるために、ライブとかに行きたくて〇〇（最寄駅）に行ったら、保護者に会って、どこ行くんですか。いや……。」

#### 4. 家族（生まれ育った家庭）について

##### きょうだいと学費

Fさんのきょうだい構成は6、7歳離れた兄が2人。長兄は高卒で、20歳のときに結婚して今は4人の子どもがいる。次兄は、短大から大学に編入して大卒だが、卒業までにかかった費用は全て自分で申請した奨学金で賄った。Fさんは非常にかわいがられてきたが、高校卒業後の進路を決める前に、長兄と話をしている。

「1番上の兄に『おまえ、そこ、正座』って、ある日……兄貴に言われて、『何？』と言ったら、『俺は高卒だよな。……あいつ（次兄）は奨学金で短大、そこから編入もちゃんと自分で払って、大卒でしょう。おまえ、この後、どうするんだ、どういうふうに生きたいんだ』と言われて、『一応今は、悩んだけど、幼稚園とか保育園の先生になりたいと思っている』と。『じゃ、大学、短大、専門とか行くんだろう。……お金、どうするんだ』って。えっ、親じゃないのと心の中で思ったんですけど、あえて聞かれるということは何かあるなと思って、『えっ』と言ったら、『いいか、〇〇（次兄）は奨学金で、今のおやじたちは家のローンあるんだぞ。おやじたちの年を考えたか』と言われて、『うん、それも考えて、ちょっと学費とかも見てるけど』と言ったら、『いいか、おやじたちはどう言うかわかんないけど、今って高卒までが当たり前だよな。だから、俺の中では、高校までは義務教育だと思っている。高校以上は自分の責任で行く学校だと思っている、俺は。それ、俺が何を言いたいかわかるよな』と言われて、『それは、じゃ、自分で払えということ？』と。『そう。自分で行きたくて行くんだろう。就職とかも……あるから、高校まではせめて出なきゃと思う。それは思うよ。だけど、高校以上は、別にそこで就職してもいいわけだろう。それでも、おまえはやりたいことがあって、その先に進むと思うんだったら、それはおまえの責任だろう。おまえで決めた道だろう。それはおまえの責任なんだから、おまえが払うべきだよな』と言われて、最初はそうなのか？と思ったんですけど、でも、確かにそうかもなと思って。」

4年と2年で同じ資格が取れるならすぐに現場に出たいと思っていたFさんだったが、自分で学費を払うことは想定していなかった。その頃はちょうど、それまでピアノを習ったことがなかったFさんが進路のことを考えて、自分で月謝を払って習い始め、10万円以上する電子ピアノも自分のバイト代から払って買った時期だった。高校3年生で10万円以上する買い物は大きな出費だと思ったのに、200~300万円する学費を自分で払えと言われたことに衝撃を受けたと言う。このような長兄との会話に対して、母親はまた別の反応だった。

「『あの子は、ああいうことを言っていたけど、2番目のお兄ちゃんは、自分の意思で奨学金、お袋たちには迷惑かけないからと言って、自分で奨学金を選んだのと。だから、あんたも別にそこまで気負いする必要はないよ』みたいなことを言ってくれたんですけど、自分も頑固だから、『でも、お兄にそう言われたし、絶対、親のすねかじったら、お兄に何されるかわからないし』みたいな。自分も……お兄ちゃん大好きだったから、お兄ちゃんに逆らえないところがあって、じゃ、わかったと言って。」

結局、学費に関しては親から立て替えてもらい、就職後に全額返済した。

「学費のほうは一時的に親に立て替えてもらって、在学中は。だけど、そんな大した額じゃない定期とか、教科書代とか、そういうすぐ払えるものは自分でバイト代をためて払って、学費は一時的に親に負担してもらって、卒業してから、就職してから毎月幾ら払うという形で、月7万とか。手取りの半分以上…3年半とかかけて全部、学費を親に返済して。」

## 両親の職業

Fさんの父親はガソリンをタンクローリーで運ぶ仕事をして、母親は結婚前にパートで働いていたが、結婚後は専業主婦をしていた。ただ、Fさんが保育を目指してから、もともと子ども好きで大家族で育った母親は、児童館、小学校の放課後クラブ、保育園などでパートで働くこともあった。

## 5. パートナーや結婚について

2010年春、派遣切りにあったのと同時期に、高校3年のときから8年間交際した3歳年上の現在のパートナーと入籍した。出会いのきっかけは、パートナーがやっていたバンドの路上ライブを、Fさんが見に行ったこと。パートナーは現在、BGM付きの絵本の読み聞かせをする際のギタリストをしている。一時期保育士を目指していたパートナーの高校の後輩から、路上で大人向けに絵本の読み聞かせをすることを仕事にしたいという話を聞いたのをきっかけに、4~5年前から始めた。国内外で演奏の機会があれば赴き（国内では関西の方が活発）、その試みを取り入れている雑貨屋でアルバイトとしても働いている。講演会で絵本作家に会うことなどを通して絵本に関する知識が付き、Fさんと共通の話題も増えた。

しかしFさんは、アルバイトがないと収入が安定しない点については、しっかりしてほしいと感じ、元々幼稚園の先生をしていた、パートナーの母親に相談に乗ってもらうことがある（堅実な家風だということもあり、Fさんの父親も、パートナーを人間としては買っているが、不安に感じたり憤ったりしている）。ただ、もがいている姿が見えるので、直接言うことはたまにしかせず、今は見守ろうと考えている。

一方、Fさんの働き方について、パートナーは理解を示し、応援している。

「応援していますね。私は結婚しても続けるよ……自分の天職だということも言っているし、高校3年生からつき合っているから、本当に自分の進路を選ぶときからずっと一緒にいるじゃないですか。向こうのお母さんが、もと幼稚園の先生なんですよ。そこで相談に乗ってくれていたのもあって、だから、幼稚園の先生に対する理解もやっぱりあって。最初は、『でも、子どもが小さいのに、自分も子供を保育園とかに預けて、自分は人様の子どもを預かる。どうなの？』という考えはあったんですけど、今は、やっぱりさっきお話ししたように、絵本の読み聞かせとかで幼稚園とか保育園を見て、幼稚園、保育園（の中だけ）じゃなくて、一般の方対象で、親子のそういうかわりをする中で、だんだん考えが変わってきたみたいで、

今は大分理解してくれるようになって。(現在 18 時退勤だが、子どもができれば、早めに退勤して子どもとの時間を多くとるようにしたいと F さんが言ったら) ……『そういうふうやっていくんだったら別にいいんじゃない』と。今、共働きも多いし、子どもができたからこうしなきゃいけないとかいうふうに、自分のやりたいことをお互いに束縛とかしていくのはやっぱり嫌みたいで、だから、『俺は俺でやるし、ただ、F は F で好きなことをやったらいいんじゃない』みたいな。それで家庭が崩れないなら。やっぱり自分に無理して仕事をすると自分がだめになるというのを、だんなはだんなで、自分で壁にぶつかって経験しているし、私は私で、そうやって心を崩したりして経験しているから、だから別に、応援はしてくれています。私は、一生やっていくというのは言っているので、幼稚園が、年的にもおばあちゃんだからやめてくださいというふうにならなければ、続けていきたいなと思っています。」

## 6. 将来についての考え

F さんは、少し前までは、現在の職場で全体主任になることを目標としていた。それは、産休明けに復帰する働き方ができない雰囲気および園長の考え方があった現在の職場で、役職に就けばポジションが確保されると聞かされていたからだった。しかし、今は、「産休明けでも復帰できる、女の人が仕事しやすい幼稚園にしたい」と考え、職場環境や園長の考え方を変えていきたいと考えている。実際、園長は F さんが小さい頃から知っている間柄なので将来の働き方について改めて熱心に話してみたら、「今までの人はやってこなかったけど、別に先生、子どもができれば、(今、2 歳児保育をやっているので) ……それまでは自分の実家なり、どこか保育園に預けるにしろ、2 歳から別にうちの幼稚園で預かってもいいんだから」というようなことを言われた。保護者と接していても、経験のある先生の方が信頼されている印象を受ける点、また、幼保一元化の流れの中でモデル園に選ばれれば補助金が入り、経営面でもメリットがあるという点で園長の関心を向けられるかもしれないという点でも、自分が職員の代表となって幼稚園を変えていきたいと考えている。

## Gさん

27歳男性。大学卒業後、海外支援のNGOに2年契約で雇用され現地法人を立て直す。日本に戻って、現在はSEとして働いている。システム開発の仕事には「役に立つ」という確信が持てる。

### 1. 学校時代について

小学生で少年野球チームに入り、中学校では野球部、高校は進学校でありながら野球も強い公立A高校に進学。しかし、野球は途中でやめる。

「ちょっと挫折したんですけど、ずっと野球をやっている。…(中略)…A高校が実は合わなかったと自分では思っています。あんまり居心地はよくなかったです。野球部だけではなく。何か、「おれたちA高校」みたいな雰囲気になじめなかったのがあったのかな。ちょっと、屈折してると思う。(笑)」

### 高校時代に留学

野球を辞めた後、国際交流基金の留学プログラムに応募し、試験を受けて合格した。当初はインドネシアに行くはずであったが、政情不安からアジアのB国に変更になった。高校2年生の夏から1年間B国でホームステイ。

「みんな、英語で頑張ってくれるんですけど、何か聞き取れないんです。アジアの英語、B国の人もあんまりうまくないので。でも、ちょっとずつは、聞いて大体反応できるぐらいには。」

「(一緒に行った高校生とは) ばらばらですね。場所はばらばら、学校はばらばらで、たまに何か会合みたいな、パーティーをやったりとかっていうので一緒になったりするんですけど。…(中略)…日本からだけじゃなくて、同時期に海外から(の留学生がいて) どちらかという、そっちとつるんでいた感がある。なので、B国語より英語を覚えたというのが大きいと思うんですけど。」

### 大学時代とNGO

翌年6月に戻りそのまま3年生に進級。翌春には、現役でC大学に進学する。

「(C大学に進学したのは)、センター試験とかを受けたくなかったという、それだけの理由です。…(中略)…国際関係学科って名はついていますが、あんまり関係ないようなところですね。一応学制的には国際法だとか、国際経済だとか、NGO論だとか、そういうことはちょこちょこやりましたが、個人的に力を入れていたというか、関心がそこしかなかったのは哲学ですね。…(中略)…現代思想ですかね。」

大学2年の時から国際NGOに参加。毎年行われる国際NGOのフェスティバルの運営に携わる。

「きっかけが、大学の親しくしていただいた教授が関係していた C 国支援の NGO がありまして、そこに国際ツアーという形で、2 週間ぐらいかな、C 国に行って、そこでの活動を手伝ったりしていて、その流れで、そのフェスティバルの運営に携わりみたいなことになりました。」

その教授との出会いは、厳しい授業だとの評判を聞きながらも、内容に興味を持って授業を取ってから。「(その教授は) 教育しているなと思いました。大学の先生で初めて、この人は教育者になろうとしているなと思った人が、その人だったんですね。実際、いろいろ授業も工夫されていて、とにかく話し合う場をつくる。講義形式は、そもそも好きではないので。そういう意味では、それだけでも一気に距離が近く感じられた。」

大学の授業はほとんど毎日だった。NGO に参加してからは、午後は NGO の職場に行くことが多かった。

「(NGO は) 仕事でした。実際にちゃんとお金をもらって、バイトみたいな扱いでもらっていたのはほんとうに 3 カ月とか 4 カ月ぐらいですね。あとはボランティアという形で。2 年生から、結局、最後までですかね。4 年、5 年、そうですね。最後までですね。」

## アルバイト

最初のアルバイトは、高校時代の終わりごろから喫茶店で、コーヒーが好きだから自分で見つけた。家庭教師の経験もある。はまったのはバーテンダー。

「ちょっと上の仲間たちと一時期いろいろ、雑誌をつくるかみたいな話になってですね。地元の店を回って、営業をかけたりにしていたんですよ。そのときに、この店というか、グループの店で、そのオーナーの店がちょうど D 市だったので、じゃあ、ちょっと 1 人働かせろみたいな話になって、いけにえになったというのがきっかけです。… (中略) …雑誌計画は途中でつぶれたんですけど、バーテンダー自体を 2 年ぐらいやっていましたね。途端にちょっと体がもたなくなってる。」

週 4 日入ったこともあったが、週 2 回ぐらいの時が一番安定していた。喫茶店も同時並行で週 3、4 日。日曜日は、朝から喫茶店で働き、夜はバーテンダーをやる生活。「それで、月曜日の単位がもらえなかったんです。(笑)」

アルバイトの収入はほとんど NGO の交通費に消えていた。

## 就職活動

就職活動はほとんどしていないが、1 つだけ、航空会社のパイロット試験を受けた。

「ほんとうに、(パイロットに) なってやろうと思っていましたよ。どこかで、おそらくいろいろなフェスティバルの運営とか、人を扱うというか、まとめるというか、というようなことばかりやっていて、技術者とかにあこがれていたんですよ。」

試験には落ちた。

「何か就職とかは真剣に考えていなかったのは事実ですね。何でそんなに無謀だったんでしょう。…(中略)…ものすごく楽観的だったのと。」就職氷河期と言われた余波はあったが、周囲は就活に躍起になっている雰囲気ではなかった。「当時は何になりたかったのかまだわからなかったし、いまだにわからないのがありますけど。」

卒業の半年前頃、フェスティバルの運営で知り合ったB国の農村部の支援をしているNGOの理事長から、現地法人の立て直しの仕事を頼まれた。2年間しか給与は払えないから、2年間で何とかしてくれということだった。

「結局はそんなに悩まなかったのかな。どうやろうみたいな話をよく話していたので。」

## 2. キャリアについて

### 海外のNGOで

仕事は、具体的には現地の任意法人を財団法人化することで、そのこと自体は2年間で達成した。しかし、それ以外の問題がたくさん見えてきて、それに四苦八苦しした。

「日本のNPO法人格をとるよりは楽かなという感じはしましたけどね。行政手続きのようなこともあったり。ただ、それ以上に四苦八苦ししたのは、現地の職員が、結局2名とかなんですけど、要はミッションみたいなものがきちんと立てられていないし、それに向かって施策を練っていないし、実際の実務にも非効率な部分がいっぱいあるというようなところを、どうにかしたかったというのもありましたね。形式的に財団法人にはなったんですけど、それ以外の部分では、達成感のはっきり言ってなかったですね。自分がほぼ育てて、つくった組織なんですけど、ほんとうに必要なのかなという疑問は今でもあります。」

「(問題は) 事業評価できていないんです。実際、じゃあどれだけ、メリットといたら変ですけど、何が向上されたの、どれぐらい向上されたのかというような統計学的なことでもできなかったし、社会学的な調査もできていなかったし、調査能力不足というのが一番気にかかったことだったんですが、私にもそんな専門性はなかったというのが一番の、自分に対するジレンマですね。…(中略)…実証的なデータをそろえられないというのは、やっぱりNGOの課題なんだと思うんですね。自分のところに限らずですね。そればかりは。そういった課題を持って帰ってきた感がありますね。いまだに自分の中で問いです。」

そうした疑問から、日本に戻ってから、NGOとは距離を置くようになった。

### 帰国後はシステム開発の仕事に

2008年の3月に日本に戻り、結婚したパートナーの仕事が忙しかったこともあり、しばらくは「主夫」で過ごした。6月にシステム開発会社の採用試験を受け、7月からSEとして正社員で働き始めた。

「(この会社に応募したのは?) まず、システム屋になるつもりになったんですね。この中で言えば、どうやったら非効率をなくせるかっていう。実際に、B国でも猿まねみたいな

感じで会計システムをつくったり、実際にやってみていたんですよ。…（中略）…専門家がだれもいないし。教えてもくれないし。そしてシステムがないし、買えないしという状態で、つくるしかなかったんですね。それがきっかけで。で、システム屋をちょっと、門をたたいてということで。その流れですね。」

初めに目についた会社であったこと、未経験でもよかったことが応募のきっかけだった。「はっきり言って、基準がわからないんですよ。どこがいいとか、どこで選ぶべきものなのかっていうときには、大体は運に任せます。でも、ある程度、3年ぐらいやってきて、わかってきたので、もう今度はしっかり選ぼうとは思っていますけど。」

今の勤務先は、中小企業だから、システム設計からコーディングまですべてを一人でやる。週40時間、年収400万程度で、残業はあまりない。能力を身に着けるには良い会社だった。

「ただ、コーディング、プログラミング、システムの知識という意味では、もう物足りない会社になってしまっているんで、多分、今、私が一番になっちゃったので。次はもっと、そっちに特化しようかなと思っはいますね。年齢的には厳しいんですけど。」

「プログラミングのほうを、ちょっと突き詰めて勉強していますね。…（中略）…（もっと高い領域に）行きたいですね。やっぱりあこがれていますよね、何か。いわゆるスーパープログラマーとか言われるような領域に足を突っ込みたいなというのはあります。結局、最後に来ているのが、やっぱり技術者への憧れというか。腕一本で食えるような人になりたいなというのは思っていますね。」

「まだ迷っていますね。やっぱり自分の今の職場の組織のあり方みたいなことも考えちゃう。技術だけに没頭したいと言いながら、考えちゃうんですね。…（中略）…嫌ですね。何かドラッカーとか読んじゃうんです。」

### 3. 交友関係について

中学、高校など近所の友人2, 3人と付き合いがあり、今もふらっと家に来たりする。

「(大学や、NGOの仲間とは) 今は迷いがいろいろあるっていうのが現実なので、それもあって。大学の仲間ともそこまでとってないですし。NGOでの仲間でも、そこまで連絡はとってないですかね。」

### 4. 生まれ育った家庭について

父親は銀行員で転勤が多かった。

「朝起きたら父はいなくて、家に帰ってきて寝てから父が帰ってきていたっていうのがあって、それは避けたいなというのが多分、いまだにあると思うんです。別に父を責めるわけではなく。(今子供と)なるべく一緒に過ごしたいというのは、多分そこから来ているのかなとは思っていますね。父もそうしたかったでしょうし。」

母親は、専業主婦。兄がいる。似たタイプではないが仲は良い。「兄はどっちかというと

努力家で。そうですね。勉強しているタイプですね。僕はあんまり……。目に見えて頑張っているなということは、母に言われたことはないんです。でも、兄より成績はいいみたいな。だから、兄は気に食わなかったんじゃないかなとは思いますが。勉強しろっていうのはあんまり言わなかったですね。」

「本、昔は大嫌いでした。ほんとうに算数とかのほうが好きでして。本とかを読み出したのは多分、高校ぐらいでしょうかね。本は買ってくれたんですけど、読まないみたいな。で、怒られました。多分、勉強に熱心な教育ではなかったと思います。でも、気づいたらやってきたからまあいいかみたいな、そんな感じだったと思うんですよ。」

「サラリーマンとかっていうあり方に疑問を持っていたのは確かだと思うんです。小・中、父の姿、父はもちろん尊敬していますが、何かこんなに大変なの、どうなのっていうような感覚ですよ、きっとね。それが普通だと思いたくなかったみたいなのがどこかであったのかなと思いますね。おそらくNGOという世界に足を突っ込ませた一番の原因というのは、反発もありますね。父も母も、きっと海外に行ったこともないような典型的な日本人でしたし。結構、反対もされた、心配もされてっていうところだったので、よけいに外に行きたいという気持ちが芽生えたというのはありますよね。」

## 5. 結婚について

B国にNGOの職員として赴任した時、高校時代の留学仲間だった女性と結婚した。彼女は留学後も現地に残り、現地で結婚して娘がいたが離婚していた。2008年に夫婦で日本に戻った後、現地の元夫のもとに残っていた娘を引き取ることになる。今は、7歳になるその長女と2歳の息子、それに第3子の出産予定がある。

「(長女が日本に来たのは)小学校に入る2カ月前ぐらいですね。もう急遽、ちょっと幼稚園とか入れてみて、なじんで、そこから入学してということで。…(中略)…(心配だったが)もう今ではほんとう、ただの悪餓鬼ですよ。(笑)」

奥さんは今は専業主婦だが、アパレル系の会社でB国での生産管理をしていた。出産後には仕事をしたいという。

## 6. 将来について

システムの仕事を極めたいと思っている。

「役に立つという確信です。(好きというより)そのほうが大きいですね。まだ、ほんとうに好きかどうかはわからない部分もありますし。自分がそれに向いているかどうかともわかりませんが、役に立つ確信はある。おそらく。人が喜ぶだったり、便利だなと思ったりとか、そういうところで。すごくちっちゃなものかもしれないけど、役に立つという部分がありますね。」

「もちろん不満もあります。もっと行けるといような。多分、そういう感覚がある仕事と

いうのにあこがれていたのかなと今、改めて思います。技術者って何なんだろうみたいな問いを考えるんですけど、やっぱりそこなのかと。目に見えて何か実感が、「あ、こう役に立った」という実感があるものが物理的にできるみたいな、そういう感覚ですかね。」

「(器用貧乏で) ナンバー1みたいなエリアにはまだ行けてないと思います。どの分野でも。それは自分で実感しているんで、そこが一番嫌なところと言っちゃあれですけど。じゃあ、そのナンバー1の分野って何なのかはよくわからないんですけど。でも、おぼろげながら見えてきているのはあるかなと思いますね。」

「5年後は起業をできればしたいですね。と言いつつ、(今の)組織のことも考えちゃうという性格上、やっぱり理想の組織は自分でつくるしかないなというところがありますね。」

「資金どうしようみたいな、いろいろありますよね。子供がいますのでね。その辺は足かせ、直接的に言えば足かせ、自由には動けないというのもよくよくわかっています。こればかりはね。」

## 7. 働くことに対する考え方への震災の影響

「ありますね、やっぱり。だめだなんて言ったらあれですけど、いろいろ変えなきゃいけないというの、特にどしんと来まして。…(中略)…もっといい方向に、いい国にしたいみたいなことを思っている人たちはいっぱいいると思うんですよ。その人たちの声は何で生かされないんだろうっていうところがありますね。それは別に国レベルじゃなくても、おそらく会社とか、もっと小さい単位でも同じなのかなと。およそ組織っていうところで、日本っぽい組織みたいな、悪いところが見えてきたのかなとは思いますがね。それをもっと的確に言葉にできたり、研究対象にできたりしたら、何かいい方向に行くのかなというのがありますし。」

「一方では批判というか、それこそ利益を上げないでは食っていけないというのもありますし、自分自身も給料を稼がなきゃ食っていけない部分もある。だから社会的に役に立つことだけをしていればいいとは思っていないのも事実なんですね。経営しなきゃいけないというところで。でも、そういう目で見ても今の結構多くの日本企業はアウトだと思うんですよ。実際、不況を脱出できていないのは大きいですすね。両方向で、これからも社会的には見ていきたいし、自分自身でもし何かできるチャンスがあるんだったら、そういうのは生かしていきたいなとは思いますがね。すべがまだないです。知りたいです。」

## 8. その他

「(趣味としては)書くことですかね。小説みたいなものを書いたり。最近は、娘のために童話を書いてみたりとかというのはやっていますね。書くのが好きですね。…(中略)…。多分、自分が哲学を勉強していた中での自分なりの表現をどこかで求めているのがあります。小説とか童話という形態で。」

「正直、未完なのが多いです。何だか続きがありそうなんだけど今書けないみたいなのが多いですね。完結していないのが多い気がします。ちょっと中途半端な感がありますね。この2つは、読書とか、読むことと書くことというのはずっとやるだろうなとは思いますが。」

## Hさん

23歳男性。大学を中退したが、5年間は再入学できる状態にある。生まれ・育ちともに都区内西部で、現在はお笑い芸人を目指して、養成所に通っている。

### 1. 学校時代

地元の公立小中学校に通い、当時の成績で合格できると考えた近所の都立高校を受験して、入学した。まわりの友人にも、同じ高校に入学した人が少なからずいた。普通科のみの高校だったが、学校選択時に、専門学科がある高校に行くことは考えなかった。入学時点で、卒業後に関しては、漠然と専門学校に行つて何かするだろうと考えていた。

高校生活は、部活などはせず、アルバイト中心だった。1年生の夏過ぎにはアルバイト情報誌でファミレスのキッチンの仕事を見つけ、週3、4日のペースで働いていた。まわりの友人に関しても、部活派とアルバイト派が半々くらいだったようだ。勉強に関しては、最もお世話になった2、3年時の担任の先生が担当していたこともあり、好きな科目（公民科目）は頑張った。

卒業後の進路に関しては、3年生の春くらいに、服飾系の専門学校に行こうと考えていた。しかし、願書を出す直前の9月頃まで迷った末に、自分は手先が不器用で、仕事にするのは違うのかなと思い直し、やめた。その後、就職することは考えていなかったの、合格しそうと考えた大学をいくつか受験したが、現役で合格できず、都心にある予備校に通うことになる。

1年間の浪人期間を経た後に、志望校のうち上位ランクの大学には合格できなかったが、滑り止めとして合格できた首都圏の私立大学に入学する。高校時代とは別の近所の飲食店でアルバイトをするのと同時に、入学した外国語学科には、学部公式の部活（入部は任意）があり、そこに所属して、キャンプや留学生との交流などの活動をした。勉学面に関して、Hさんは英語の勉強は嫌いだったのでそれを克服する意味でも外国語学科を選んだが、講義にまじめに出席したり TOEIC の勉強はしたものの、英語や海外に対する関心はそれ以上もたなかった。

その後、就職活動の時期になり、大学のキャリアセンターに足を運んだときに、自身の大学が職員を募集していることを知って説明会を受ける。そのときに、自分は本当にこういうことをしたいのかなと思い始め、考えた末に、小学校のときからお笑い芸人になりたかったということ、人を笑わせるのが本当に好きだということを実感した。当時から小学校時代を振り返り、子どもながらにコンビを組んで級友を前にネタ見せをし、クラブ活動でも自分たちでお笑いサークルを作って活動していたことも思い出した。

こうしてHさんは自身の進む道を決めていきつつ、2010年夏（大学4年時）に、大学の友人とM-1グランプリ（漫才のコンテスト）に出場する。ここで初めてセンターマイクを挟んで舞台に立ち、お笑いの世界の空気を肌で感じたことで、翌年に養成所に通うという進路

選択を両親に相談することとなる。それまでそれとなく伝えてきたものの、いざはっきりと言うと、「本当にやりたいのか?」「就活から逃げているだけじゃないのか」という反応だったが、後に父親はあっさりとその方向性を認める。

大学に関しては、4年終了間際に単位が足りず卒業できないことが判明し、休学すると学費がかかるので、中退した。

## 2. これまでのキャリアや働き方について

現在、Hさんは、年間数十万かかる学費を両親に用立ててもらい、お笑い芸人の養成所に通っている。養成所ではネタ作りの訓練、舞台上で声を通るための発声練習（ちなみに、他のインタビューアに比べHさんは非常に声を通った）、感情をスムーズに引き出し、コントで実際に活かすための演技の練習、などを行う。週3回、午前から夕方前まで通う。通えるのは1年間。養成所の同期は、高卒後に来ている人と大卒後に来ている人が多く、また20歳代前半が多い。入所時には同じ時間帯に通っている人は50人弱いたがインタビュー時点で40人以下になっていて、さらに卒業前の審査で選ばれた数組のみが、養成所を運営している芸能事務所に所属してその道が続けていける。

大人数の養成所が好きではなかったということと、上下関係が厳しくないことを理由に、現在通っている養成所を選んだ。養成所を選ぶ際には、お笑い芸人のSNSで得た情報も活用した。

Hさんはコンビで活動している（Hさんがツッコミ）。相方は、近所に住んでいる小学校のときからの友人。養成所に行く日以外でネタ作りをするときは、1人で行う。近所に住んでいる相方との打ち合わせは週1~2回程度。2人合わせての練習はどちらかの家や公園で行う。そうやって練習をした後に、講師の先生に見せて、コメントをもらうという過程を繰り返す。

養成所で言われていることはいくつかあるが、サービス業のように振る舞えることと、自分たちにしかできないことをやれるかどうかという点を挙げている。

「……お前らは究極のサービス業だからって言われて。そんなの、正直、ほかのサービス業はできて当たり前だぞって、さんざんはっぱかけられてて、ディズニーランドぐらいはできて当たり前だって言われてて。」

「……ないことをしたほうが、やっぱりおもしろいというのはあるんじゃないですか。今、もうお笑いも飽和状態で、ネタももう出し尽くされちゃってるんですよ。正直、もうパターン化してきちゃって、マンネリ化で。だから、今までにないことをやるというのは、1個人より出るには一番近道なのではないかというのは、さんざんたたき込まれているので。おまえらにしかできないネタをやらなければいけないというのは、ほんとう、ずっと言われてますね。」

また、お笑いには本を読むことが欠かせないという。大学時代に通学時間が長かったこと

もあり、本を読むことが趣味になったが、養成所でも幅広いジャンルの本を読むように言われ、最近どういう本を読んだか尋ねられる。公立図書館も活用し、小説、ビジネス書、漫画雑誌など、さまざま本を読んでいる。また、お笑いに活かせる小説の展開はどのようなものかということも養成所で指導される（例えば、後からネタを明かす展開ではなく、伏線がきちんとあって、それを回収していく展開の方がよい）。

「僕は読みますね。養成所で本を読めって言われているのもあるんですけど。とにかく知識をつけないと。おもしろければ知識に直結してくるから読めって言われてるのもあるんですけど、元から、僕は本を読むのが好きで。」

「あと、やっぱり、しゃべってたら、僕、いろいろつまなきゃいけないんで、語彙力つてもものすごく…。」

相方はあまり読まないなので、本の話はしないが、Fさんは読んだ方がよいと薦めている。

### 3. 交友関係について

#### コンビを組んでいる相方

前述したように、相方とは小学校で知り合った。中学校のときは部活（野球部）も一緒に、高校・大学は別だが、今もしょっちゅうつるんでいる4人組のうちの1人。仕事を辞め役者を目指して事務所に所属していた相方に、Hさんがお笑いの道を目指すことを話したら、事務所を辞めてコンビを組むと言われ、一緒に養成所に入学、活動することになった。コンビを組む際に「お前の人生を背負えないぞ、しんどいぞ」とHさんは相方に話したが、それでもいいという答えだった。

Hさんは、お笑いをやるのが初めての相方に対して、自分には見せないが大変だろうなと思っている。

「大変なんじゃないですか。おれには言わないだけで、そういう見方をするのは、多分疲れると思うので。（これまで友人だったのが、相方になるときに、Fさんの見方が変わったかという点に対しては、）いや、そんなには変わりませんが、でも、つらいのかなと思ったりしますけどね。」

大変というのはどのような感じかという、笑いに対するスタンスが変わるからだという。「笑いに対して真剣に考えないじゃないですか、お笑い芸人にならない限りでも。これで笑いを取ってやろうとか、それを考えないと思うので、そういう見方をしなきゃいけないじゃないですか、いやがおうにも、お笑い芸人って。だから、それを取りに行くというのは、多分、結構大変な作業な気がして。」

一方、自分自身については、違うと感じている。

「僕はもう、やりたいことをやってるんで。まあ、今、大変ですけど、その辺は覚悟してたというか、変な言い方ですけど、覚悟はあったんで、どうにかなってるというか。」

## アルバイトや部活での人間関係で学んだことや、大学の学部を選ぶきっかけ

Hさんは現在の活動における自身の強みを、体育会系だった中学の部活や、高校以降のアルバイトでの上下関係で培ったコミュニケーション能力だと考えている。また、高校1年生で働き始めたときにはまわりは年上の人ばかりだったので、仕事以外の面でも、いろいろな世の中の仕組みを教わったという。

「……高校生のときはわからないですよね。バイトでもしないと、そういう社会のヒエラルキーみたいな、わからないんで。」

Hさんが外国語学部を選んだのは、高校時代のファミレスのアルバイトで同僚だった大学生の影響だった。現在英語の先生をしているその大学生はHさんと仲が良く、よく一緒に遊んだり、仕事のときもよくしてもらっていたという。

このような交友関係をもつHさんは、対人面で苦労したり、思い詰めたりしたことはない。

## 高校時代の友人と趣味のパソコン自作

高校での友人の1人とは今も関係が続いている。Hさんもその友人も服が好きで、話もすぐ合う。その友人がデジタル系が好きだということで、一緒にパソコンを作ることになったことをきっかけに、パソコン自作や家電が趣味となった。今はお笑いの道に専念しているが、万が一お笑いの道以外を進むことになったら、この趣味が今自分のもっている中では一番潰しがききそうなので、伸ばしたり、資格を取ろうとも考えている。

## 海外志向の人が集っていた大学時代の学科

お笑いの道に進むと決めたとき、大学の友人たちに話をしたが、そこでの反応は「好きなことをやれば」というものだった。学科柄、海外志向が強く、自由な生き方をしようとする人が集まっており、誰にもとがめられず、やりたいことをやったほうがいいじゃないかという雰囲気があった。休学して、もしくは卒業後にワーキングホリデーに行く人も一定数いた。

## **4. 家族について（生まれ育った家庭について）**

現在、両親と父方の祖母と、父方の祖父が残した実家に暮らしている。きょうだいは4つ上の姉が1人。サービス系の専門学校卒で、現在は結婚して家を出ているが、都内に住んでいる。Hさんも、2~3年後には実家を出ていきたいと考えているが、経済的に難しいかもしれないので、現在やっているお笑いの活動の展開次第という状況にある。

父親は50代後半で会社勤めだが、早期退職して、嘱託職員として残って働いている。母親はパート勤め。両親との仲は比較的よい。父親はお笑いが好きで昔からテレビで見ているが、Hさんがやるお笑いに何か言うことはない。

Hさんの進路に関して、両親が強く反対することはこれまでなく、Hさんの選択を尊重している。学費を出してもらって好きに活動できていることに、Hさんは申し訳なさを感じる

とともに感謝しており、成功して返したいと思っている。

## 5. 結婚について

結婚について、いずれできたらとは考えているが、具体的に考えていることは特にはない。

「結婚はぴんときませんよね。女の人の方がリアリティあるんでね。」

「……まず、経済力的な問題ですよ。そうですね、中途半端だから。多分、今よりちょっとしてからの方が、多分つらいと思うんですね。ネタ見せが毎週にあるし、だから、もうバイトもろくにできないけど、ネタはやらなきゃいけないぐらいのときから、相当つらいと思うんで、金にならない仕事でやらなきゃいけないみたいな。その辺かなと。そういう女の人じゃないと無理ですよ。多分、今、もし結婚となったら。」

「一番そこですよ。経済的な。もし働いているんだったら、多少なり、多分、やり方があると思うんでいいんですけど、定職ではないので。」

## 6. 将来についての考え

舞台上で使える時間が短くなってきていて、ぼけ数が多く短時間でアピールできるお笑いが求められていると思い、また、しゃべくり漫才でやっていきたいと考えている。

養成所卒業時の審査で合格できなかったらこの先の進展は難しいが、それ以降も売れるまでは10年かかると見積もっている。また、今はお笑いブームも若干下火になっている状況なので、ネタ以外の部分も必要になっていると考えている。

「……多分、もうこれからはネタで出て来られないだろうと言われていて。だから、ネタ以外の部分を鍛えなければいけないんじゃないか。だから、今、この話したらあれなんですけど、やっぱり、お笑い以外でも出られるようなタレント性がないと出てこれないなど。」

「……手相が見れたり、風水やったりみたいな。だから、プラスアルファで。お笑い以外の分野でやっていかないと、もう飯、食えないだろうというのが現実で。」

卒業時の審査で合格できたら、大学を卒業しようと思っているので、お笑いの活動やアルバイトをしながら、中退した大学に再入学して通おうと考えている。

## 1さん

29歳女性。首都圏に生まれる。5人兄弟の3番目。総合学科を卒業したあと簿記の専門学校に進み、日商の一級を取得。卒業時に両親が離婚することになり、家を離れたいとの思いからオーストラリアにワーキングホリデーに行く。1年で日本に戻りすぐに会計事務所に勤務、5年ほど働くが、もっと様々な世界をみたいとの思いから派遣で半年就業、そのあと紹介予定派遣で正社員化を提示されるも断る。人材会社の紹介で、通信系のベンチャー企業のマネージャーとなり、これまで身に付けた簿記の知識と英語を駆使しながらハードな毎日を送っている。

### 1. 学校時代について

小中学校は地元の学校に通ったが、高校は総合学科に進む。

#### 高校の選択

「昔でいう偏差値的な高さがちょうど合っていたというのと、自宅から通える距離でというのと、ちょうどその学校が普通科と美術、音楽、書道とか、何かそういったちょっと特色がある学校だったんですね。家よりもっと近くて、偏差値とかで合うところはあったんですけども、それよりも何か新しいことやるらしいというほうにトライしてみたというか、そんな形で引きつけられて。私の場合は、あまり自分の進路とかやりたいことって、全然明確になってなかったんです。逆に、普通でいいと思っていたので。なので、(総合学科に通ったことは) まあよかったんじゃないかなみたいな。」

#### 手に職をつけたいので、簿記の専門学校へ

「(母親は) 小さいときから働いてました。母が資格がないこととかスキルがないことで、仕事を得るとか働くことについて大変な思いをしていたのを多分見ているんですよ。そういうのがあったので、女性は資格が必要というのが、すり込まれてたんだと思います。中学生のときから、ほんとは何か、はりきゅう指圧のとか、そういった人を助ける仕事がやりたかったんですね。で、高校卒業するときには、推薦で鍼灸指圧の学校を全部受けたんですけど、高校時代、あんまり勉強せずに遊んでしまったもので、推薦受からなかったんです。あとは一般で受ければよかったんですけど、ちょうど両親の離婚が近くにあたりとか、4年制の大学に行く余裕はなかったんですね、うちには。で、ただ、自分がやりたい指圧とかは、今の学力で入ろうとしても、ちょっと無理だなと思ったのがあったので、やりたいことは鍼灸指圧で人を助けたい。でも、そうじゃなくて、まずは社会に出て、自分がお金を稼げるようにならなきゃと思って、社会に出て役に立つ資格は何ですかって進路の先生に聞きに行ったら、簿記の学校を薦められ、言われるがままに、はい、行ってきますとって、そのまま入学したので。」

私も高校時代、もっとほんとは勉強とかに集中できればよかったんですけど、学業というのはしつつ、あとはアルバイトに明け暮れ……。やっぱりお小遣いとかも、そんなもらえるわけではないので。そのときから、もう育英会でお金もらって、それでやっていったというのがあったので、ひたすらアルバイトをしていると、何か悪いお友達ができてしまうというか、ちょうど高校がミニスカートでルーズソックスとかになり始めたときだったので、そんな格好をしつつ、アルバイトで、夜とか遊ぶということを知ってしまいみたいな。2年生からバイトを開始したので、2年生から卒業するときまで。週5日とか6日とかやってみました。学校終わって、そのまま真っ直ぐ行って、夕方5時か6時から、閉店が8時だったかな、とかまでやってる。」

### 勉強に燃えた専門学校時代

「楽しかった。一番楽しかったと思う。勉強に集中できたことかな。というのは多分、小中高校って、自分ってものもわからないし、何か取り組める一つのものがなかった気がするんです。本来であれば多分、中学校か高校で、部活とかに燃えるじゃないですか。それがなかったんですね。私は多分そういった集中するものが欲しかったんだと思うんですね。7月に試験を受けて、全然試験もわかんなかったんです。でも、多分、楽しかったんですよ、試験が。試験終わって、そのまま学校に行って、「おお、どうしたんだ、どうだった」とか言って、「全然だめでした」とかだったんだけど、その日から勉強を本気で始めたんですよ。自習というんですか、自分でひたすら問題を解くことを始めて、そしたら12月の試験で受かったんです。(税理士の国家資格の)受験資格ができたので、もうそのまま12月から税理士コースに入れられて、2年目の夏には法人と簿記、財務諸表という3科目勉強してましたという。税理士の勉強は丸2年間続けて、5科目、一応勉強したんですけど、1科目も受からず。勉強は楽しいけど、自分がそれで、じゃ一生食っていくかということ、多分違うなと思ってたので、2年になって、夏に一応、もう一回ちゃんと受験して、受験した後から、よしと思って、ワーホリでオーストラリアに行こうって。それも多分、2年生になったときぐらいから、もう準備を始めてたので。その冬にワーホリに行ってるんです。」

### ワーキングホリデー

「何のためにワーホリに行ったかというのが、今までいた親に支えてもらっている。食べさせてもらって、自分が寝るところを提供してもらっているというか、その家から出たかった。ただ、それだけなんです。ちょうどその年に親が離婚するんですけど。」

多分そのときの私には、自分の進路を考えるよりも、もう家から離れたいというのが強くなっちゃってたと思うんです。

それで、家を出る方法の唯一の選択肢がワーホリだったんです。それまで、飛行機とか海外なんて、一度も行ったことないんですよ。

英語とか普通に3か4かという、成績は普通だったと思うんですけど、たしか英語の発音を先生に褒められたことがあったんですよ。そういったことがあったので、自分は何か留学とか海外とか向いてるんじゃないかという激しい思い込みをしてまして。

専門学校では勉強しかしてないから、ほかの人たちとコミュニケーションをとって、いろんな遊びをすとか社会を知る機会がないまま、勉強しかしてないで、勉強が終わったら、次はじゃ、家を離れるのにワーホリに行こうと思って、ワーホリに行くにはとりあえず100万必要だったんです。でも、勉強してるときはバイトもできないので、試験が8月10日ぐらいで終わるので、試験が終わってから11月まで、そこでコンビニで毎日10時間ぐらいずっと働いて、そこで100万ぐらい一気にためたんです。」

### ワーキングホリデーでの過ごし方

「(日本食レストランのアルバイトは) お昼が多分、11時ぐらいから入って、午後に休憩があって、夕方、またディナーの時間が始まって、お店が閉まるまでだったので。ワーホリに行ったのは、自分が家を離れたいという、ひとりになってみたいということが目的だったので、ほかの人みたいにもっと格好よくとかいろんなことを経験したいとかじゃなくて、日本でも働くんだから、海外でも働こう。日本でも家に住むんだから、海外でもどっかの家に住もうという、そんな感じだったので、別に旅をしたいとか、じゃ海の近くがとか、全然なかったんですよ。向こう版フリーター生活。」

## 2. これまでのキャリアや働き方

ワーホリから帰ってきて1週間以内に専門学校に仕事を紹介してもらいに行ったが時期が悪く、ハローワークに行くように言われた。ハローワークに求人が来ていた会計事務所に簿記の資格を生かして就職した。その後、派遣で働き、紹介予定派遣で正社員に誘われるも断る。

「5年弱、4年ぐらいかな、働いて、それから派遣で何かほかの会社にぶらぶら行きました。

とりあえず入りやすい派遣で、いろんな会社というんですか、一般的にって、こう見つつ、でも、ちゃんと安定して働かなきゃだめだよなというの、ずっとあるんですよ。それで、紹介予定だと、最初は派遣で入って、お互い相性がよければ、条件が合ったら、じゃ正社員で雇用しましょうということなので、私にとっては都合がいいやり方だったんですよ。2月の中旬まで、正社員になるんだって思い込んでたのか、突然、部署はかわるからねというふうになっちゃって、ええって。そんなだったら、こんなところにいたくないと思ってしまい、2月の末には、紹介予定やめますとって、契約を3月末で終了ということになっちゃったんですよ。

(そのあと) 人材紹介に登録に行ったんです。2月の末か3月の頭に。

で、担当になった人に、どういうことを考えていて、どういうことをしてきてというのを言うじゃないですか。で、言ったら、「ベンチャー向きですね」って言われたんですよ。ああ、そうなんだと思って。でも、確かに言われてみれば、大きなところの1部門、全体のこじか見えないという仕事じゃなくて、全体を見て、全体が最適になるためには、自分はこうしたほうがいいなという仕事のやり方、そういうふうに考えて仕事をしたいので、そうかもなと思ったんですよ。」

現在は国際的な通信系の日本支社の経理・管理のプレイングマネージャーとなっている。「(ワーホリの経験は) 多分、生きてると思います。具体的にどれがというのはわからないんですけど、あらゆる文化を受け入れなきゃいけないんですよ。というのは、日本流はこうだよというのを押しつけても、実際オペレーションするのは現地の人とか、お客様が現地で生活している人、現地の文化はこうだよというのを持ってて、それに合ったニーズをうちから提供しなきゃいけないわけじゃないですか。そうすると、日本のよさを生かすことはできても、強制することはできないんですよ。そういう違いを受け入れなきゃいけないわけですよ。出張に行って調整したりするんですね、そういうのを。最初は日本の一経理として雇われたんですよ。経理がない会社だったんです。(簿記の資格は) ポイントとなったというか、それが必要だから私を雇ったんだなという。」

経理のスキルって、多分、私のほんの3分の1ぐらいしかないと思ってるんです。それ以外の、そうやって全体を見て、もっとこうしたほうがいいなというのを結構考えられるというか、客観的に見えるというか、そういったのが自分のよさだと思ってるので、そういったところを生かせるのが、今のポジションというか、この会社のいいところ。」

### 3. 交友関係

体を壊したことがきっかけではじめたヨガにはまる。

#### ヨガを始める

「最初の1年間、私、すごい頑張ったんですよ。働き過ぎちゃって、体壊したんです。1回倒れても、まだ気づいてなくて、2回倒れて、やっと気がついたんですけど、さすがに、ああ、このままじゃ、この働き方じゃいけないんだなと思って。それで、運動はずっとスポーツクラブでしたので。今までの運動の仕方、生活の仕方じゃいけないから、何かを変えようと思って、ちょうど体にいいと言われているヨガとかが、スポーツクラブのあるじゃないですか、クラスが。体にいいというし、何か変えないと、体がよくなるしなと思って、ヨガのクラスに入ったんです。最初週3から始めて、それが週4になり、5になり、6になり。で、夜だけやってたのが朝もやるようになって。朝早く起き始めたら、夜がもう早く寝ないと、できなくなって、今はもう完全に朝型で、朝2時間ヨガと、毎日10キロ歩いている

んですね。」

気を許せる友達はヨガの仲間と、英文会計の専門学校で知り合った仲間である。

「ヨガをし始めてから、ヨガの先生と、あと、ふだんは別々のところでやってるから、全然会わないけど、年に数回、お互いの近況報告をしてという人はいるのと、あとは、ヨガ仲間ではないけれども、何か女友達で1人、お互いリスペクトし合えるというか、というのはいるので、3人ぐらい。

私、会計の専門学校、また別のところに行って、英文会計の勉強してるんですよ。最初は日本の経理として雇われたから、日本の経理だけやってればよかったんですけど、どんどん仕事が増えて、日本の経理の知識だけじゃ足りなくなってきたんです。

それで、英文会計の学校に半年間通って、そこで、試験の受験するまでに、偶然同じクラスに来てた女の子と仲よくなって。というのは、英文会計の先生に「多分、気が合うよ」って言われたから、それで友達になったんですけど。あっちは何かビューティーとかいってるし、こっちはばりばりキャリアで、全然違う。何だろうなと思ってたんですけど、お互い、何かしゃべってるのが未来のことばかりで、過去がどうだったって、一切出てこないらしいんですよ。」

#### 4. 家族について

父は自営業で大工だった。母はケアマネジャーであり、ホームヘルパーを10年経験したのち、国家資格の勉強をしてケアマネジャーになり、現在は施設長。兄弟は仲が良かったが父の暴力があった。

「(前節の未来について考えるという性格は) 多分、育ってきた環境は大きいとは思いますが。というのは小さいときから、家族というものの中で、いがみ合ったりとか暴力があったりとか、つらくて泣いたりとかしてるんですよ。そしたら、目の前を見ることとか過去を振り返ったりしてたら、生きていけないんですよ。はっきり言って。将来、いつかは絶対楽しくなるんだって思わないと、生きられないじゃないですか、夢を持って。多分そういうのがあったんだとは思いますがね。」

#### 5. パートナーや結婚について

「もちろん。結婚はしたいし、相手がいればと、いつでも思ってるんですけど、まあ、急がなくてもいいかなみたいな。まあ、相手がいらないからしょうがないですね、みたいな。(笑)」

#### 6. 将来について

通信制の大学に通い、認定心理士と学士をとりたい。

「この秋から通信制の大学に通い始めるんですよ。どこにいても、目の前でだれか人が困ったときに助けられることを、当初は仕事にしたかったわけですよ。それで、指圧というのを考えていたので。なので、その夢はいまだに全然あきらめてなくて、今回、認定心理士のほうをとるんですけど、心理とか心の面とかカウンセリングとかそういったこともできれば、もっとう、自分がひとりで役に立つことができるじゃないですか。

あと、専門学校卒だと、大卒じゃないじゃないですか。そうすると、今も海外の子会社見せて思うのは、海外だと、ビザとるために、マネジャーという役職のためには学卒、学士が必要で、ビザとるためには最低ライン、大学卒で、それからじゃ、マネジャーとして何年間キャリアがあつてというのが必要になるんですね。

そうしたときに、自分が今の自分だと、そういった可能性を狭めてることになっちゃうんですよ。なので、もうすぐもう30とかにもなるし、大卒というのを取っておかないと、今後どういうふうに進路になるかわからないので。」

## 7. 震災の影響

震災をきっかけに、通信制の大学に通うことに決めた。またボランティアについては、NPO団体になりたい団体を自分の専門知識を生かして支援することを始めている。

「震災というのがあったおかげで、今の私がひとりで生きていくんだったら、目の前の仕事を大事にして、趣味でヨガというのをやって、自分が健康であればいいだけなんですけど。もっとヨガを伝えることだったりとか、人を最終的に助ける仕事というのを60歳まで待つてちゃいけないと思ったから、大学にももう秋から通おうと始めたんです。具体的に人の役に立てるということを今から始めようと思って、それで今、インストラクターもそうだし、ボランティアももう始めてるんですね。」

## Jさん

20歳女性。首都圏に生まれる。高卒後すぐにフランスに9ヶ月間留学し、ステンドグラスの技法について学ぶ。現在はオークションで自分の作品を売りつつ、時々アルバイトをしている。

### 1. 学校時代

小中学校は地元だった。中学校の時は3年間バスケット部に打ち込み、合唱コンクールの委員長を務めるなど充実していた。

「(バスケットは)最初は何となく入ったんですけど、結構おもしろくて、きついんですけど、やめたら負けみたいな。ギリギリ最後までギリギリ、ちょっと途中、体調崩しちゃって、挫折しかけたんですけど、ギリギリセーフでやり切った。合唱コンクールというのがあって、それに結構命かけてたというか。みんなでまとまって何かやっていくのが結構好きで。クラスの合唱コンクールの委員みたいな感じで、一応3年間やって。一応、最後に委員長をさせてもらって。」

### 高校の選択

普通科には進みたくなかったの、総合学科を選択する。

「普通科にあんまり進む気はなくて、結構全然狭まってなかったんですけど、芸術系とかものをつくったりとか、とりあえず普通科には行きたくなかったというか。学校のそのときのキャッチコピーが「自分探しの旅に出よう」みたいな。それが結構おもしろいなと思って。」

学校のカリキュラムで、1年生のときに結構自分の今までの、そういう生まれてからの自分とかを見直しながらやりたいことを見つけていくみたいな感じのことがうたってあって、2年次からはそれに基づいて授業を選ぶみたいな感じで学校の説明会で言われて、すごいそれがいいなと思って。」

### 総合学科について

高校では芸術系の実技に力を入れた。

「結構おもしろかったと思います。でも何か、実技というか、ものをつくったりとか、デザインしたりする授業が実技というんですけど、その学校の中では。普通に英語とか、数学とか、理科とかが座学というんですけど。そっちの実技系が楽しすぎて、座学に身が入らない。実技は工芸の授業があって、それをやったりとか、あとデッサンの授業があってデッサンとか、あとクラフトデザインという木をちょっと加工して、何かスプーンみたいなものつくってみたりとか、ちょっと陶芸のさわりみたいなので器つくってみたりとか、そういう……。何かとりあえずものがつくりたかったんで。そういうつくる系のものが。」

(将来、芸術系とかいう方向に進みたいという気持ち)もあつたと思うんですけど、単純に

ものづくりしたかったという。何か、やってみたかったという。」

### 将来について①

高校での自分の過去を振り返って見直すという授業で思い出した記憶から、ガラス系に進みたいと考え始め、高校1年生の時からステンドグラスの教室に通い始める。

「2年の夏くらいからは考えていたんですよ。担任の先生と、あと授業の先生とかも、ぼちぼち進路の話もしてくるしみたいな感じで。最初は大学とか専門学校に行くつもりだったんですけど、芸術系の。」

1年次の自分を見直そうという（授業）ので、自分は結構、ガラスが好きなんだと気づいて。（その授業は）自分が何が好きだったかとか。小さいときに自分が何を好きだったかとか、生まれたときにはやっていた話とかが、全部、出してくれるんですよ、先生が。それを見ながら自分を思い出して、何が好きだったかとか書いていくうちに、ガラスとか、結構、昔から好きだったなみたいな、きらきらしたもの好きだったなみたいな記憶がぽっと出てきて。それで、ガラス系に進んでみるのもいいかなっていうふうに。それで、1年の秋に、ステンドグラスの工房、教室に通い始めたんですよ。（教室の選択は）ネットで幾つか見繕って、体験と、お話を聞きに行っって、それで一番いいところにしました。」

### 将来について②

専門学校や美大でまずガラスを学んでからステンドグラスに入っていくというのがまどろっこしく感じられ、直接ステンドグラスを学ぶ道を模索していたところ、海外に学びに行ったらいいのではないかと高校の先生に示唆され、海外に行く道を選ぶ。

「2年の夏あたりから結構、考えていて。大学を見に行ったりとか、ガラスの専門学校の卒業生の作品展みたいなのかそういうのを見に行っって、大学も専門もちょっといまいかもと思っちゃって。

私はステンドグラスがやりたいと、もう決まっているんですけど、ガラスの専門学校へ行くと、回り道してからステンドにたどり着かなきゃいけない。ステンドグラスをやるために行きたいけど、ガラスをやってから細々とした道に進んでいくじゃないですか。ちょっと無駄かなと思って。メインがステンドグラスで、そこからちょこちょこ違うわざを覚えていくのもいいんですけど、とりあえずステンドグラスをきわめたいと言ったら変ですけど、最低限、身につけたかったと思って。どれも決め手に欠けるかなと思って。

それで、学校の進路指導室みたいなところ。そんなことを言っていたら、その先生が、ガラスなんて向こうのほうが主流なんだから、海外に行っってみればいいんじゃないの？ みたいな感じで先生に言われて。それを、ああそうかと思って、担任の先生とか親とかに話したら、いいんじゃないという感じで言われて。みんな全然とめないと思って。語学もできないけど、まだ時間があるし、ちょっと調べてみようかなと思って、いろいろ探して。国を決

めてというより、どこでもよくて、とりあえずステンドグラスができればいいかなと思って。海外でステンドグラスをできたら、結構、それだけでもうけもんかなと思って。どこでもいいからとりあえずネットで探していた。最初はイタリアのところが見つかって、そこは結構、奥さんの道楽みたいな感じのところ、資料を請求したらちょっといまいちかなと思って。

(インターネットで検索して) ヒットしたんですよ。先生が、その人はフランス人じゃなくて、日本人の先生がフランスの学校を出て、向こうで仕事をされている方が、ついでに生徒をとっていますみたいな感じのところだったんですよ。日本語のホームページだし、先生も日本語だし、助手さんも日本人だったんで。ラッキーでした。

海外に行きたいなと思ったのも、ここのお教室というか、フランスのほうに決めたのも、日本ではあまり学べない技法があって。日本でステンドグラスというと、ランプの傘とかじゃないですか。私がやりたかったのは、教会のステンドグラスとかって、パネルで絵がかいてあったりするじゃないですか。あれって、ちょっと違うんですよ、技法が。それが、やっぱり本格的に教えてくれるところが、日本にあったかもしれないんですけど、うまく見つけられなくて。そういうのを学べると書いてあったんで。」

## 留学に向けて

「学校でフランス語の先生がいたんで、ちょっと教えてもらったんですけど、ほんとうにさわりぐらいしかわかんなくて。それぐらいしかしていないですね。(海外は)初めて。結構、意外と腹くくっちゃったら。最初は、えーっとか思っていたんですけど、意外と、近くなったらもうやるしかないみたいな感じで。」

## 2. 留学について

留学中は1軒の家を研修生数人で共有するという、半分ホームステイ、半分寄宿舎のような形態で滞在しながら、すぐ隣にある工房で学んだ。研修生は同年代がおらず、30代以上がほとんどを占めた。はじめは2年くらい勉強したいと考えていたが、最長のコースである9ヶ月間学び、帰国後のことは考えないまま帰国した。

「もうちょっと(勉強)できたらよかったかなとも思うんですけど、結構、人間関係とかも考慮すると、限界かなという気がします。」

(帰国後のことは)結構考えていたんですけど、何かもうどうしようもないなと思って、普通に帰ってきちゃいました。先生と、最初に2年やりたいみたいな感じで、最初は言っていたんですよ、行った当時は。でもやっぱりきついなと思って、帰りたくなっちゃったんで。結局、切り上げて帰ってきちゃって。帰ってきてから、工房の生徒さんの卒業生の人の作品展をやるというのがあって、その準備とかをやっていました。」

## 帰ってきてから

2-3年はふらふらするつもりだが、イギリスの工房でお手伝いをする、窯などスタンドグラスを製作するのに必要な道具をそろえる、自分のホームページを作成するのが主な目標である。

「親とかと話していて、まだ二十だしみたいになって。私的には、何か、ちょっとまだふらふらしていたい気持ちがあって。二、三年ぐらいはふらふらしていたいみたいな話を親と話していたら、まあいいんじゃないみたいな感じに、準備期間も含めてみたいな感じで。

一応、何個か目標があって、二、三年のふらふら期間の間に、またちょっと、今度はイギリスのほうに行ってみたいと思うのがあって、今度は何のつてもなくて、工房を自分で見つけて、ちょっとお手伝いをさせてもらえないかなみたいな感じは一緒なんですけど。まだ全然達成できていないんですけど。

窯で焼くんですよ、絵をかくときに。それがちょっと高くて。そういう必要な道具をそろえたりとかするのが一応、目標で。それはもうすぐ買えそうなので、ちょっと達成できそうなんですけれど。」

## アルバイト

現在は時々単発の引っ越し手伝いのアルバイトをしている。

「ものをつくって、オークションに出してみたりとか、ぼちぼちしていたんです。小物なんですけど。したりとかしていたら、材料費が足りなくなってきちゃって、それで11月末ぐらいにバイトを始めたんですよ。それで、あわよくば窯も買えたらいいかなと。

こん包するサービスってあるじゃないですか、お荷物を。オークションでものをこん包して送るときに、もうちょいうまくできないかなと思っていたんで、ちょうどいいかなと。日にちが結構、自由に入れるんですよ。それがいいかなと思って。」

## オークション

現在はオークションに作品を出しており、リピーターもいる。オークションの時には自分が作りたくかつ売れそうな作品を出品している。

「オークションで買ってくれた人が、またつくってくださいみたいな感じで、気に入ってくれた方が言ってくれたりして。経験もないし、若造なんで、全然、駆け出しだし、安めみたいな感じで設定しているんで、そこがよくて頼んでいるのかなみたいなのはあります。結構いいって言ってくださるんですけど。でも、全然小物なんで、単純な。コメントとかに直接差すフットライトみたいな。スタンドグラスで結構、定番なんですよ、小さい。安く売れるし、取っつきやすいんで、そういうのとか出したりして。

でも、オークションのときは、自分がつくりたい感じで売れそうなものをみたいな。これだったら売っても大丈夫かなみたいな。でも、いいねと言ってもらえるんで、大丈夫かと思

うんですけど。結構、ランプとかではそうでもないんですけど、パネルとかつくる時とか、寂しげな感じだねってよく言われて、それは多分、だめなんだろうなと。

何か、受けはよくないかなと思って。どうなんですかね。いまいち、でも、個数をまだこなしていないので、ちょっとわかんないかなっていう。」

### 職人志向

自分はアーティストではなく職人だと分析している。自分が作りたいものを作るというよりは、お客さんに合わせて作っていききたい。

「自分が、特にアーティストって思っているより、どっちかというとな職人のほうが、何か、そういう才能がないのは自分がわかっているんで。つくりたい、つくればいいやみたいな部分。よく個展とか開きなよとか言われるんですけど、あまりそういう意味でのいい作品は多分つくれないんじゃないかな。

理想なのはやっぱり、こういうのがほしいんですけどっていうお客さんと、話していきながら、ちゃんとその人の希望に合っているものをつくれたらいいかな。自分の気に入ったというか、アーティストの人だと、自分の世界観を買ってくれる人が買うっていう感じで。じゃなくて、合わせていききたいみたいな。」

### ステンドグラスのプロ

プロとアマの境界があいまいな世界である。教室を開けば食べていけるが、年齢的にまだ講師は難しい。またつてで経験を積ませてもらおう予定である。

「皆さん結構、教室開いたりとかすると、食べていける。自分がつくっている場所を教室みたいな感じで。そうすると、場所代はとりあえず。

多分、ステンドグラス作家としては、建物の中の窓にパネルを入れたことがないのは、多分、プロとは言えないかなみたいな。でも、一応、今年というか、すごいつてとコネなんですけど、兄の関係の福祉施設に一応、入れさせてもらうことになって。ほとんど寄付みたいな感じなんですけど、それで経験を積ませてもらおうと思ひまして。

今は、どこかの工房に働かせてもらうというのものもあるんですけど、あまり、今はいいかなと思っていて。プロとアマの境界線があいまいで。私結構本格的に学んだんで、いまいち、ちゃんとやっていないでしょうみたいなのはある。そういうところにはあまり行きたくないっていうのもあるし、結構、若過ぎると前に言われたことがあって。それで、もうちょっと待ってみようみたいな気もあります。

でも、まだその先が全然考えられていない。とりあえず、来年中に行けたらいいなと思うんですけど、イギリスに行って、そこから先はどうだろうみたいな感じで。」

## 現在の進路の評価

「ぼちぼち就職し始めている子とかもいて、それを見ると、ちょっとやばいかなみたいなのは思うんですけど。でも。大学生は、別に後悔していないです、なっていないのは。美術系の子とかは、楽しそうだなとか思うんですけど。でも、普通に真剣にはかりにかけたら、全然いいかなと。」

### 3. 交友関係

高校時代から同年代の人間関係は広がっていない。ステンドグラス教室は年上の人ばかりだったので、年上の人とのコミュニケーションはとりやすくなった。

「2カ月に1回とか、3カ月に1回とか、結構、間があくんで。よく会う友達、やっぱり高校の子と地元の子の仲のよかった人たちですかね。」

いつの間にか、結構、人見知りみたいな感じになっていて。特に、結構あいた年上とかだったらいいんですけど、二、三歳ぐらいだったり同年代ぐらいだったりすると、何かちょっと、うってなっちゃう。

何か、同年代の子と全然知り合っていないんです。高校以来、同年代の知り合いは増えていないんで。それで結構、よく高校の友達とか、同じ人じゃないんですけど、なるべく月の中で会うようにしておいてみたいな。

高校のときに通っていた先生とちょくちょく連絡とったりとか、あとはフランスのときの、一緒に生活していた中の何人かとたまに連絡とるぐらいで、全然ないです。」

### 4. 家族との関係

父はサラリーマン、母は子供のころは専業主婦であった。兄に軽い障害があり、作業所に通っている。

## 総合学科に行くに行った際のアドバイス

小学校の時から将来について考えているのを知っていたので、否定されることはなかった。「いいんじゃないとか。やってみればとか。あまり否定されることはなかったかな。小学校のときから将来のことを考えている風なのを知っていたんで、親は。そんなに、真剣に考えていたわけじゃないんですけど、小学校のときに、作文か卒業式か何かで、将来ちゃんとやりたいことを見つけないみたいなことを言ったのを聞いた親が、あんたその年でみたいな。そういう子みたいな感じで多分思っ。そういう面では信頼してくれていたんで、あまり口出しはなかったんですね。小さいときから、うそでもケーキ屋さんになりたいとか、あまり言えなかった。いや、決まってないし、みたいなお子だったんで。」

## 兄との関係

子供のころは気になったが、最近は兄の障害は気にならない。ただし両親は兄のことで我慢させてきたと感じており、フランスのステンドグラスの学校に行かせてもらったのも負い目があるのかもしれないと感じている。

「親にはよく言われるんですけど、あんまり気にしてなさ過ぎみたいな。(兄の障害は)結構軽いんで、そんなに気にしていない。小さいときはすごく迷惑をかけているところが嫌だったんですけど、自分自身がかけても嫌だから、人に迷惑をかけるというところが嫌だけなんだなって気づいて。

でも、もし兄が障害じゃなくても、(ステンドグラスの学校に進むことを) うんとは言ってくれたと思うんですけど、結構、小さいときからフォローに回ったりとか、そういう、やっぱり普通の兄弟とは違う面での我慢っていうのあるじゃないですか。そういうのをしていた自覚もあるし、させていた自覚も多分あるから、そういう意味で、ごめんっていう気持ちもあるから、そういう感じのプレゼントみたいなというのは言われました。」

## Kさん

24歳女性。地元の公立中学校を卒業、都立高校に進学し、一般入試で体育大学で学ぶ。大学時代はチアリーディングに打ち込む。卒業後は不動産会社に就職し、今年3年目。海外旅行が大好きで、日本だけでなく海外にも沢山の友人がいる。

### 1. 学校時代

小学校の時は水泳やピアノをずっと続けていた。中学校は地元ではなく、隣接する学区の中学校に通った。

「地元よりは一駅離れたところに通っていたので。地元の指定のところだと2クラスしかなくて、ちょっと評判も、私が出たところのほうが当時よかったので、お父さんがそこ出身だったこともあって、部活もバスケット部もバレー部もなかったの、そちらへ行こうということになって。」

中学校の部活はバスケットをしており、週に5日以上は練習していた。高校はスポーツで有名な高校に入りたいと思ってはいたが、地元の入れる高校に入った。

「違うスポーツをやってみようと思っていて、いろいろ強いスポーツのところを探していたんですけども、なかなか私の頭もついていかなくて、それで選んだところに普通にもう入ってしまったんですけど。何が強いというわけではなく、まあ入れるところに入った。」

しかし入ってみると、スポーツ以外の生活が楽しくなり、高校生活を楽しんだ。

「(高校に)入って、今まで厳しかった分楽しくやるというのが楽しくなってきたというものあって。それになれて、あとはもう友達と遊んだりということでエンジョイしてました。(アルバイトは)1年生から。家から自転車で1分、2分ぐらいのところのコンビニで。週4とか。5時から10時とか。高校は自転車で25分ぐらい……、30分ぐらい。」

### 大学進学

大学進学時は語学を勉強したいと思ったが志望校には届かず、希望を変更してスポーツ系の大学に進むことにした。

「私、語学がすごい好きで、高校2年生の初めごろから行きたい大学があったんですけど、その大学に入る気はずっとまんまだったんですけども、全部最後まで、推薦もやったし、学科も全部、4学科あったんですけど、4学科全部受けたんですけど、全部だめで、ちょっとレベルが届かなくて。それで、やっぱりスポーツも好きだしということで、名前があまり知れてない大学に行くよりは、そういうところに行こうと思って、体育大に行きました。生涯を通じてスポーツをして健康でいようみたいな、介護、お年寄りとかお子さまとかにやっていただくようなスポーツを考えたりとか、指導とか、障害者の方とかのスポーツの指導方法とかを学んでいました。」

大学生活の中心は何と言ってもチアリーディング部の活動であった。

「部活はチアリーディング部に入ったんですけど。もうそれしか大学はやっていないです。相当厳しいです。体力的にもつらいんですけども、やはり、部活なので縛りがすごくて。時間の拘束とか、10時まで練習があったり。昼休みとかも全部練習があったので。毎日（やめたいと）思ってたんですけど、もうほんとうに、根性じゃないですけど、それをやりたくて入ったというのもちよつとはあったので。そこ、すごい強くて。同じ学年で入った子たちは、すごいもうきずながある感じですね。3年の12月まで。」

また海外旅行も大好きで、休みがあると友達と一緒にいていた。

「9月だけ1週間オフというのがあって、それで大学4年間は毎年、そのときだけ行けてたっていう。もうずっとリゾート、サイパン、グアム、ハワイとかタイとか。高校から一緒にすごい仲いい友人と、あともう1人、チアではない友人がいるんですけども、その3人でいつもつるんでいるんですが、で、毎回行ってました。」

## 就職活動

就職活動を開始した時期は早く、大学2年生の終わりくらいから情報収集をしていた。

「2年の2月ぐらいからやっていたと思うんです。エントリーシート書き方とか、実際に説明会に行き出したのは、やっぱりその夏とかになると思うんですけど。」

就職活動はとても楽しかった。

「私、すごい就職活動を楽しんでいて。すごい楽しかったんですよ。今まで拘束されていた時間が就職活動の説明会というので、ちょっと抜けられたりするということも、拘束から外れてすごいそれも息抜きになったというか、楽しかったです。いろんな企業を見れるということもすごい楽しくて、私は職種を絞ってなくて、なので、とりあえず行ってみようということで、いろいろ探していました。何社だろう、70、80ぐらいは見たと思います。」

就職活動の際に企業を選ぶ基準は海外と関わることができること。

「一応、全部共通しているのが、海外とかかわる仕事というので探していて。探してみたら結構、ほとんどの会社が、今のところグローバルにやられているので、海外とのつながりはあったんですけども、その中から絞るというのも結構大変だったんですが。とりあえず受けてみようと思って、結構、受けるのも練習かなと思って受けたり。自分試しじゃないですけど、そういうところもあって、日程が合えば受けたりとかしていました。」

当初は留学支援会社を希望していたが、企業規模が小さいところが多く、新卒の募集はなかった。

「自分でインターネットで探して、留学会社とかを結構見てたりしたんですけど。留学会社って、やっぱりちょっと小さかったり、ベンチャーだったりするので、ちょっとまだ雇えませんというところで、直接リクナビを通したりしないでやったので、そういうご回答とか来

ていて。」

就職活動の際に助けになったのが、大学のキャリアセンターである。

「自己分析を結構していたので、自分に合ったのが、実際どういうのかわからないので、探してみようかなということ。学校にキャリアセンターというのがあるって、そこで支援してくれるので、面接とかの練習もしてくださったり、あとは、うちの大学は体育系だったので、そういうところの求人はあったんですけど、ほかがあまりないので、それは自分で情報収集するんですけど、一般教養的なことは教えてくださるので。すごい頼ってて、もう毎日のように。履歴書の書き方だとか、「どうですか」と言って、「ここを直したほうがいいよ」というふうにおっしゃっていただいて直すという形ですね。大学3年に入ってから。」

自己PRに力を入れた。

「自分の自己PRとかは全部、教えていただいたとおりそのまま使用して、あとは、その企業に対するイメージとか、いろいろエントリーシートによって項目とかは、試行錯誤しながら考えて。私は、好奇心が旺盛でいろんなことにチャレンジするので、今までもこうこう、こういうことにチャレンジしたとか、バスケとかチアリーディングもそうですし、結構、ピアノも15年間だったりとか。それから習字とか、飽きっぽいと思わせて、いろいろ長くやっていたので、そういうところで、いろいろなことに対応する柔軟性がついたので、いろんなことに柔軟に対応できますというふうに……。」

就職した会社に決まったのが3年生の2月であった。

「第一志望じゃなくて、まだ次は続けようという気持ちはあったんですけど、そこはすごい皆さんいい人で、何か断るのも申しわけなくなってしまうって、いっぱい受けるのはいいけど、そこで断るのがちょっと申しわけなくなってしまうので、それで絞って行って、もう最終的にここでいいかなと思って、早く決まったら遊べると思って、もう決めちゃったようなところがあって、今の会社に決まって。3年の2月。」

### 就職活動後

就職活動のあとは、留学支援会社のインターンシップとディズニーランドでアルバイトで充実した学生生活であった。

「(インターンシップ先の会社は)面接に行ったときに、インターンシップをやってみて考えてみたらいいんじゃないというふうに言ってくださって、じゃあお願いしますということでさせていただきました。」

しかし実際に働いてみると、最初は企業規模の大きい会社に入っているいろいろな経験をつんで、そのあと留学支援会社に行った方がいいと考えるようになった。インターンシップは、就職

活動終了後も続けた。

「営業事務なんですけれども、メールを送ったりだとか、電話対応とか、そこら辺で、ふだんはできない社会知識というか、対応とかをさせていただいたかなと思います。3年の2月ですね。3年の2月から6月ぐらいまでです。

無給だったので、ちょっと頑張ったし、行ってきなと言って、2週間オーストラリアに行かせてくれて。航空券とかは出したんですけど、向こうの現地でホームステイとかさせてくれたりとか。施設見学とか、あと、保育園とかにボランティアとか、老人ホームとか行ったりして、施設見学してレポートを書くという仕事だったんですけど、それで行ってきなと言ってくださって。」

ディズニーランドのアルバイトは部活をしているときからしていたが、さらに力を入れてやり、また誘われて子供にチアリーディングを教えたりしていた。

「ほんとうにいろいろなことに挑戦したかったので、アルバイトは今しかできないとか。部活をしているときも、土日とかでバイトはしてたんですけども。ディズニーシーでお土産屋さんをやっている。その隣接するディズニーリゾートのホテルのアルバイトをして、終わってから行くような感じとかあって。年パスを家族で買っていて行くぐらい（ディズニーランドが好き）。

あとは（ディズニーランドの）バイトですね。

子供にチアを教えにいたりとか。子供に、まだ今もチアを教えていたりするので。」

## 2. キャリア

4月に不動産会社に就職し、しばらくは研修を受けた。同期の大半は残っており、まだ離職者は少ない。総合職として就職した。

「入って半年ぐらいは、いろんな部署に行って、仮配属という形で。あとはもう、研修とかで、ほとんど仕事という仕事はあまりしていなくて、人について行ったりとか勉強している期間なので。私は総合職なんですけれども、短大とか専門を卒業されている方は一般職、事務職で。

室内にいなきゃいけないんですよ、一般職ってずっと事務で。それじゃつまらないと思って。何かもうちょっとおもしろいことしたいなと思って。いろんな仕事を学びたいなと思ったので。いろんな部署があるので。」

最初はビルの管理に関わる仕事に配属された。土日休みという条件が良く希望したところ、希望が通った。

「ビル営業部なんですけど、そこで経理をやっていました。体育会系だから営業をやっても

らうと言われたんですけど、私は、もう日曜日とかは休みたかったし、入って3カ月、休みがないというふうに聞いてしまったので、それは無理ですと人事に言って、そうしたら考慮してくださって、そこはビルなので法人向けで日曜日は絶対にお休みだしということで、そこになって。たまたま通りました。経理の人がいなくなっちゃって、そこが今、あいてるんだけどどう、というふうに。じゃ、ちょっとやってみようかなということ。

結局は室内に座っている仕事だったんですけど。ほんとうにできませんがいいですかというふうに言って、いろいろ教えてもらったんですけど。なので、そこでエクセルとか、そういうところはすごい学べたなと思っているんですけど。1年ぐらい。」

次の配属先は、ビルの賃貸営業。

「ビルの賃貸営業ですね。外に出れる。経理とはほんとうに全然違う仕事で、しかも私、女子が1人だったんです。一般職の方はいらっしゃったんですけど。結構、おじさまが多かったというのもあって、すごいかわいがってくれて、やっぱり1人だけ女子というのがあってか、別に売り上げ、売り上げというふうに言われなくて、好き放題やらせていただいたというか、すごい毎日楽しいぐらいで。」

2か月前から他部署で産休取得者が出たため、そちらに移った。総合職だが、やることは事務職である。

「総合職だけどやることは事務ということで入っています。もう6時過ぎ、7時までに帰れるという楽しさを覚えてしまったので。営業部のときは10時ぐらいまで普通に残っていて。で、もうへとへとだったの。住宅の賃貸のほうなんですけど。」

### 3. 人間関係

人間関係が広く、友達が多い。

「才能だと思うんですけど、人に恵まれるということで、周りの人がすごいみんないい人で、頼れて、そういういい環境にいるので、相談とかはいつでもしやすいし、何不自由なくというか、そういう人たちに助けられて生かされているような人間なので、そういうところでは全然苦勞してないです。一人で悩むことはないですね。」

多様な集団に所属している。

「高校のバスケ部の友達とかは、2週間に1回は会っていたりとか。今も。大抵、遊ぶとしたらその子たちだったりとか、あとは、旅行とかも。

(仲いいグループ)は10ぐらいあるんじゃないかな。アルバイトをしていたときの人だとか、部活とか中学とかもいるので。」

海外にも友人が多い。

「(海外の友達)はチア関係で。中国とか、お友達が行ったりして。台北なんですけど。あと、タイの友達が来たりとか。一回、向こうに私も行ったりとか、そういうのがあったりして。」

結構、旅行とか行くと現地で友達になるというのが多くて。絶対、だれかしら友達になって帰ってくるぐらいなので。そこで交流できたりするので。100人ぐらいは、それはフェイスブック上なんですけど。」

#### 4. 将来

##### 留学したい

仕事をやめて留学したいが、なかなかお金が貯まらない。

「(仕事をやめたいと) もう毎日思っています。入る前からやめたくて、でも、ちょっとやってみようと思って、1週間やって、あっ、続けられたと思って、1カ月できたと思って、そういう感じですね、毎日。

私、お金がたまり次第海外に留学しようと思っていて、でも、たまらなくて。実際旅行とかすごい好きで、もう暇さえあれば、私、旅行に行っているんですよ。だから、それでなくなっちゃって。行かなければたまるんですけど。今年からため始めて、やっとな。それで、もう絶対今年じゅうには、ほんとうは1年続けただけでも、自分、えらいかなと思ったんですけど、ここまで来たら頑張って3年続けようかなと思って、それで、お金をためて行けたらいいなって。

最近、ちょっとフランスに行ってきて、すごい魅了されてしまって、ヨーロッパとかも、英語ができるのはもう当たり前の世界になっているので、スキルをつけるためにも、ちょっと違う言語プラス英語とかできたら、もうちょっと、帰ってきたときの就職に役立つとか、スキルになるかなと思って考えてはいるんですけど。

(海外は) 年に四、五回は行っている。グアムとかは、もうすごい気軽に、4日間とかで行けちゃったりするので行くんですけど、この前、ゴールデンウィークはパリとか、あと、香港とか、ベトナムとか、韓国とか、ボルネオ島とか、結構島とか行ったりするので、島系が多いかもしれない。ランカウイ島とか。海でのスポーツは個人的にしているんですけど、それとは別に、ちょっと現実から離れたようなところに。高校のときからサーフィンをしていて。」

##### 常に全力投球

「1年間ぐらい行けたらいいなと。語学留学で。高校からNOVAには通っていて。ちょっとしたすきを見つけてスケジュールを組むのが、自分でもうまいと思うんですけど。だから、これだけやっていて、親も友達も、今、死んでも悔いはないよねみたいな感じで言うぐらい、私、人より倍生きてるんじゃないかなというぐらい。」

これまでの人生を振り返って、順調ではなかったかもしれないが、周りには全体としてうまくいっていると思われているように感じる。

「どうだったのかな。進路選択は、自分がフリーターになったりとかしなかったというところ

ろ、ちゃんと就職したし、大学もちゃんと行けたというか、行かせてもらったというので、自分の進路選択、一番最初に思ったところには行けなかったというところですけど、でも、結果的にはよかったですし、行けたという、進んでいることで、周りもいいと思ってもらっているのではないかなと。」

## 5. 家族と結婚

妹と両親で住んでおり、近くに祖父母が住んでいる。祖父は書道の先生をしていたので、小さいころから習字を習っていた。

今はパートナーはいないが、結婚するなら海外の人がいい。

「結婚するのは外国の方というふうに、小学校から言っていて、お母さんも、ハーフじゃないと孫見ないからと言っているぐらいなので。ちょっと留学先でつかまえてこようという…。これだけ忙しいとというか、自分の好きなことをやっていると、面倒くさくなっちゃって。落ち着かないといけないところではありますけれども。来年とか、1年間留学できたとして、29とか30までにはというふうに思っています。」

将来はできれば専業主婦になりたい。

「現実的な話で言うと、結婚した方の年収にはよると思うんですが。もし働かなくていいようでしたら、パートとかそれぐらいで。あとは、共働きでがつつり働いて稼ぐというふうには考えていないですね。せざるを得なかったらもちろん働くんですけど、なるべくそれは避けたいというか、専業主婦じゃないですけど、頑張りますのでというところはあるですね。」

## Ｌさん

29歳女性。高校でドイツ語を始め、大学もドイツ語専攻。在学中に留学し、ドイツの大学生と同等レベルの語学力を証明する資格を取る。就職はドイツ語を生かしたかったがかなわず、地元の広告代理店で営業。4年半務めたのち結婚退職した。以降は派遣社員やパートで働き、現在3社目。

### 1. 学校時代について

6年生までは都内在住。中学からA県に。公立中学で、茶道部に入る。同学年で5,6人が所属していた。

「(入部のきっかけは)文化部で唯一おかしが食べられる部だったので(笑)。一緒に入った子が何か茶道を習うことが日本の文化だとか何とか言っていたんで、そのときは私もあまり日本の文化とかも考えていなかったんですけど」

#### 高校でドイツ語を学ぶ

高校は私立女子高。県立高校も受けたがそこは受からなかった。

「本当に自分が何をしたいかわからないまま育っていた子だったので、その学校自体がうちの父が勤めている学校だったので。来ればみたいな感じだったのですね。…(中略)…ちゃんと試験も受けて行きましたけど。」

普通科や体育コースなどがある学校だったが、外国語コースでドイツ語を専攻する。

「その学校は英語とドイツ語とフランス語が勉強できたので、私はドイツ語、英語がだめだから、じゃあドイツ語を勉強してみようかなという形でドイツ語をやりました。…(中略)…その学校がすごくそういう外国語に力を入れているのと、やはり多少、父の影響があって、父がすごくドイツ人と交流があるような、家に来ていたことがあって、何かそのドイツ人の人にドイツ語で言えたらいいなと思って。」

「(同じ中学出身の人は)1人もいないですね。何か私はずっと中学校のときに転校したのもあって、卒業してからまた再会するということは一度もないのです。同じクラスだった子とか、同じ学校だった子とか全然なくて、逆に私のことを知らなくておもしろい。

(友達ができなかつたらとか心配は?) 思わなかったですね。おかげさまで、うちの母親もあなたはすぐ友達ができるからいいわねという形で。」

ドイツ語の授業は毎日2コマ、英語は週2コマ。ドイツ語コースの生徒は2人しかいなかったんで、ドイツ人の先生に生徒2人の授業だった。

「だから、覚えることもできたし、本当にその先生はあまり日本語を使ってくれなかったんで、もう泣きながら授業をしたような思いも。」

高校2年の秋には3カ月間、ドイツに短期留学もした。

「何年生のクラスに入ったのかな。高校よりも下のクラスに行ったんですけれども、もうや

っていることがすごくて、英語の授業とかも英語で始まって英語で終わるから、はあ、全然わからないと。ドイツ語の授業は一応、何かドイツ語で説明してくれるのです。もうそのときはドイツ語のほうがかわかっていたんで、英語は本当にネイティブな感じで、先生が入ってくるなりに、もう本当にすらすら英語を話しながら、一切ドイツ語、母国語は口にしないで終わっていく。日本と違うなど。」

### 大学もドイツ語学科へ

大学はドイツ語が学べる大学を選んで数多く受け、2つ合格したうちのB大学ドイツ語学科に進学。3クラス70人程度。ドイツ語既習コースはなかったので、2、3年生の授業に参加した。

「クラスの子と仲よくなりたかったので、そこにも参加して、で、またほかの上級、上のクラスにも参加してというのをやっていたね。だから、教科書代が2倍かかった。…(中略)…1年生のときに(授業は)目いっぱい受けました。もう朝から最後の授業まで休みなく。」

大学でもドイツに留学する。2年の夏から1年間。ドイツの大学生と同じくらいの語学力をつけ資格を取る。

また、大学では、アジアのC国の少数民族を支援するサークルに入り、C国語の授業も聴講した。

「(きっかけは)何か授業を担当した先生が、D国人の先生だったのです。亡命してC国人になって、で、今、日本でC国語を教えているという先生だったんで、その先生がいろいろ、C国ってこんな国でねと。同じアジアなんだけど、全然日本と違うんだよという話をして、じゃあ見に行こうって思っ行って、それで現状が大変というのを実際に見て、何か力になりたいなと思ったんでそういうサークルに入ったというのが経緯ですね。」

C国に行ったのは1年生の夏休み。

「毎年夏に先生は行っているらしいのですが、生徒を連れて。で、行ってきて、何か私みたいに感極まった人たちがサークルに来て、何かしたいと思う人たちが集まるようなサークルでした。」

「(アルバイトは)土日にちょこっとできるイベント的なバイトだけやって、うちの父が学生の本業は勉強だろうというのをすごく言う父だったもので、なかなかアルバイトができなかった。」

ドイツ語の資格を取ったことで、4年生で必要な単位は認定されていたが、ドイツ人の先生と一緒にいたいなと思って、最後までドイツ語の授業には出ていた。

「やっぱりわかってくるとどんどん楽しくなって、あと先生とも気軽にコミュニケーションをとれるぐらい年齢の近い先生だったので、今、こういう曲がはやっていてねとかと、授業でいきなりその曲を流したりとかしていておもしろかったですね。」

## 就職活動

ドイツ留学から戻ると、3年生の秋。学校で就職ガイダンスがあり、リクナビに登録する。  
50社ぐらいエントリーして半分ぐらいは面接までいった。

「全然私はわかっていなかったの、とりあえず企業全部にエントリーしようと。そうしたら、逆にいっぱいメールが来ちゃって、よくわからなくなっちゃった。…(中略)…そこからまあ気になるころ、やっぱりドイツ系とか選んでやっていたんですけど、まあ、結構企業によっては学校を見て選ぶところがあって。…(中略)…全然決まらなくて、そもそも募集もしていないようなところにもドイツの製品を扱っているということで電話して、募集ないですかとかと聞いたりとかしたんですけど、まあ、募集は現在行っていませんという形で断られたりとかしていました。」

大学の就職課にはよく相談に乗ってもらった。友達もかなり相談していたという。

「こういうことがあってとか報告したりとか相談したりとか、こういう会社ってやめたほうがいいですかねとか、いろいろ。じゃあ、四季報を見なよと、結局自分で調べたり。」

年が明けたぐらいから、ドイツ語にこだわっているのはダメかなと思いはじめた。

「切り換えたのは、やっぱり仕事になるとつらいかもしれないし、大学のときはすごくフランクな日常会話的なことをやったけど、それこそ専門のビジネスドイツ語は知らないから、それはそれで苦勞するんじゃないかもしれないとか、いろいろ言いわけを考えて、じゃあ改めて自分が何が好きかなというのを考えて、まあ、広告代理店とかそういうちょっとミーハーですけども、華やかなことをしたいなと思って」

就職課で、新聞の求人広告のほうがすぐに人を必要としているから、そちらに問い合わせたほうがいいと聞いて、地元紙の求人広告をみて応募。新卒ではなく中途募集の求人だったが、採用された。

「そうですね。何か私も本当にこの会社でいいのかと思ったぐらいな決まり方だったんですけど、面接して、もうその日に、じゃあ、次はいつから来られるみたいな形で言われて。」

## 2. キャリア

その広告代理店は不動産の広告を扱う企業だったが、新規に女性向けのフリーペーパーを扱うことになったための求人だった。今まで中途しかとったことのない会社で、研修は銀行が開いているビジネスマナー研修に半日行っただけ。

「教えてくださる先輩はいましたけど、すごいぶっきらぼうに、ここはこうしてよと。…(中略)…(営業の電話の仕方とかも)周りの人がしている雰囲気をつかんで、私が勝手に電話しました。そこで自分で一応、表をつくって、この会社は全然だめだとか、この会社はまた電話してみようとか、ここは担当者不在だったからまた電話するとかつくって電話をとって、一応、それで2社から広告を取ることができました。いっぱい電話した中で。(手探りで広告を取ったことは)褒められましたね、やっぱり。」

その後しばらくして社長が交代し、それを機にLさんが担当していた媒体から会社は撤退する。「せっかく軌道に乗りかかっていた企業さんもあったんですけど、ごめんなさいの電話を入れて。」Lさんも不動産の広告を担当するようになった。

その会社に4年と11カ月。2009年2月、違う営業所にいる会社の先輩と結婚して、退社する。結婚相手の希望もあり専業主婦になる。「うちの母親も専業主婦をしていたので、まあ結婚したら専業主婦になろうとは勝手に思っていましたけど。」

しかし、子供もいないので暇だからと、市役所が募集していた定額給付金の事務をおこなうアルバイト(派遣会社に登録)に就く。もともと数か月の短期雇用であった。

その後、ハローワークで失業給付を受けながら、結婚後住んでいる地域で、仕事を探す。「やっぱり就職先を地元にしてほしいというのが主人の希望だったんで、その希望にこたえるべく一生懸命地元で探しました」

2010年2月に、ハローワークの紹介で就いたのがコンサルティング業務の個人事務所の秘書の仕事。パートだった。社長と秘書4、5人だけの会社で、秘書はそれぞれ、社長の作る情報誌の編集や名刺管理などの仕事を担当する。Lさんは、セミナーの準備が担当だった。

「小さいセミナーなんですけど、個人の人と連絡があったら連絡をしなきゃいけないので。」どうしても残業が発生するが、残業手当は出なかった。「向こうの言い方は、時間内で終わらせないおまえが悪いんだと。」

「結構暴言を吐く人だったので。社長さんと奥さんと切り盛りしている会社だったので、奥さんのほうに、社長のこういうところが嫌です。直してほしいですというのはいろいろ言ったんですけど…」

11月には辞めた。しかし、翌12月には次の会社が決まる。市役所のアルバイトの時に登録した派遣会社の求人を気軽に見ていたら、以前の担当者から連絡が入ったという。不動産会社の事務の仕事を紹介された。今はその会社の人事部門で採用を担当している。

「今は新卒の対応をしたりとか、中途の人の対応したりとか、すごく充実した毎日なんです。(収入は?) (営業職の時の)半分ぐらいですよ。やっぱりやりがいなんです。まあ、楽しいと時間がたつのもあつと言う間なんで、去年の12月に始めたんですけど、もう本当にあつと言う間。…(中略)…セミナーをするための準備、荷物を会場に送ったりとか、セミナー資料を用意したりとか、あとはデータ入力とか、それこそリクナビ、マイナビは、今、私が使って学生さんとやりとりをしているところなので。」

「(今は)私がいないと仕事が回らないとみんなに言われています。インターネットとかも私、結構できるほうなので、インターネットの修正とかも行うんですけど…(中略)…40か50ぐらいの上司に教えたんですけど、全然わからないと言われてしまって、なので結局、私がやるしかなくて。」

### 3. 交友関係

仲のいい友人といえは 50 人ぐらいいるが、特に絞れば 15 人ぐらい。頻繁に会うのは大学の時の友達。中学の時の友達は、皆地元にはいないので、頻繁に会うわけではない。

「(フェイスブックは)、ドイツ人の友達が教えてくれたんで登録しただけなんですけど、あまり熱心にやっていないです。名前を登録して、私はだれだみたいな書いただけで、写真を早くアップしてほしいというのをこの間言われたけれども、めんどうだから、また今度と。

(笑) …(中略)… ああ、でも日本の友達も見つけたら声をかけたりとか、もしくは声をかけられて。いや、久しぶりとか、私も一人見つけてメールを打ったら、いや、元気にしてるって。僕はこの間、日本人の人と結婚したよとか何か、そういうのが書いてあって。」

外国人の友達は 10 人ぐらい。

### 4. 生まれ育った家族

兄弟は 4 人。兄と妹、弟がいて、2 歳づつ離れている。父親は高校教師で母は専業主婦。父親は最初は家庭教師で不安定な状況だったが、埼玉県に引っ越したころ私立高校の教師となって経済的に安定した。今は、子供たちは皆家を出ている。

父親は仕事で海外に行くが、家族で海外旅行をしたことはない。ほかの兄弟も語学に興味はない。妹がイギリスに 3 か月留学したことがある程度。

「(海外に行くことにご両親は心配されなかった?) いえ、全然。やりたいことをやりなさいと。ただ、お金は自分で稼ぎなさいと、その費用は。」

### 5. 結婚

「(今は、家庭と仕事を両立したいということですか?) そうですね。何かそのほうが自分らしさを保てるというか、生きやすい。」

「(語学を生かすチャンスがあつて、でも、それが家庭のほうの生活に何か引っかかるとしたら?) 家庭はやっぱり優先にしますね。まあ、家庭を壊してまで働くつもりはないですね。」

「うちの家庭が専業主婦だったのと、主人の実家もまあ専業主婦だったらしいのです。ただ、子供がもういなくなったので、お母さんはスーパーで働いているとは聞いたんですけど。だから、本当に私もうちの主人も全然、母親は家にいるものだみたいな感じがあつて。」

「(お子さんが生まれたとして、その先また働く?) そんなまだ漠然とですけど、短時間正社員とかあつたら、そういう制度を利用して家庭と仕事を両立したいな思うんですけど。」

### 6. その他

「(扶養家族の範囲内で働くのではなく、保険も自分が加入者になっていますね?) そうですね。計算したら、別にそんな 103 万とか 130 万でやるよりかはがつつり稼いだほうが結局は、税金を払うけど手元には残るかなと…。」

## Mさん

28歳男性。既婚。中部地方出身。大学進学を機に首都圏に出てくる。大学卒業後は首都圏で青果関係の企業に就職し、現在に至る。小学3年から始めたバドミントンでは、かつて全国大会に出場するほどだった。

### 1. 学生時代

#### バドミントンに打ち込んだ学生時代

公立の小中学校に通う。近所のお兄ちゃんがやっていたのを見て、小学3年生からバドミントンを始める。小学校にあったバドミンントンのクラブには、地域の大人が指導にきていた。中学校の部活の練習は、生徒たち主体で行われた。Mさんの上の学年はそれほど強くなかったが、Mさんの学年が強く、全国大会で上位になったこともある。進学したバドミントン強豪の高校は、中学よりも練習や上下関係が厳しかった。

「練習も、中学校のときは自分の好き勝手に、基本練習しないですし、自分で考えてやればよかったんですけども、やっぱり高校になると専門の先生がいて、朝練とか夜練とか、そういう基本練習がすごく増えてきたんで、心身ともにきつかったですね、最初のうちは。」

そうしたなかで、自由な時間をもっていたまわりの生徒をうらやましく思ったこともある。「そういう【部活に入っていない生徒が放課後に自由にしている】のは、やっぱりうらやましかったですね。朝とかも朝練やってたんで、校舎の前とかをダッシュとかしてるんですよ。こっちがづらいのに友達は悠々と来ているみたいなの、そういうのを見ると、やっぱり、いいなどは思わないんですけど、ちょっとうらやましいなというか、そういう生活もありだなというのはいましたね。」

バドミントン推薦で入学した大学では、部活動で週5日の練習をしつつ、飲食系などのアルバイトをした。

### 2. これまでのキャリアや働き方について

就職の際には、いずれ実家の家業を継ぐこと（4.を参照）を前提としていたこともあり、選考を受けたのは、現在の職場ともう一つの企業のみであった。「バドミントンで就職しようということは、全くなかったです。」と言うように、バドミンントンの活動は趣味という形に落ち着いた。

入社して最初に配属されたのは、デパート内の店舗での販売の仕事だった。新社員向けの一般的な研修はあったが、商品についての専門的な知識やラッピング等の技術については、独学およびOJTで習得する必要があった。

「……あれって結構、技術要るんですよ、かごに盛ったりとか箱にやったりとか。それもやっぱり、最初は全然わからないので。リンゴ1個売るだけなら、全然簡単なんですけど、これをギフトングしてくれとか、そういうのは、やっぱりちゃんとできるのに半年以上はか

かりましたね。」

配属1年半後に、副長として現在勤務している店舗に異動。以前の店舗に比べ規模は小さい反面、1人で対処する必要性や責任の重さは増した。そうした状況下で、現在必要だと考えていることは、店舗経営面でのスキルである。

「今、私が一番考えているのは、いかに利益を取れるか。うちの売場は独立店舗で、売り上げだけ取ればいいというわけではなく、売り上げも、あと粗利、利益率、あとは人件費とかそういう経費を全部見て、最終的に利益を出しましょうという会社のスタイルなので、売り上げが全然取れないとわかったら、そのときは人件費を抑えるか、それとも利益を取っていくかとか、そういう、いろいろ、月によって戦いが……。」

このような経営面について指導をしてくれた課長を、Mさんは尊敬している。2009年夏頃から月1回のミーティングの時間を設けるようになり、1対1で課長からアドバイスももらっている。

「今まで、ほんとうに上の方から教えてもらおうということがなかったんです、経営に対しては。経営に対してはほとんどなかったんですね。うちの店長も、やっぱりそんなにしゃべる人じゃないというか、それで、このことはこういうふうにすればこうなるとか、そういう、いろいろなことを教えていただいて、そういうので、全然、自分の考えになかったことを新たに取り入れることができたので。すごいなというのが一番最初に、で、自分もやってみよう。自分なりの考えも入れて行動すると結果が出るという、そういう、自分の中でいい循環ができるようになりまして。」

（でも、1対1って、ちょっと気詰まりですよ？）「気詰まりといいますか、何かやっていないと思われるのが嫌だったんです、仕事で。でも、確かにいろいろお話すると、やっていないんじゃないなくて、何をすればいいかわからないという自分がやっぱりいたんですよ。自分の今ある能力の中ではやっているんですけども、それ以外のことは考えもつかない。そのことを、例えば、自分が課長にいろいろ言ったら、全部返してくれる。何か言ったら、それはそういうふうなやり方もあるけど、こういうのもあるよって、そういういろいろなことを言っていて、すごい細かいんですけど、内容が。細かいんですけど、意外と、自分、A型でして、意外と、そういう細かいことが好きなんです、数値管理というか。そこがちょっとマッチしたというのもあると思うんですけど。」

店舗経営の難しさに頭を悩ませる立場になり、年配世代の仕事に対する意識に、疑問をもっている。

「バブル時代とかあるじゃないですか、今はこんな、結構タイトな時代じゃないですか。昔の人が今、自分たちの上司、40代、50代じゃないですか。その方たちが、昔は、働いてないということはないんですけど、やっぱり、人もいっぱいいましたし…。その分売り上げもあると思うんですけど。そのときの20代後半ぐらいと、今の、私たちの、結構タイトにやったり、人件費を削れとか、でも売り上げをつくれって。……。昔の人ってあんまりしな

くても、下がいっぱいいるんで、下が全部つぶしていってくれるんですね、仕事を。そういうイメージを持っている人が、今の現状で上に立つと、下にいると結構きついですよね。仕事量も多いのに人件費も使えない、管理もしないといけない。というと、やっぱり、体もきついですし、精神的にもきついですし、そういうのが結構、百貨店の同じぐらいの年代の人とかとしゃべると、同じような意見を持っているんですよ。」

### 3. 交友関係について

Mさんにとって、以下の3つの交友関係が重要となっている。

中学のときにダブルスを組んだ友人の存在は、現在に至るまで大きい。

「ダブルスを組んで、結局、高校が違うとなったじゃないですか。それで、その子はその子なりに頑張ってる。その子…、進学校なので、部活に全然力を入れないんです。こちらは部活にしか力を入れない高校なので、負けられないっていうのがあったり、結構、そのころの存在というのは大きかったですね。」

東京近辺に住む同郷の仲間とのつながりもあり、定期的集まる。

「今でも月1回ぐらいは、県人会というか、〇〇から東京に来ていて、同じ中学校、同じ学年の子が十何人いるんですよ、東京近辺に。その子とは、多いと月一ぐらいは飲みに行くんですよ。大学のころからずっと。」

同年代でチームを作って、現在も趣味でバドミントンをしている。

「チームをつくって。それも同年代だけのチームで、結構、同年代のチームが強いんですよ、同年代がですね。オリンピックに出た人なんかもいるんですけど。」

(それは誰が声かけたんですか?)「一番最初ですか?一番最初は、自分と、もう一人友達と…、友達3人ですね、チームをつくらうということになりました。」

「……全員バドミントンで同じ学年で、全国各地にいるんですけど、今、関東にいる人ですね、基本的に。」

「……どこかの試合とかで会おうと、お互い知っているんで、ゼロからじゃないので、試合が終わった後に飲みにいこうって言って、じゃあチームつくろうよみたいな。だれかまた人が人を呼ぶじゃないですけど、ばーっと広まって。」

「……職種も全然違いますし。ただ、大体みんな土日というか、日曜日が休みなので、そうになると、[不定休なので、]ちょっと自分が行けないときのほうが多いんですね。」

バドミントンで実力上位だったことが集まるきっかけになったというよりも、何か一つをもとに集まって、かつては話さなかった人どうしも話すようになる、そうした関係形成の部分が、Mさんにとっては重要とされる。

(やっぱり、強い人同士、相通じるものがありますか?)「強い人同士って、あんまりないですよ。」

「……強い、弱いよりは、バドミントンということにつながっているみたいな。福井県人も

そうですけど、何か一個つながる場所があると、別に、昔しゃべらなかつた人とかでもあんまり関係なく普通にしゃべったり、飲みにいったり。まあ、飲みが中心なんですよ。自分、飲み会大好きなので。」

また、現在勤めている店舗が入っている百貨店内にも、交友関係がある。

「……。やっぱり人件費があまり使えないので、例えば店長と自分がいましたら、2人とも朝から晩までいる必要がないんです。どっちかがいたらどっちかが休みとか、ばらばらにしたり、朝だったり夜だったりということで、店舗内で飲みに行くことはほとんどないですね。」

「……。まあ、どっちかが待っていればいいんですけど、そこまでという。なので、でも、多いのは、百貨店内の人たちと飲むのは多いですね。例えば、今、…目の前に△△があるんですけど、△△の店長の家族とうちの家族で飲みに行くとか。結局、百貨店の中でのつながりというのは結構ありますね。」

「……。多分、そっちのほうがしゃべる、いろいろな事情というか、全く業種が違う方とも、しゃべるとおもしろいですし。」

(百貨店の中でつき合いがあるというのは、これは一般的にそうなんですか?) 「いや、多分普通の人にはあんまりないんじゃないですか。……。階が違って、例えば、喫煙所とかであいさつすると、じゃあ飲みにいこうかみたいな感じで、全然違う、婦人服の人とかのマネージャーとか、そういう方とかと結構飲み。」

(年上の方で?) 「全然年上ですね…。」

#### 4. 家族について (生まれ育った家庭について)

Mさんは長男で、妹が2人いる。実家は代々青果販売業を営んでおり、Mさんは、家業を継ぐことを、“そういうもの” だとして肯定している。

「継ぐかどうか、今はわからないんですけど、一応継ぐというあれはあったんで、将来考えるということは、あまり普通の人たちよりなかつたんですよ。将来何になりたいとか。それで、好きなことをやればいいのかという形で、親が何かを言うということはほとんどなかつたです。」

(フルーツ屋ではなくて違うことやりたいとかいう気持ちは?) 「それは思わなかつたですね。」 (そういうものだと?) 「……多分、宿命じゃないんですけど、でも、やっぱりおやじとかはそういうのが嫌で、絶対にいろいろ考えないということが嫌だったらしくて、いろいろ考えて、継がなくていいよということは言うんですけど、そうも思わないで。」

(ご両親はどうおっしゃっているんですか?) 「両親は、ほんとうにおやじは、今でもどっちでもいい。で、やっぱり母ちゃんは継いでほしいということですね。」

#### 5. パートナーや結婚について

大学2年のときからお付き合いをしていた、バドミントン部の後輩 (その姉も同じ部活に

所属)と2008年に結婚。全国大会に出場していたこともあり、高校時代から互いの存在は知っていた。現在、現在3歳になる娘がいる。パートナーは現在専業主婦で、医療事務の資格を取るために勉強中。働けたら働くという形態を予定していたが、保育園の空きがなく現状に至る。

## 6. 将来についての考え

将来的には実家を継ぎたいと考えているが、今後数年の方向性については、娘が小学校に進む段階で地元に戻るか、現在の仕事を続けて首都圏に残るか、検討中である。以前はなるべく早い時期に実家を継ぐことも考えていたが、そのように検討するに至ったのには、前述した職場の上司(ミーティングを行う課長)の存在が大きい。

## 7. 働くことに関する考え方への震災による影響など

考え方で大きな変化はないが、計画停電による冷蔵機器利用の制限、売り上げの変化、店舗が入っている百貨店が短縮営業をしたことによる勤務体制の変化、残業代分の収入減、など実際的な影響は少なからずあった。

## Nさん

27歳女性。北陸地方に育つ。北陸地方の工学部を卒業後、関東の大学院に進学し就職するが、研修中に体調を崩して退職。まもなく結婚し、派遣社員として働いている。現在はネットワークビジネスに関心を持つ。

### 1. 学校時代

小学校の時は、ピアノやお習字、トランポリンや英語など習い事を本人の希望で多くしていた。中学校に入って吹奏楽部に入り、日曜日以外は毎日練習をした。担当はクラリネット。勉強も頑張り、理系科目が得意だった。

#### 高校選択時

「進路選択は、やっぱり自分が行けるレベルで、なるべく上のところがいいなというのと、あと、お父さんの影響がやっぱり強くて、お父さんと同じ高校へ行けたらなというので選びました。」

#### 高校時代

「高校生活は、最初は勉強を頑張ったんですけど、途中から何かいろいろ、遊びとかも楽しくなったのと、吹奏楽に入ったんですけど、そこはそんなに強いところじゃなかったんですね。周りに影響されちゃって、ほんとうはバイトしなきゃだめだったんですけど、バイトしたりとかしていました。高2のときだけですね。きっかけは夏休みくらいだったかもしれないですね。それで3月までやったような気がします。マクドナルドです。高校生ができるバイトがそれぐらいでしたので。いろいろ勉強にはなりましたね。要領が悪いので、全然追いつけていなかったんですけど、でもマクドナルドで、何か笑顔が大事とかそういうのとか、接客はちょっと学べたかなと思いますね。

（アルバイトをしたのは）お小遣い。服を買いたいとか、自分もちょっと余裕があったらいいなというので。」

#### 大学進学時

当初は薬学部を考えていたが国公立であることを優先し、同じ北陸地方の国立大学工学部電気科へ進学した。第一希望の大学ではなかったのが編入なども考えたが、次第に大学になじんでいった。

「大学は絶対に行こうと思ってて、最初、高校1年生ぐらいのときは薬学部とかいいなと思っていました。やっぱりこれだけバイトとか、遊んだりとかしていたら、勉強がちゃんとできてなくて、国公立で最初考えていたので、そこをねらえるレベルはなくなっちゃって。私大の薬学部は一応受けて受かったんですけど、選ぶときは国公立の工学部を選びました。」

(抵抗は)最初はなかったですね。物理も化学も、結構どっちも好きだったので。両親とか家族は、やっぱり近くにいるほしいと言ったんですけど、でも地元の大学をねらえない時点で、もう東京もちょっと考えようと思って、それで何を言われても行こうかなと思っていました。

大学に入ったときに、やっぱり絶対に行きたいっていう大学じゃなくて、みんなやっぱり上を目指して浪人している人とか見ていたら……。何だろうみたいな感じになってきて、私もいつかはこの大学じゃなくて、もっと違うところを目指したいなというのがあって、最初は編入を考えていたんです。3年受験で〇〇大学とか行きたいなって。ですけど、そのときに一度部活はやめようかなと考えていました。(大学)1年のとき。あんまり頑張らないようにしようかなって思っていたんですけど、部活のほうで人がそんなに多くなかったので、やらなきゃいけないなくなっちゃって、そうしたらそっちにのめり込んでしまいましたね。」

## 大学時代

大学は地元を離れてひとり暮らしを満喫し、オーケストラと学業の両立に頑張った。「(初めてのひとり暮らしは?)よかったです。全然ホームシックとかならなくて、すごく楽しくって。やっぱり自由なところですね。小さいときはおばあちゃんが厳しくて。門限があって、いつも破って怒られていました。

(オーケストラは)大変でしたね。やっぱり単位をとるのが、オーケストラをやっていると、そっちも結構縛られちゃうんで。みんなやっぱり留年したり。留年は絶対にしたくなかったの。」

## 大学院への進学

高校の時から大学院進学は決めていた。関東の大学院(工学部ではない、理系の総合学部)に進学したのは、当時つきあっていた相手が東京に就職したことや、もう少しレベルが上の大学に行きたかったことがあった。

「院は絶対に行こうって、高校のときから決めていたんですよ。それを高校のときに言っただけだったんですけど、お父さんがそれをまだわかっていなくて、4年のときに言ったら、ちょっと自分の計画とは違うっていう感じで言われましたね。お母さんは、高校のときから言ってたじゃないって言うんですけど。〇〇(大学のある場所)から抜け出したかった。

(関東の大学院に進学したのは)知り合いとかはいなかったんですけど、その時、つき合っていた人が、実家が東北で、勤務先が東京になったので、どっちかにいるっていう感じになって、そっちに近いどこかの大学院に行こうかなって思って、レベルがもうちょっと上のところに行けたら……。

(入学後)大学が違うので、何か雰囲気も違いましたし、いろんなことを勉強できて、ほ

かの学科の先生のちょっと詳しいお話を聞けたりとか、そういうのも勉強になりましたし、すごい今までなかったものを取り入れられた感じはしました。

最初は確かに孤独感はありましたね。なんですけど、研究室で飲み会とかあって、あるとき、お酒の席で結構、私も舞い上がっちゃって、今度旅行に行こうとかいって仲よくなっていきました。」

## 大学院卒業時

就職先に悩んだが、人事の人がいい人だったので決定した。

「そのときも、これっていうやりたいものがちょっと見つからなくて、そう考えたときに、何となくやっぱり薬学部の、それがまた思い出されてきて、医療系とか、あとMRとか、やっぱり電気系もあったんで、電気系もちょっと見てみようっていうのと、あと情報系のところを回っていましたね。(大学の) 掲示板とか見たら、いっぱい企業が書いてあったりしましたね。イベントに来ていたりとか、私はちょっと行ったことなかったんですけど。ちょっとちらちら見ていたんですけど、でも何か自分に引っかかるところがあんまりなくて……。OBの方とかもすごくいましたね。それで、そこの方にお世話になったこともあったんですけど。

(就職した会社は) 人事の方がすごくいい方だったので、うまかったですね、リクルートするのが。会社のやっていることが、環境のこともちゃんとやっている会社だなというのと、でもやっぱり一番大きかったのは、その人事の方の熱意がすごくて。すごい迷いました。もう一つ、OBの方の、そっちのほうでも推薦みたいな感じで入れるところもあって、そこと迷ったんですけど、やっぱり人で選びましたね。」

## 2. キャリア

初めの1カ月が新人研修、約半年間技術研修があった。大学や大学院の専攻とは全く違いう大変だった。体調を壊してしまい休職したが、復帰の際にはうつになっており、もうだめだと感じて自分から退職した。

### 初めての研修

「1カ月だけは本社とかだったんですけど、5月ぐらいから技術的な研修がありましたね。最初の研修は、ほんとうに会社の概要的な感じの研修で、5月ぐらいからは技術的な研修。5月から9月ぐらいまでやっていたような気がしました。すごく大変でした。ハードでした、毎日が。宿題とか、あと毎日テストみたいなのがあったので、それで何点以上とらなきゃ……。 (大学や大学院でやった内容との重なりは) 全然ないですね。

〇〇の研究所を目指してやっていたんですよ、資格を取るために研修を。そこで一度〇〇の研究所をみんな受けさせられて、落ちたので、ほかのところにみたいな感じですかね。

若い人を研修させて、資格を取らせて、その人をほかのところで働かせるみたいな……。派遣じゃないんですけど、そういうところだったんです。

私は、〇〇の研究所の面接の時期に体を壊しちゃって、それだけ大変だったので、ストレスもあって、それで受けたんですけど、やっぱり落ちちゃって、どうしようかなって言っていたときに、ほかの人はもっと上の資格を取るためにまだまだやっついこうみたいな話だったんですけど、私はもういいですって言って、だったらほかの〇〇の子会社に出向しませんかという話が来て、環境も変わるので、じゃ、行ってみますと行って行くことにしました。1月にまた体を壊しちゃったんですよ。このときは、もう精神的にもちょっとだめになっていて、で、休職にしました。

そこからはずっと結構休んでいたんですけど、一応5月までは会社に在籍してて、5月で復帰しようと思って、新しい部署も紹介されていたんですけど、もうそのときはほんとうにうつになっていて、電話もとれない状況だったので、私がもうだめだと思って、で、やめました。きつかったのもあるんですけど、でも自分の考え方の問題だったような気がしますね。結構、こうじゃなきゃだめだというのが自分の中にいっぱいあったので、そういうのが原因だと思いますね。」

退職後は実家に戻り、収入だけは得ようと思ってパン屋さんで3カ月ほどアルバイトし、結婚が決まったのでアルバイトはやめた。結婚のきっかけになったのは、靈感のある親戚の言葉だった。

「今までやってみたかったけど、できなかったことをちょっとやってみようと思って、パン屋さんのバイトとか……。小さいときの夢だった。6月から8月ぐらいしかやっていなかったですね。9月の時点で夫と結婚することを決めて、そのときにすごく自分が太ってて、結婚式までに何とかしなきゃいけないと思って、ちょっとダイエットとかしていました。そのときもちょっと精神的にまだちゃんとした状態じゃなかったんで、それだけやっていたら何もできなくて。水泳というか、プールに行ってウォーキングとか。

私の親戚でちょっと靈感のある方が、今、この人と結婚するタイミングだよと言ってきて、実はそのとき、その夫とは別れようと思っていたときだったので、別れるという話をしたら、夫がもっと頑張ってきたので、じゃ、それならみたいな、そういう感じでしたね。」

### スピリチュアルに関心

親戚に靈感の強い人がおり、スピリチュアルに関心がある。

「やっぱりスピリチュアル的なことに興味があるので、そういうこととか……。やっぱり江原さんとか。すごい共感する部分があるので。やっぱりテレビですごい人気があったじゃないですか。「オーラの泉」、あれが夜、やっているのを見てて、親戚でもやっぱり靈感の強い人がいて……。なので、すぐすーっと入ってきたんですね。」

その人は、その靈感で何かをやっているというわけじゃなくて、小さいときから見えていたみたいで、その方以外の親戚の方でもすごい靈感の方がいまして、その方も結構みんなが集まって、何かお参りとかもしていましたね。ネットワークビジネスで知り合った方とかも結構、そういう人に会ったというので……。そういう周りの方で、占いというか、靈感のある方にお話を聞くという人もちらほらいたりします。

### 社会復帰の第一歩

退職した後に初めて派遣会社の紹介で本格的なアルバイトをした。勇気がいったが、何とか乗り切ることができた。仕事を紹介してもらう際には、特に病気のことは話していない。「税務署の確定申告の派遣のバイトみたいな感じで、3月だけ。最初はすごく毎日どきどきしながら行っていたんですけど、でも環境がよくて、一緒に働いていた人が結構フレンドリーにしてくれたので。結構打ち込んでやる仕事だったので、そんなに何も気にせずみたいな……。」

6月からは本格的に働こうと思い、別な派遣会社で仕事を紹介してもらう。今の仕事はあっているが、少し前まではやめようと思っていた。

「6月から今の派遣の会社で、今は医療品とか医療機器とかの卸の倉庫の事務です。でも、最初は倉庫で、倉庫の中を歩くほうでした。倉庫のもののピッキング作業ですね。(2011年)1月から事務をやっているんです。最初、倉庫の仕事も、ピッキングとか全然やったことなく心配だったんですけど、結構自分に向いてるなと思って。物を箱に詰めていくんですよ。それが、私、結構昔からきちんと順番にそろえるとか好きで……。そういうのが合っていると思いましたね。ちょっと前までは、ほんとうはやめようと思ってて、時給が上がらないからとか、あと、ほんとうにお手伝い程度の事務だったので、最初は。なので、このまま続けていても自分の成長にならないかなみたいなので、やめようかなとは思っていたんですけど、私の前にやめちゃう子が出てきて、その子がいなくなると、私がそれをやらなきゃいけなくなってる。」

### 将来について

一時は現在の会社で正社員登用を目指そうかと考えたが、現在はあまり考えていない。むしろ自分の経験の幅を広げたいと考えている。

「その会社はどんどん上がっていきみたいで、派遣からパートになって、パートから契約社員になって、契約社員から正社員になれる道があるので、それを聞いたときに、ああ、いいなと。頑張っていたら、結構早い段階で上に行けそうな感じはしましたね。」

でも、今は思っていないんです、実は。この倉庫の仕事をして、ちょっとしたころはそう思ったんですけど、今は事務をやって自信がついてきたこともあって、ここにこだわってい

なくてもいいかなって。今は正社員とかは考えていません。正社員になっちゃったほうが、やめづらいとか、いろんなことに挑戦したくなってきたので、正社員でがっちりというふうには、そんなに思っていないですね。今は、最初は営業とかは絶対に嫌だったんですけど、営業にも興味がありますし、サービス業とか、受付っぽい感じのこととかも、結構いろいろですね。

今、興味があるのは、カウンセリングとか、アロマとか、化粧品とか、何か人のいやしになるようなことにちょっと興味があって、そういう感じの経営ができればいいなと思っています。今、この正社員に興味がないっていうところもあるんですけど、ほかのお仕事の話をして、ネットワークビジネス、それをこれからしようかなというのもあるって、そんなに正社員に興味ないというのもあるんですね。お化粧品とか、私の興味のある化粧品とか、サプリとか、シャンプーとか日用品とか。」

### 大学院に進学したのに、関係のない仕事をしていることに対して

「もったいないと思うんですけど、何かそこに縛られちゃうと、またやりたくないことをやっちゃう感じがするので、今はそういうことにとらわれていない。事務をやってみて、事務も結構向いているかなという。今から専門職だと、多分入れないと思うんですけど、見た感じでは。私、そんなにすごい専門がちゃんとしていたわけじゃないんで、いろいろこころ変わっていたので、なので私の技術じゃ無理だと思うんですけど。もしそういうのを目指すとしたら、もう一回大学に入り直したりとか、そうかなって思うので。」

### 3. 友人関係や家族について

出生家族は父、母、妹。現在は夫と二人暮らしであり、将来は出産を考えている。

「(将来の出産について) そうですね、考えています。でも、ちょっと夫が子供嫌いなので。近々では考えていないですね。(出産後も) できれば働き続けられるんだったら、したいですね。夫も働き続けてほしい、やっぱり収入の面では。」

趣味を夫に聞くと、2チャンネルとか言って。ほんとうに2チャンネルが言っていることが全部正しいみたいな感じで。書くまではいかないですけど、読むのがすごく好きで、毎日読んでいないと……。」

### 友人関係

「すごく仲よかった子は今でもやりとりしますし、最近私から、携帯の番号とか変わって、それで、ああ、久しぶりってメールとかはちょっとしたりとかしましたけど。」

### 4. 震災について

親せきや知り合いが被害を受けたわけではないが、放射能のことが気になっている。また

人のために何かしなくてはという気持ちになった。

「やっぱり何か放射線のこととかもあって、いろいろ後から後から情報が来るじゃないですか。なので、だれかに頼っていちゃだめだなというのを感じました。なので、会社に頼って正社員でというのも考えなくなったというのがありますね。今もなるべく水道は使っていないです。

何かこのままじゃいけないなって感じはしてて、その経営とかというの、人のために何かしていかなきゃいけないとか、そういうものは芽生えましたね。」

## 〇さん

26歳男性。東京生まれ東京育ち。小学校のときに引っ越してきた家に現在までずっと住んでいる。短期大学で生物系の学科で学ぶが、卒業後保育士をめざすことを決め、学費を稼ぐアルバイトを1年した後、専門学校に入りなおす。卒業して最初に就職した保育園で人間関係の問題が起こり、半年ほどで退職。新たな就職先の内定取り消しなどもあったが、最終的に別の保育園に保育士として就職できた。給料の面など満足でない部分もあるが、現在の仕事には基本的に満足していて、このまま経験を積んで将来的には公立の保育園に移ればと考えている。

### 1. 学校時代

中学校は地元の公立中学。最初に入った部がすぐ廃部になり、3年まで部活をやらないで過ごしてきたが、3年の時にテニス部が新設されたので入部した。テニスの成績はふるわなかったが、放課後に活動をすること自体が新鮮な経験で楽しかった。また、学級委員を3年間務めた。そうした代表のような立場に立つこと自体に抵抗はなく、「何かいつも推薦されるような形で、いつの間にならっているという感じでした」。

高校は都立高校に進学。部活はしていなかったが、文化祭や修学旅行などの行事関係の委員会の活動に力を入れていた。その高校では行事の運営や企画自体が学生にかなり任されていたため、重要な役割を担った。

### アルバイトの経験

高校1年の秋からアルバイトを始めた。「やっぱり、中学生のときから、高校生イコールバイトみたいな感じがあったので、多分、お金が稼げるんだなというのがきっかけだったと思います」。学校としては本来アルバイトを認めていないが、黙認していた。

最初にしたのは自宅の近所のラーメン屋のアルバイト。週1~2回ぐらい、1日5~6時間程度働いた。仕事の内容は、厨房で麺をゆでて具を乗せて提供するといったもので、あとの店は甘味、デザートにも力をいれていたため、ラーメンに限らずデザートやパフェをつくらせたりもしていた。この仕事は、自分で探して見つけてきた仕事であるという。働くのは週末だけだった。しかしその店長の「いいかげんなところ」が嫌だったため「さんざん、怒られたりはしました」。結局、半年でこの仕事はやめることになる。他には、短期の年賀状配達バイトも経験した。

### 進路選択と大学生活

高校2年からは理系のクラスに進む。もともと動物や生き物が好きだったためだが、社会が苦手だったこともあり文系に進もうとは考えなかった。

第1希望・第2希望の大学に受からなかったため、第3志望のところに進学。浪人して第

1 希望などに再チャレンジしたかったが、親から浪人はできないと言われて、「仕方なく」第3志望に進む。進学したのは、都内の私立大学の生物系の学科（2年制の短期大学部）。オープンキャンパスに行ったことが、そこを受験したきっかけとなった。

「酵母の働きを知るという模擬授業みたいなのがあって、それでクロワッサンをつくったんですけれども、それがおいしくて、こういうこともできるんだなみたいな感じですよ。興味があって、進みました。」

入学後は動物専攻に進み、家畜の解剖や人工授精なども経験した。

「人工授精が一番（印象に残った）。研究室に、ほんとうに毎日、夏休み2週間通い込んで、マウスの雌と雄を解剖して卵子と精子を取り出して受精させて、それを観察するというのをしたんですけれども、それがすごくハードでしたね。（そうした経験は）楽しかったですね。やっぱり、周りにも仲間がいたので、一緒に学べたということはすごく価値のあるものでしたね。」

### 専門学校への進学

2年修了時に、3年に進学することも、卒業して就職するという形もとれたが、卒業する道を選んだ。そして、もともと大学受験時に第1・第2希望だったのが教育系だったこともあり、子供にかかわる仕事をめざすことに決める。

「(大学を選んだときは) やっぱり、子供に携わる仕事か動物、生物にかかわる仕事かって。結局、その大学で2年間いて、自分はやっぱり子供たちに何かできることがしたいなと思って、まだ漠然とはしていたんですけれども、卒業して、自分なりに学校とか調べて、この専門学校なら学ぶこともできるだろうということで、学費をためて専門学校に進んだということです。」

子供にかかわる仕事をめざすことの出発点になったのは、中学3年生のときに職業体験で保育園に行った経験だった。

「たった2日間という間だったんですけれども、そこですごく楽しかったので、こういう仕事もあるんだなというのが、多分、最初のきっかけだったと思います。」

短期大学卒業後、1年間アルバイトをして学費を稼ぎ、翌年に都内の専門学校（児童福祉学科）に入学する。4年制大学への編入や、もう一回大学を受け直すことはせずに専門学校を選んだのは、資格の面を考慮したからだった。

「自分は今、保育士をやっているんですけども、専門学校で、ここだと卒業と同時に取れたんですね、幼稚園の免許と。資格がたくさん取れるということで、そこだったら、大学を受け直すよりももう少し早く、気軽に取れるかなということで選びました。やっぱり、大学を出るよりも今は資格をとっておいたほうがいいのかなということで、周り（親や親戚）とよく相談して決めました。」

進学することになるその専門学校を選んだのは、学校説明会に行って、ここだったらおも

しろいんじゃないかなと感じたことで決めた。

専門学校に入るための学費を稼いだのは、高校時代に続いてラーメン屋でのアルバイトだった。父親の知り合いが店長をやっている近隣の店で、土日を除いてほぼ毎日朝から晩まで、調理から接客まで中心となって働いていた。

## 専門学校での生活

専門学校には3年在籍した。本来2年間のところ、幼稚園の免許もとるために、平日は専門学校で保育士になるための勉強をしながら、土日はスクーリングで幼稚園教諭の勉強をするという形だったため、3年間学ぶことになった。

その学校は、実習が多いことを強調しており、現場とのかかわり合いが多く、それもあって多忙な学生生活を過ごすことになった。

「保育園実習、幼稚園実習、施設実習、で、あとほかにもボランティア活動とか、そういったのにも力を入れているというのがあって、即戦力になれるよみたいなうたい文句があったので、そこが、やっぱり引き付けられるところなのかなと思います。……（授業は）ほぼ毎日、1限から4限、5限まであって、土日がスクーリングがあって、レポートも締め切りが、提出しなければいけないということで、ほんとうに毎日学校に行っているようなものでした。」

それ以外の時間はカレー屋でアルバイトをしており、深夜まで働くことも多かった。週末も、「土曜日をフルに出て日曜日はスクーリングに行くとか」、忙しい毎日だった。ただ、全体として現時点で振り返ると、学生生活は大変だったという以上に楽しかったと考えている。

## 2. キャリア

専門学校を卒業後の4月から、保育園を運営している社会福祉法人に、正社員の保育士として採用される。しかし、勤め始めてすぐから、同僚の先輩との人間関係がうまくいかず、苦勞することになる。保育園の園長や主任にも相談したが、話は聞いてもらえても、先輩の方が上なので、「やっぱりあなたが（改めないで）ね」と言われてしまっていた。やがて体に不調が出るほどになってきたため、とにかく辞めたいという思いで、11月に退職する。

新たな就職先を探すのが、年末にかかることもあってなかなか見つからない中、1月中旬に応募したある保育園から、4月からの採用の内定を得る。しかし、働き始める直前の3月の終わりになって、お金を渡されて内定を取り消されてしまう。

何としてでも4月から働きたかったので、即日ハローワークに行く。やっぱり自分は保育士であり、保育園でもう一度やり直したいという思いから、保育園を希望して仕事を探すのが、年度末という時期でもあって見つからなかった。そんな中で、例えば学童保育で働きながら保育園に就職する機会を探ることもできるから、まずはそこからチャレンジしてみればという助言を受け、4月のはじめに学童保育を運営しているNPO法人に応募する。

しかし、面接を受けると、学童保育についてはスタッフの空きがないと言われてしまい驚くが、その NPO が運営している都内の保育園の方は空きがあると言われる。それならぜひということで、その面接の2日後ぐらいに保育園で実習と二次面接を受けて、さらにその次の日に三次面接を受けて、採用されることが決まる。そしてさっそく4月16日からその保育園で働き始めるという、内定取り消しから2週間ほどの間にとんとん拍子の展開になった。その保育園での勤務が、インタビュー時点で2年目になっている。

### 仕事の状況

現在はその保育園で、週6日で勤務している。人が少ないこともあり、多い日数だが「頑張っています」。保育士は常勤が4名、非常勤が3名。新しい保育園を立ち上げることになって、自分より上の保育士がすべてそちらに移ったため、2年目だが園長を除くと一番上になっている。人間関係は良好。男性の保育士は自分一人だが、「特別、何か、男だから、女だからとか、そういうのはあまり感じずに働ける職場」だという。

専門学校で学んだことは、仕事でかなり生きていると感じている。

「結構、今の保育士というのはピアノも弾けない人が多いらしいんです。うちはピアノがすごい好きだったので、ピアノを練習したり、ペープサート、人形劇とかそういうのも、やっぱり、実際に子供の前でやるのと、大人の、一緒に同級生の前でやるのと全然違うんですよ。やっぱり大人の前だと恥ずかしいです。そういった授業が多かったので、それなりに自信もつきましたし、学生時代にそういうのもたくさんつくってきたので、どうしても働くとなかなかつくる時間がなくて、そういったものが今、役に立っていますね。やっぱり3年間じっくり勉強してよかったなという感じですね。」

### 給料

保育士一般にいえることだが、給料はあまり高くない。「たまに専門学校時代の友達と会うと、ボーナス全然もらえなかったとか、これじゃだめだとか、そういう話はたまにしますね。……もともと、男で保育士というはある程度覚悟して、仕事を決めるわけなんですけれども、やっぱり、実際にこれしかないのかみたいな」。

### 将来

将来的には、公立（区立）の保育園の保育士として働きたいと考えている。

「今は私立の保育園で働いているんですけども、やっぱり、来年以降は区の保育園も受けて、後々、区全体の子供たちのケアとか、そういうのも視野に入れて働きたいなということで、公務員というのは、区立の保育士として働くということですね。（公立の保育士になるには）一般の公務員試験と同様で、一次試験が筆記と作文、二次が面接という形ですね。都が年に1回夏にあって、秋以降に一般の、県とかそういうところの試験があるという感じですよ。」

ね。今は私立でちょっと経験を積んだ後に勉強してやりたいなど。実際に、学生時代に一回、公立の試験は受けて、一次は受かったんですけど、二次でちょっとだめで、やっぱり、受けた人が、周りがもう全員保育園出身というか。現役の保育士というのが多くて、やっぱり経験を積まないといけないのかなという感じがして、今は保育士として経験を積んでいきたいなという感じです。（採用試験を受けるのを）どこの区にするかは、まだ迷っています。よく知っているこの（現在の勤務先のある）区か、地元の区か、ちょっとまだ決めかねているという状況です。」

試験を受けるには、30歳までという年齢制限がある。何度か受験して、それまでに受ければと考えている。

「今年は受験しないです。今年1年間勉強して、来年臨むという形になりたいなどは考えています。……（以前その試験を）受けた感触では、そこまで難しくなかったんですよ。公務員で、よく数的処理とか、そういうのがあるじゃないですか。あれをみっちり勉強したんですよ。そうしたら、すごい簡単過ぎて、何でこんな勉強したんだろうという感じで、それよりも苦手な社会とか、そういったものを勉強しないと点は取れないんだなという感じで、今、少しずつ社会とか理科とか、そういう基礎的な勉強をし始めていて。だから、あいた時間、帰ってから勉強するという形でやっっていこうかなという感じですね。」

また、今持っている資格の他に、将来的にはさらに別の資格も取ることができればと考えている。

「保育士、幼稚園免許だけでも食べてはいけるんですけども、例えば、小学校の免許とか、あと社会福祉士……、社会福祉士は難しいんですけども、介護福祉士とか、ヘルパーとか、そういった福祉関連の資格を取れる方法を探して、取れたら取りたいなと思っています。やっぱり高齢化社会なので、将来的にもそっちのほうにも、例えば、老人ホームとかと保育園が併設した施設とかもあるので、やっぱりそういう、両方の資格を持っていれば、より視野を広げて働けるのかなと思って、そういう資格が取りたいなと。（そう思ったきっかけは？）うちの保育園の近くに老人福祉センターがあるんです、今年、そこにたまたま遊びに行ったときに、ちょっとお話を聞いて、それから自分独自で調べて、たまたま友達が働いているところが、そういう併合というか、合併した施設というのを聞いて、そういった資格を取るのもまた一ついいのかなと。」

### 3. 家族

家族は両親と弟2人。父親は会社員、母親はパートで図書館勤務。進学する高校の選択や、一度大学を出てから専門学校に行くこと、男性が保育士という道を選ぶことなど、いずれも両親は自分の意思を尊重してくれた。「（最終的には）決めさせてくれる両親でした」。

一番下の弟は高校3年生で、進路について話すことが多い。「（その弟も）同じ子供に関する仕事につきたいとは言っていますね。（それは、兄の仕事を見ていてそう思うようになって

た?) そうじゃないかなと……。今、それを視野に入れて勉強しているみたいです。」

給料が安いこともあり、今のところ実家を出ることは考えていない。

### 祖母の存在

「これからの生き方」についての悩みの相談相手として、母方の祖母がいる。70歳ぐらいで、比較的近くに住んでいる。元々店の社長をやっていて、その後は「どこかの施設の経理担当」をしていた。

「女手一つですごい働いてきた方なので、そういった、すごく自分の確固たる考え方を持っていて、やっぱり親とは違った、一歩引いた状態で、的確なアドバイスをくれるので、相談しには行っています。今でも、二月に1回とかは遊びに行ったりしているので、そういったときに話を聞いて、こうあるべきだというわけではないんですけども、こういった姿勢でいくといいよとか、そういうアドバイスはくれるので。」

特におばあちゃんっ子だったというほどではなかったが、成人してからも近い関係が続いている。

「小学生とか中学生で、年にほんとうに数回、夏休みとか冬休みとか行く程度だったんですけども、結構大きくなって、大きくなってという言い方も変なんですけれども、成人してからも、やっぱり泊まりに行ったりとかはしているので、おばあちゃんっ子というわけではないと思うんですけども、やっぱり、そういう関係ですね。」

### 4. 結婚

現在、交際相手はいない。結婚については、今のところあまり考えていない。仕事が忙しいのと、給料が安いことが理由。「給料がすごく安いので、なかなか、養っていけないかなという。養うのは自分だけで精一杯かなということで、そこはやっぱり、給料改善とかがあればなというのはありますね。……大体、男の人の保育士がやめてしまう理由の1位が、これじゃ食べていけないという理由で、やっぱり周りの友達も保育士やっているんですけども、このままじゃできないなって悩んでいる人も結構いますね。」

### 5. 友人関係

中学・高校・大学ときの友人とは、今でも会うことがある。大学時代の友人の中には、小学校の教師をめざす人もいて、自らが保育士という畑違いの道を選ぶことに対しても、「同じ子供を目指す分野だから頑張ろうねということで応援してくれました。」

専門学校時代も友人はできたが、友人たちは地方出身者が多く、地元に戻って保育士になっているため、「月に1回ぐらいは会う友達はいるんですけども、大体地方に行ってしまったので、メールとか電話をするぐらいですね」。

仕事の状況が徐々に落ち着いてきたこともあって、友人とまた頻繁に連絡をとるようにな

っている。「今年とか去年にかけてから、急に何か増えたという感じですね。まあ、自分に余裕ができたのかわからないですけども、結構ひんぱんに連絡をとって、じゃ、この日遊ぼうねとか言って」。

## 6. 震災

震災当日は、保育園にいた。

「地震当日、ちょうど2時46分、お昼寝の時間だったんですけども、最初は、軽い揺れがぐらぐらぐらっと来たときに大きな揺れが来た状態で、そのときに、園長も主任もいなくて、下の、ほんとうに保育士たちだけで判断しなくちゃいけない状態で、すごく大変だったんです。ほんとうに、お母さんたちもお迎えに来られない状態で、泊まるのを覚悟で保育をしていたという感じ。何とか無事に、9時ぐらいには全員お迎えが来て帰れたんですけども」

震災は、保育園の状況に大きな影響を与えた。

「(子どもの人数は、今は定員の) 半分ぐらいしかいないです。震災の影響ということで。職場復帰するお母さんとかが、震災の影響で職場復帰できなくて、それで保育園に預けられなくなったという理由もありますし、あと、東京は怖いということで西日本のほうに行っちゃったりして、それで今、あきが結構出てきちゃっているという状況ですね。」

「次の年の入園児募集のときに、決まっていた子が、仕事ができなくなってしまったということで、すみませんけれども、ちょっと来年はやめさせていただきますというのが、まず影響が出て、その後に食べ物ですね、一番出たのは。やっぱり、水道水に対して、ミネラルウォーターじゃなくてはいけないというのがあって、今、うちの園は100%ミネラルウォーターを使っているんですけども、それで、やっぱり保障もないので、結構ミネラルウォーター代、食費がかさむというのがあって、あとは、やっぱり、すごく心配される保護者の方もいまして、カウンター、計測器を持ってきて、これで毎日にかけてくださいという方もいて、やっぱり人ごとではないなという感じはありますね。」

「(震災後の今) 結構、見学に来る方もいるんですけども、やっぱり、ミネラルウォーター使っていますかとか、どうなんですかって、そういう質問がすごく多いですね。……いつまでミネラルウォーターを使わなくてはいけないのかとか、それは園による判断だと思うんですけども、そういったのがいつまで続くんだろうなという心配はありますね。」

## Pさん

23歳男性。4年制大学卒で就職2年目。3年次にはインターンシップを経験し、大学就職課にも相談した。今の職場は日々勉強という感じ。残業が多いのはいやだと感じている。

### 1. 学校時代について

小学校で少年野球を始め、中学でも部活で野球をつづける。中学時代は、ほとんど勉強しなかった。

「(高校進学について) そこまでやる気もなかったんですよ。だから、行けるところを単願で行ったんです。しかも、そんなに選んでないです。…(中略)… お姉ちゃんが大学に行かなかったんですよ。結構親にも迷惑をかけているような人だったので、そういう人にはなりたくないなという意味で、大学の附属校へ行きました。」

「(誰かに相談は?) あまり覚えはないんですけど、ただ、父親に聞いた覚えはありますね。私立にしようか、それとも都立にするかという話で、どこの高校にすればいいか話した覚えがあります。…(中略)… 大学もそうなんですが、結構父親の意見を聞いています。なので、そのとき多分この高校がいいんじゃないかと言われたところに行っていると思いますね。」

高校に入ってから部活は野球以外のスポーツがしたかった。「(中学で)レギュラーをとれなかったというのが大きい。」スタートラインが皆一緒だからと、ラグビー部を選んだ。

### 大学進学

付属高校であったが、大学は一般受験した。

「中学のころは、大学といたら全部一緒だというイメージで、どこでもいいやと考えていたんですけど、高校に入っているいろいろな大学を調べて、もっと上の大学に行きたいという気持ちが出てきたので行きました。…(中略)… 附属校だったので、大学にラグビーの練習とか頻繁に行っていたんですよ。新しみもないですし、また3年間と同じような生活の延長でしかないと思って、新しいところに行きたかったというのがあります。」

大学について考え始めたのは、3年生の初めごろ。進学について友達同士で話すことはなく、親や教師と話した。受験勉強はラグビーを引退した3年生の10月ごろから。予備校にも行った。

複数校受験して、A大学に合格。「12月くらいの模試では、どこも行ける気がしなかった」ので、この大学に合格したことはよかったと思っている。受験した学部は皆経営学。

「経営を選んだのも、父親と相談して。特に将来何かやりたいことがあるというわけじゃなかったんで、どうしようかなという相談をして、経営学部に決めた。…(中略)… 父親が自営業だから、継ぐとかいうのもあったのかもしれない。」

## 大学生活

「(大学生活で自分の中で大きかったのは?) サークルですかね。オールラウンドサークルというか、特に何か決めてやるわけじゃないんですよ。自分たちでやりたいことを企画して…(中略)…サッカーとか野球とかフットサルとか。」

「いろいろなサークルを見たんですけど、一番そこが居心地がよかったというのと、ほかのサークルは飲み会とかやったんですよ。飲み会に行くたびにコールをしていたんですよ。コールって、一気飲みですか。盛り上げて、だれかが一気飲みする。必ずと言っていいほど、どのサークルもやっていましたね。それが嫌だった。そのサークルにはなかった。」

「人柄というか、先輩の人たちがすごく魅力的でした。(どんなところが?) 何ていうんですかね、難しいんですけど、一人の人としてちゃんと接してくれるというか、そんな感じがしました。みんながみんなそんな感じでした。」

「(大学でどんなものを得た気がする?) それは難しいですね。何ですかね。もともと高校までがスポーツばかりやっていて、勉強したというのも最後の受験勉強をしたくらいで、しっかりと長い間勉強したというのがなかったの、そういう意味では、ゼミに入ったことで2年間がっつりと勉強した、勉強に対する姿勢とかつくられた気がします。それは会社に入っても生きている気がしますね。」

「ゼミのスタイルがすごくおもしろかったです。発表して、それに対してみんなで議論するという。それはおもしろかったです。…(中略)…ほとんど毎回必ずと言っていいほどみんなしゃべっています。」そういう雰囲気先輩と先生が作っていた。

## 就職活動

大学卒業は2010年の3月。リーマンショックの影響があった。就活を始めたのは3年生の2月ごろだが、その前の夏休みからインターンシップに参加していた。人材派遣会社が直接募集していたものに応募した。

「とりあえず何か夏休みにしたいなという。そうしたら、インターンシップ。説明会とかが多分あって、都合がよかったんだと思います。」

インターンシップの内容は、就活生が応募したくなるような会社案内のビデオをつくるというもので、5人で1チームを作り、全部で5チームが競いあうかたちであった。最初は、2週間集中で毎日のように集まって作成し、それを発表した。その後、選抜されて秋から別の課題に取り組んだ。

「学生のうちに会社に携われたというか、組織に入れたというのは大きかったと思いますね。(インターンシップを)やったというのも大きかったですね。今まで1つの大学に属していて、ほかの大学の人との交流はなかったので、そこで全く別の大学の人とディスカッションするというのはよかったです。…(中略)…頭のいい大学ばかりでした。慶應とか東北大学とか、中央、東大とかもいたんです。」

「(そこで) いちいち言葉の意味を聞くためにディスカッションをとめたりしました。まず、言葉の意味がわからないとディスカッションできないので、それで最初のうちはとめて。」

「(その経験は) 自信になりました。夏休みで幾つか競い合って、優勝チームにいたんです。優勝することもできて、その後選抜もされて、そこで自信ができました。…(中略)…就活する上で、夏休み、秋を通してインターンシップをやったんだという自信が、説明会とかで生まれました。」

そのインターンシップは年を越すくらいまで続いた。そのあと就職活動を始めた。インターンシップの仲間と就職の話をした。「就活に対して何もわからなかったの。その人たちは結構勉強していたりするの、ためになりました。」それから合同説明会などでたくさんの会社と接触した。

「合同説明会はたくさん行きました。まず、何がやりたいかというのも決まってない状態だったので、とりあえずいろいろな企業を見たい。そうしたら、効率的に見られるのは合同説明会。」

エントリーシートを提出した会社は10社程度。そのすべてで一次面接まで進み、最終面接まで残ったのが、5、6社ぐらい。最初に内定が出た1社目は辞退して、就職活動を続け、2社目の内定先に就職を決めた。

「1社目は、その会社を知れば知るほど、あまりよくないブラックな企業だという感じがしました。(それはインターネットの情報?) もちろんインターネットの情報もありますし、僕が会社に言わずに抜き打ちで営業所に行ったことがあったんです。そのときの雰囲気最悪でしたね。どなり声ばかりしているところなんです。…(中略)… 最初は、人事の人に対して社員の人と話がしたいと言ったんですけど、真摯に僕の話聞いてくれなかったんです。じゃあ、行くかということで勝手に。」

「2社目は、そこと比較するわけじゃないんですけど、僕に対してすごく真摯に対応してくれたので。この企業に対しても、僕は社員の人と話したいと聞いたと思うんです。ちゃんと時間をつくってくれて、その社員の方の携帯番号も教えてくれたりして。」

2社目はA大学の求人サイトでみつけた求人である。

「この会社が決まったのが8月くらいなんです。7月くらいになって、だんだん募集している企業も少なくなってきたのですごく不安になって、就職課に行きました。」

就職課では大学の求人サイトを教えてくれただけでなく、「話を聞いて、不安を消してくれたりとかしました。すごく真摯に受けとめてくれて、役に立ったと思います。」

## 2. キャリア

就職先は、印刷会社で今は生産管理を担当している。大学で学んだ経営学との関係はほとんどない。入社後、最初の一か月は研修で、その後に正式に配属された。ただし、その12月には異動があった。

「異動になった理由は、私が入った会社は新入社員が僕を入れて2人だったんですよ。もう一人のほうはやめちゃったんです。その席に行ったんです。…(中略)…(辞めた理由は) その人自身に問題がありましたね。すごく会社に対して求め過ぎていて、自分を会社の環境に合わせようとしません。自分の環境ありきで、会社が合わせてくださいみたいな。」

知っている範囲では、ほかに辞めたという話は聞いていない。今年の新入社員は4人。後輩ができて一息ついた感じがあるが、仕事は、まだ知らないことばかりで日々勉強と感じている。

### 一番就きたい働き方

今、一番就きたい働き方として「公務員」としたのは、今の仕事で嫌なのが残業が多いことだから。定時に帰れて安定している仕事がしたい。

「公務員になりたいという希望で、やろうという気にはなってないですね。」

「実際にシステム上で出る残業イコール今の残業ではない。(サービス残業?) そうですね。だから、実際にどのくらい残業しているのかわからないですね。土日は休みなんですけど、そこを出たりしているの。」

### 3. 友達関係について

飲みに行ったり遊びに行ったりする友達が多い。小学校のころからの友達も高校のラグビー一部の友達も、大学のサークルの後輩や同期の友達もいる。20人とか30人ぐらいになる。

「月に必ず会う友達は1人ぐらいしかいないですよ。年に何回か会うぐらい。」

「友達に対してあまり相談したことはないですね。あまり親密な話とか深い話はしない。」

### 4. 家族について

今、一緒に暮らしているのは、両親と2人の妹と弟。姉は家を出て一人暮らし。妹は大学を出て就職したばかり。弟は大学生。父親は、少年野球のころのコーチでもある。「尊敬します。すごく社交的ですし、交友が広いというのがすばらしいと思います。」仕事は、新聞の専売所を自営しているが、今、経営は苦しくなっている。

「購読者が減っていますし。そうすると、広告収入が減って悪循環。厳しいんですよ。僕がちっちゃいころはすごく稼いでいたんですけど、今は。そういう意味でも、跡を継ぐのはどうしようかなと思っています。」

事務的な仕事は母親がしている。「(母のことも) すごく尊敬しますよ。陽気ですし、すごく優しかったですから。」

「(結婚とかはまだ考えていない?) したい気持ちはあります。(おつき合いしている人は?) いないです。いないんですけど、将来したいとは思っています。子供が欲しいです。」

今、家には月8万円入れている。食費というのものもあるが、今までお世話になったことに対

してという気持である。「経営状態もあまりよくないので、そういう意味でなるべく多く。」

## 5. その他

（ニート状態の方が身近にいるということですが？）「働く気がない友達があります。僕以上に将来のことを考えてないですね。その日暮らしで何とかなるだろうみたいな。」

「(心配な感じですか?) そういう気がしますが、その人の人生だからいいかなみたいな。… (中略) …働きたいのに働けないという人は、すごくかわいそうですね。だから、身近にいる人はちょっと違うと思うんですよ。」

## Qさん

28歳男性。東北地方の地方都市出身。大学卒業後就職したが、1年で離職して、学生時代にプロとなった格闘技を続けながらパートの仕事で生計を立てる生活に。2年後に結婚を機に正社員になる。今は、子供が2人でき格闘技とは少し距離を置くが現状には満足。将来は地元に戻りたい。

### 1. 学校時代について

中学では柔道部で活躍し、地元の私立高校からスポーツ推薦を受け、特待生枠で受験してその高校の国際科に進学した。「高校も半ば部活で選んだようなところもあったので。中学、高校は、そうですね、部活ばかりしていたような。」ただし、2年生からは部活と大学進学を両立できる進学コースに学科を変更した。

「ずっと農業の関心に興味があって。海外に木を植える仕事をしたいとか何か、そうですね。海外の農業を支援したいとか、当時そういうことを志していて。それで、国際科を選んだりとかもしたんですけれども。どっちかというところ、その国際寄りよりも農業寄りに頭が回って行って、だったら理系の勉強も必要だねっていうことで、進学科に移って理系の勉強をして。」

「中学とか、小学校高学年ぐらいのときからやっぱり農業って大事だなとか、何か食べ物をつくる仕事をしないとだめとか、そういう木を育てていかなきゃまずいんじゃないかとか…(中略)…『木を植えた男』っていう話を読んでそれにあこがれたっていうのが一つと、あと何ですかね、環境破壊についての何か、おっかない歌みたいなのを聞いたんですよ。井上陽水の「最後のニュース」だったかな。それが何か、環境破壊になって何か人類滅んじゃうよみたいなことを示唆するような歌詞だったと思うんですよ。それを聞いて、幼心にすごく怖くなって、それで、何か子供ながらに環境とか考えなきゃいけないのかなというふうに思ったんですかね。」

大学進学では農業系大学のみを受験し、A農大に進学。

「(進学先について) 結構調べました。やっぱり農業が好きだったので、農業にかかわる大学で自分の学力でもねえそうところは結構調べて、大学はだめなことも考えて専門学校とかでも同じような分野を勉強できるところも調べたりして。その中で受かったここを選んだっていう感じですかね。」

「親は、やっぱり好きなようにすればいいと言ってくれましたし、学校も行かせてくれるっていう話もあったので。で、先生のほうも結構、自分の熱意を買ってくれたというか、それなら、応援するっていうことでいろいろ勉強も……。たまたまここ(A農大)のOBの先生とかもいて、話聞いたりもしたんですけれども。」

上京して最初は寮に入る。学費は親に出してもらおうが、生活費はアルバイトでまかなった。

居酒屋での調理の仕事で週 5, 6 日、月にすると 120~130 時間ぐらい。

「(アルバイトを)夜中から朝までやって……。朝から学校へ行っていたから、ちょっと正直、大学に入って勉強もおろそかになっちゃうこともあったんですけども。日中は日中で大学終わってから別のことをやっていたので。柔道はやめちゃったんですけど、ちょっとほかの格闘技のジムに通い始めて、それ、大学に行って、ジム行って、バイトしてっていう生活。」

進学した学科は、理系大学の中の文系学科のような位置づけで実験などの比重は小さく、研究室に入る人もいたが、本人は研究室には入らず、授業をとるだけの学習の仕方を選んだ。勉強は面白いとは思っていた。

「好き好んで入った大学なんですけれども、(研究室に入ると)そこに時間が割かれてしまって、大学後に行っていた格闘技のジムのほうにはまっちゃった部分もあったので、そっちの時間もちょっと大事にしたいなと思って、研究室は入らなかったですね。」

### 在学中に格闘技のプロに

「初めに大学の柔道部にも入ったんですけども、やっぱり研究室と同じようにちょっと時間の縛りがきつかった。この大学に入ったので自分で農業実習とかも選んで行ったりもしたので、そういうのが、部活とかに所属してしまうとできなくなってしまうので、だったら、民間の格闘技できるジムに行ってみようと思って。で、何となくやったら(その格闘技に)はまっちゃったみたいな感じですかね。」

「それで結構はまってやったら大学在学中にプロになることができて。そんなにメジャースポーツではないので、(ファイトマネーは)あるはありますけれども、ほんとうに何か微々たるものなんで、あると考えるほうが。ただ、その試合のために照準を合わせてバイトをいっぱい休んでしまうと、そっちのほうが、稼ぎが減っちゃうかなというような感じだった。」

「(プロになったのは)大学の3年生のとき。そのときはほんと忙しくしているっていうのが何かいいことというか、自分今、輝いているじゃないですけども……。暇な時間をつくれなかった。できるだけ動いていたいなと思ってて、多分忙しくてもそこまで苦にはならなかったです。みんな好きなことで忙しいだけなので。」

### 就職活動

「大学3年の終わりごろに大学でも就職セミナーみたいなのが始まってて、初め全くびんと来なかったんですけども、周りが何かそういうのをし始めているのを見て、これはしたほうがいいのかと思って、やり始めて、大学4年の6月ぐらいに内定もらってっていう感じでしたかね。」

「農業に関する仕事がしたいなと思ってて、農業関連団体のところを選んだんですけども、2つぐらい落っこちて。で、結局内定もらったのが、農業団体に特化した旅行会社で、旅行会社なので農業には直結していないんですけども、お客さんは農業に携わる人が多かった

ので、おもしろいかなと思って、受けて内定をもらったので、やってみようかなって感じで就職したんです。」

「1個内定取ったらもう就職活動やめちゃって、決まったからここでいいやっていう感じになっちゃってて・・・(中略)・・・もっと内定もらうために続けるとかいう人もいたんですけど、何か、僕は決め打ちでしたし。就職しなきゃいけないっていう切迫感はありましたけれども、やりたくないことをしてまで就職したくないなと思っていたので。バイトもずっと続けていて、経済的に何とかなるってこともありました。就職できなくても何とかなるだろうというものもあったので、だから、たまたまどっか受かりましたからよかったですけれども、受かんなかったらそれでもよかったかなというのがあったから、幾つも応募はしなかった。」

## 2. キャリアについて

内定をもらった旅行会社に就職するが、その会社は1年でやめた。

「会社の人にも恵まれていましたし、環境的にはよかったですけれども、やっぱりちょっとお給料も安くて拘束時間もすごく長くて。A県に配属されたことで、格闘技もやめなきゃいけなくて。仕事自体はおもしろかったんですけども、それ以外に割ける時間の余裕がなかった。」

「やめて、また東京に戻ってきて格闘技始めたので、格闘技のためにやめたみたいなところがありますかね。あと、やっぱり旅行会社、楽しかったは楽しかったんですけども、やっぱり農業とはあまり直結していなかったというのがあったので、そのときにもっと農業に直結した仕事であればもっと自分の興味がわいて仕事やめるには至っていなかったかもしれないですけども」

### パートで働きながら格闘技

東京に戻ってきて、大学在学中のバイト先の居酒屋で週末働き、さらに他大学の学食で調理パートとして週6日働いた。合わせて手取りは月25万円ぐらい。前の会社より格段に多い。

「忙しかったですけれども、A県にいたときよりはバイトでも稼げるし。ずっとやっていた調理の仕事だったので、好きな仕事でもあったので。農業には全く関係ない仕事ではあったんですけども、好きな仕事でそれなりに稼げたので。ただ、やっぱりパートっていう雇用形態にはかなり不安は持っていました。」

### 結婚と正社員

元の会社の同僚でB県に配属されていた女性と会社を辞める前から付き合っていた。会社を辞めて格闘技がしたいという相談をしたら、彼女は「そういう理由があったらいいんじゃないの」と理解を示してくれたという。

「パートの1年目のときに入籍しちゃったんです。奥さんはB県にいたんですけれども、パートの2年目になる年に奥さんが東京に出てきて、奥さんも働きながらだったんですけれども、結婚もするとやっぱり夢ばかり追っていてもなという感じで。ちゃんと就職しなきゃということで、パートの2年目の秋ぐらいから就職を考え出して、今の会社に採用してもらえたという感じなんです。」

「ずっと調理の仕事をしていて、調理師免許とかも取っていたので、農業が第1だけれども、もし、選択肢が広げられるのであれば、調理関係もいいたかったんです。…(中略)…面接まで受けたのは、今の会社と前に1個落っこっちゃった会社があるんですけれども、そこだけです。」

「面接になると結構、勘違いかもしれないですけども、面接官の人が、おもしろがって話を聞いてくれるのかなと。自分で言うのも何ですけども、格闘技したりとか、今までの生活の仕方っていうのが、結構変わっている部分があるのかもしれないので、そういう部分をおもしろがって聞いてもらって、その辺を買ってくれたところに選んでもらえたのかな」  
今の仕事は米の卸売り業。

「お米の販売っていうところでは、やっぱり農業に携わってくることになりますし、やっぱり米っていうのは、日本の一番の基幹作物ですので、そういったものを販売してお米の販売量を増やすっていうことが日本の農業を支える上でも非常に大事なことであるという自負もあるので、そういった部分ではその農業を今までいろいろな仕事をしてきましたけれども、一番やりがいのある仕事ではあるのかなという気がしています。」

「(格闘技は)今もしているんですけども、会社の面接のときに正直にやっていますと言って、やりたいですって、今後もプロとしてはやりたいと思っていますっていう話をして、ほんとうは何かコンプライアンス上、好ましくないのかもしれないですけども、やらせてもらっていますし、ちょっと今けががして1年ぐらい休んじゃっているんですけども、まだ復帰してやろうと思っています。」

### 3. 交友関係

中学、高校、大学、格闘技関係と、おのおのの時期に親しい友達ができる。

「親しいっていう友達だったら、20人もいるかもしれないですけども、ほんとうに深い話もできる友達も5人、6人とか、そのぐらいいはいると思いますけれども、実際やっぱりもうなかなか会えないですけども、時間的にも。」

「自分の転機に実際どれだけ力になれるかっていうのは、その友達とかは、その力を持っていないかもしれないですけども、自分の気持ちを相談したりとか、力になってもらえるとか、相談できるような人は、そういう意味では結構みんな気兼ねなく話せるかなとは思いますが。結構ほんと、友達にも恵まれていると思います。」

#### 4. 生まれ育った家庭について

進路選択にあたっては、高校の時の転科も大学選択も、離職の際も、親は本人の好きなようにすることを支持し、選択に介入することはなかった。

兄弟は兄と妹。両親と祖母がいる。兄は東京に出てきている。兄弟と会う機会は少ないが親しくしている。年に何回かは実家に帰っている。

#### 5. 結婚について

今は、2歳と生後半年の子供がいる。奥さんは今は専業主婦。

「それもあって家庭のほうも忙しくなってきたので、格闘技もやりたいですけども、比重がちょっとそこまで置けなくなってきたしまっているのかなと。それはでもその分、家族に比重を置くっていうのも自分の中では満足していることですし。そういう意味では、ほんとうに恵まれている人生かなというふうには思います。」

「葛藤する部分もありますけれどもね。もっとやりたいっていうのもありますけれども、仕方ないかなっていうのが。やっぱり仕事行って、練習に行って帰ってくると相当遅くなっちゃいますし、そうすると、やっぱり奥さんはもうちょっと育児で疲れきったりするので。奥さんは格闘技やればいいとは言うんですけども、100%本音じゃないのかなというのは、気もしますし。そこはやっぱり我慢しなきゃいけないのかなというふうに。もう一人子供欲しいなとかも思ったりもしますし。」

#### 6. 将来について・震災の影響

「いずれ地元の仕事があれば、田舎に帰りたいとは思っているんですけども。奥さんのほうも地元がB県ですし、やっぱりいずれは東北に帰れたらいいのかなと思っているんですけども、やっぱりどうしても仕事があっち、ないもんで。」

今回の震災では、奥さんの親せきや知人に亡くなったり、家を流されたりした人がいる。本人の福島の人には、放射能のせいで避難しなきゃいけなくなった人もいるという。

「(考え方の変化としては)昔より、いずれ田舎に帰りたいっていう気持ちが強くなったかもしれないです。東京にいて昔より不安を感じるようになりましたね。もしここで地震が起きたりしても、東京で被災はしたくないとも思えます。」

「自分で食べる物は自分でつくりたくないともう危ない世の中になってくるんじゃないのかなっていう気もします。…(中略)…ただ、実際現実問題、仕事はないので、実際地元で農業してみたいなとかも思ったこともありますけれども、そんなに甘いものでもないですし。自分に農業、勉強はしていましたけれども、実際のノウハウがあるわけでもないです。」

「奥さんも東京は楽しいけれども、ずっと住む場所じゃないっていうようなことも言っていますし、いずれ田舎に帰るっていうのは共通しています。」

## Rさん

27歳女性。都内出身。希望していた大学には落ちてしまったものの、親の勧めで入学した大学で友人に恵まれ、満足の行く大学生活を送る。内定を得るまで時間がかかったものの、卒業後はIT系の企業に就職。3年後に異動した部門で仕事の面白さを感じるが、1年でその部門が統合されてしまう。同じ会社での勤務を続けているが、漠然と転職を意識し始めている。

### 1. 学校時代

現在も住んでいる自宅には、小学校から上がることに引っ越してきた。地元の中学校では、陸上部の部活に取り組む。高校は、自分の居住地の学区にある、第一志望の都立高校に進学。バレーボール部に入るが、メンバーが固定されるのをみて1年でやめることになる。クラスに仲のいい友達ができず、高校のときは、あまりいい思い出はないという。

大学の進学に際しては、進みたい方向が特に見えていたわけでもなく、進学校だった高校でも、特に進路についての指導はなかった。

「何がしたいというのはほんとうに特になかったの。それよりは結構すごい先のことを見過ぎて、何でもつぶしがきくような学部とかがいいと友達の話とかを聞いていて思って、法学部とかにしようかなと。親に、そんなのは多分入っても興味がなければつまらないんじゃないみたいなこととか言われて。ただ自分では何がいいかわからないから、とりあえず名前的に今後が見込めそうな学部とかを。」

社会科学系の学部を受験するが、希望していた大学にすべて落ちてしまう。浪人も考えるが、現役での進学を望む親が見つめてきた大学（女子大）を受けることになり、そこに進学することになる。

「大学受けるときにその大学は候補に入っていなかったんです。女子大だったんですけども。私、絶対女子大には行きたくなかったんです。で、希望していたところが全部実は落ちてしまって、でも後期の試験で受けられるところということで。私は受けたくなかったのもう浪人とかでもするかと思ったんですけども、うちの親的にはもう現役でという考え方で、多分私がそんなにもたないと思ったのか、とりあえず親が調べて、その中でこういうのがある。その中で、その大学を受けたくなかったけれども受けたっていう感じですね。」

### 大学生活

入学前は女子大一般にあまりいいイメージはなく、消極的な選択だったが、友人に恵まれ楽しい大学生活を送ることができた。

「もともと何がやりたいと入ったわけでもなく、この大学に行きたいからどこの学部でもいいというわけでもなく、結構仕方ないからという感じで入ってしまったので。最初はすごいイメージはよくなかったんですけども、結果オーライなのが、すごい楽しい大学生活を送

れたので、そういう意味だと親に感謝はしていますけどね。」

「(楽しかった理由は) やっぱり友達ですかね。高校のときにすごい固まっているような友達関係だったので、大学、もちろん女子大というのもあって同じような、みんな女子というのもあるんですけども、何だろう、やっぱりサークルとか、大学ならではのそういうので友達の関係がすごい広がったというのと、ほんとうは英語のクラスとか、クラスが分けられているものがあるって、その英語のクラスですごい仲よくなった子たちというのがやっぱり今も仲がよかったり、あとはゼミで、やっぱりそれもゼミっていう空間で。どうしても研究とかって時間かかったりするので、一緒にいる時間が多かったの。それで仲よくなったりっていう、いろいろなグループみたいのがある。ずっとこれっていうわけではなくて、授業であったりだとか、ゼミだったりサークルだったり、いろいろなカテゴリーの中で友達ができたっていうのがすごいおもしろかったというのがありますね。」

「友達もやっぱり、自分が行きたい大学ではなくて、結構仕方なくじゃないですけども、そういう感じできている子がすごい多かったというのもあるって……。全員がすごいやりたいことがあって、それに向かって「はい」って進んじゃう感じだと、多分ちょっと考え方の差みたいのを感じたりするんですけども、そういうのもなくて、結構友達も、のほほんとしているわけではないんですけども、一緒にいてすごい楽しかったりだとか、勉強でこれがやりたくて入ってすごい夢中になるというわけでもなく、やっぱりちょっと似たような感じだったので、そういう意味だと仲よくなれたのかなという1つのきっかけだとは思いますがね。」

## 就職活動

就職活動には、早い段階から進んで取り組んだ。

「結構、私は就職に対して、今まで高校とか大学とか、高校は希望のところに入ったにもかかわらず自分の描いていたような高校生活ではなかったというのと、大学入ったけれども、その大学ももう少し勉強しておけばよかったのかなというのがあったので、就職は失敗したくないという思いがすごい強くて、結構大学1年のときからなるべく早目に単位を取ったりとか、そういう努力はしていたので、やり始めたのも結構早くて3年ぐらいから。」

3年のときに参加した旅行会社のインターンシップで、他の大学の学生たちと接して刺激を受ける。

「私は途中で(就職活動を)やめるという選択肢は自分の中でなくて、仕事をしたいという気持ちがいっぱい強かったので、絶対就職は成功させたいという思いがあったんです。その中で、自分の大学だけだとやっぱり考え方とか見るところというのがすごい狭まってしまう気がしたので、ほかの大学の友達と会ったりとか、ほかの大学の友達から直接情報をもらえるというわけではないんですけども、いろいろな考え方を聞いたりとか、そういう情報が回ってくるというのはすごいおもしろかった気がします。」

しかし、業種を絞らずに早くから活動する中で、3年の2~3月になって「疲れて」しまう。

その後、ITというものを、自分のやりたい仕事のイメージとして語れるようになったのは、4年の5月ごろだった。だが、その時期と採用のタイミングが合うわけではなく、就職活動はさらに続くことになった。

「やっぱり仕事を続けていきたい、やりたいという思いがあったので、入ったら何かしら技術とかを身につけて、どこでも通用するような力をつけたいなというのがあったので、それでその1つにITがあって、あとは何ですかね。仕事をする上で、多分やりたいことというものも自分の中ですごい重要だなと考えていて、私がやりたいことって、仕事を通して何がやりたいかって考えたとき、結構仕事を通して何かを大きく変えたいって思ったんです。何か自分がやることとか仕事を通して、みんなの何か思っているようなことを変えられたりとか、不便に思っていることとか、それをプラスのほうに変えていけるような、そういうことをしたいなという漠然な思いから、もちろん結構いろいろなことで変えられると思うんですけども。そうしたらやっぱりITの力って多分これからすごい大きいだろうなと考えたのと、ITってそれ自体が大きなインパクトというよりは、ITを入れた会社が大きく変わったりとか、効率がすごいよくなったりとか、そういう部分を自分で何か変えていきたいという思いがあったので、それでITを選んだのが1つあって。」

「私がやりたいことって、大きい企業とか、ある程度上のほうの企業でないとできないのがあって、もちろんITというとすごいいっぱい会社はあるんですけども、下のほうの工程をやっている会社だとそれを実感することはできないんですね。それを語れるようになったときには結構応募とかが始まっていたりとか、もう終わっていたりとか。……やりたいということが固まったときにはちょっともう遅かったみたいな部分は少しありました。」

夏の終わりに内定を得るが、希望していたITとは無関係のものだったため、ITの技術に関する営業ができる仕事をめざし就職活動を続ける。12月にIT関係の内定を得て、そこも「100%やりたい企業でやりたい仕事というわけではなかった」ため迷ったが、ある程度大きい会社で将来その仕事ができる可能性がまだあるだろうと考え、最終的にそこに決める。

## 2. キャリア

最初に配属されたのは、ITとは直接関係のない、電話での問い合わせに対応する部門。10ヶ月ほどで、ITの知識を使って電話でサポートする部門に異動し、3年ほどその仕事をする。次の異動がまだ電話対応なら仕事をやめることも考えたが、次にすることになったのは他の会社の人と共同でする仕事で、自社の人間関係から離れた新鮮さや、また望んでいた営業に近い仕事ができることもあり、充実した時間を過ごす。

「今までチームで仕事をしていたものが私1人で仕事をするようになって、同じ会社の人ではなくて別の会社の人と仕事をするようになったんです。……いろいろな考え方の、実際にほかの人と仕事をするようになってすごい刺激を受けたりだとか、今までできなかった仕事

ができるようになって、それが営業系の仕事で、結構出張に行かせてもらったりとか、いろいろな場所で説明会をやったりとか。いろいろな人と何かをつくり上げるという私がやりたかったようなこととかができるようになって、それはすごいおもしろかったんです」

しかし、1年で部署が統合されてしまい、事務の仕事に変わってしまい、現在に至っている。

「今までやっていたことってというのが全部できなくなってしまって、今はずっと事務作業。電話のサポートがメインなわけではないのですが。何かを考えてつくり出したりとか、提案とか、そういう部分ができなくなったのは、仕事でやりたかった部分が今ちょっととられている感じがして、どうしようみたいな部分がまた出てきていますけどね。」

組織の組み替えや会社の状況の変化もあり、再びそのおもしろかった仕事が今の会社でできるようになる可能性はおそらくない。同僚の入れ替わりも多い中で、この会社でこのまま働き続けていくイメージが持ちにくくなっている。でもまだ、転職する・しないも含め、具体的な展望を得るには至っていない。

「やっぱり同じ会社で仕事をしていくというのは不安があつて。というのも、やっぱり今これだと思えるものがないので、そういう会社でずっと働いてってというのは、ちょっとやっぱり不安があるのが。でも、やめても不安だし、やめなくて後悔するのも不安だしと思うと。」

## ITというスキル

就職活動ではIT系を志望し、実際にIT関係の会社に勤務しているが、もともとITに関連する技術や資格を持っていたわけでも、また就職活動の過程で身につけたわけでもなかった。

「(IT関係は)むしろ嫌いだったので、今後は絶対必要になるものだと思っていたので、やってちょっと自分のものにしようと思って。(会社に入ってから教えてもらうつもりだった?) そうですね、その意味が強かったですね。」

就職後、短期間の研修を受けたり、資格も取ったりしたが、基本的にはIT関係の知識や技術は、実際の業務を通じて身につけていった。ただ、そうした知識を積極的に学ぼうという気持ちは、やがて薄れてしまった。その結果、自分が持っている知識も、転職で売り物になるぐらいのレベルには及ばない程度にとどまっている。

「すごい面倒を見てくれる先輩がいて、その先輩の希望にこたえたいみたいな部分のときは勉強したりとかしましたけど、もう後からは、うるさく言われる一方だとかこっちもちょっと勉強という気持ちにもなれなくて。……スペシャリストでも、どこでも通用するというほどの知識ではないですね。」

## 転職のイメージ

仮に今の会社を辞めて他に移るとしても、今の仕事との関連性や継続性があることにはこ

だわらない。

「(新しい仕事の具体的なイメージはあるか) うーん、イメージ。それが結構ないので、それでちょっと今迷っているような部分ですね。(ITの知識や経験を強みとして転職しようとは考えないのか?) 売りにしたら多分それはあると思うんですけども、でもそれを前面に押し出して、次の仕事でも同じ仕事とは考えていません。仕事をする上でこれだったら強みですとは言えますけれども、それでその仕事を、ばりばりITというもので探そうとは、別にこだわりはないです。」

そのため、まだ転職サイトを見たりするまでには至らず、漠然とこのままだと心配だと思っているぐらいの状態にいる。

### 3. 家族

家族は両親と弟。弟は既に社会人で一人暮らしをしているため、現在は親子3人での生活。両親は、基本的には、進路選択や就職・転職などについてあまり意見を言うてくることはなく、見守るというタイプ。

「基本的にうちの親はあまり口出しはしない感じなので。ただ、よほど間違っていると思ったら多分言うのかなというぐらいで。これに行きなさいとか、絶対やめなさいというのは、よほど考え方が間違っているなと思ってそれを選んでいるのであれば多分注意すると思うんですけども、そうじゃない場合にやめたほうがいいというのは基本的にない……。」

「(就職活動のときに、親が口出しすることは) いや、特にないですね。別に何かどういうところを受けているとか、そういうことも言わなかったし、聞かれることもなかったし、結構そういう意味では自由だったので。」

「(調査票の「これからの生き方や働き方」を相談する相手として、親を選んでいたことについて) やっぱり仕事をやめるとかそういうことに関しては、自分の意思で結局はやめるけれども、一応(親に)言うておく必要があると。会社の状態とか好きなこととか、そういうのは伝えた上でということが多分親の欄に丸をしたのかな。最終的な意味で。」

### 4. 結婚

いま付き合っている人はいない。「結婚の前にしたいことがありすぎて」。ただ、周囲の友人に結婚が多く不安を感じることも。

### 5. 趣味

自分にとって「趣味の部分はすごく大きい」。

「仕事以外の部分で楽しいところを見つけないと、日常がやっていけないというか。」

趣味のひとつは語学(英語と韓国語)。学校に通ったりするほか、手紙をやりとりする英語圏の友達がいる。もうひとつはヨガ。大学生の頃からやっている。

「(結婚の前にしたいことがありすぎて、と言っていたが)何か好きなことをやりたいなと思って。それは趣味の語学もそうですし、あとヨガが好きなのでヨガの資格取ったりとかしたいなって。自分の好きなことを。今まで就職して、ずっと流れに乗っていたので、ちょっとそろそろ自分のやりたいことをやりたいなというのが。」

## 6. 震災

震災のときは会社にいた。当日は帰宅できず、会社にそのまま泊まる。部署統合の前だったので、その時点ではおもしろく感じる仕事をやっていたが、震災を機にその仕事が自粛や先延ばしの対象になってしまい、さらに部署統合があったので、震災は業務に直接的な影響があった。「震災さえなければ」という思いも。

海外から来ていた友達が帰国するなどもあったが、自分自身の考え方は特に震災前後で変わってはいない。

## Sさん

27歳女性。定時制高校に通いながら家業の飲食店の手伝いをはじめ、定時制高校卒業後もそのまま継続し、つい最近まで10年続けた。この3月にお店を閉めることとなり、雑貨の卸売りのアルバイトを始める。現在けがのため休職しているが、治ったら復帰する予定。

### 1. 学校時代

地元の小中学校に通う。小学校の時はピアノや習字、バレエなどの習い事をしていて。母は働いていたので、おばあちゃんがよく面倒を見てくれた。中学生の時は、背が高かったので誘われたバスケットの部活に入ったが、きつかったのですぐにやめ、そのあとは友達との遊びが中心になった。

「1年のときはバスケをやっていました。すごい背が高かったので、顧問の先生に呼ばれたというか。1年だけやったんですけれども、きつくて、無理でしたね。合宿があつて、その合宿でもうやめようと思って。

（空いた時間は）遊んでましたね、基本。カラオケに行ったり、あと、公園ですっとみんなで話していたりとか。同じ中学です。小学校と中学校が隣同士になっているんですよ、うちのすぐ近く。だから、みんな周り、友達なんですよ。

先生と（の関係）は決してよくなかったですね。中学校時代はあんまり、先生と仲がいいとかないですね。多分、だれもがそうだと思う。中学生とかは結構反抗期だったので、学校もあんまり行ってないです、中学は。うち、自営で朝から晩までいなかったの、親は、うちの母親のほうは、結構、中学の呼び出しは食っていたんですけど、お店抜け出して。（今から振り返って）すごいかわいそうだと思う、親が。」

中学生の時からアルバイトをこっそりしていた。

「いや、もうほんと、お金が欲しくて。年をごまかして、中学とかから働いていたので。近所のお店とか。結構ふけていたので、あんまりばれないですね。やっぱり中学、高校って、基本、お金が欲しくて。親はくれるんだけど、やっぱりそれじゃ足りないみたいな。（お友達もそうやって働いていたとか？）していました。

基本的には、あまりばれないような仕事というか、車のワイパーに「車を買いますよ」みたいな、そういうチラシとかを挟んだりとか、そういう仕事。人目につかないでみたいな、そういう仕事をしていました。チラシ配り、ティッシュ配りとか、そういう系を結構。」

### 高校進学

高校に進学したいという気持ちはなかったが、親の強い勧めで定時制高校に進学した。

「高校は行く気はなかったんです、ほんとうは。でも、やっぱり親に行ってくれと言われて、1回、昼間の高校を受けたんですけど、私、小学校のころから勉強はしていなかったの、

「でも行けないよ、多分」という話はしていたんですけど、一応、昼間の普通の高校を受けて落ちちゃったんです。それで、「やっぱり落ちちゃったから、高校はやめるわ」と言ったら、それでも行ってくれと言われて。定時制にいたことが通っていたんですよ。それで、定時を受けて、受かって、そこから定時に4年間。

(定時制高校は)楽しかったです。(笑)ほんとうに。まず、給食がありますし、あと、私服です。あんまり行かなくても、全く怒られないです。だから、基本、1学期、2学期はほとんど学校に行かなかったです。行かないというか、遊びに行っていたみたいな感じで。それで、単位が足りなくなると、先生から電話がかかってくるんですよ。

でも、学校は行っていました。ただ、授業を受けていなかったから、単位が取れないんですよ。で、遊びに行くんです、そこから。授業を受けなかったのも、単位が取れないじゃないですか。それで、もうそろそろ授業出ないと単位が取れないからと言われて、それから、教室にいるようにしているような感じでしたね。」

高校はきちんと卒業したが、やめた友達もいた。

「どうだろう。うちの友達はみんな、卒業、一緒にしたんですけど、やめた人も何人もいます。それでも三、四人ぐらいやめたかな、友達の間で。面倒くさいとか。似たような感じが集まるみたいな感じだったので。クラスは四、五人。2クラスあって、向こうにまた五、六人とかいて。あと、先輩とかと遊んでいた。カラオケとか、居酒屋さんとか、基本的にはそういうところばかりですね。先輩が結構車で来ていたので、車でどこかに行ったりとか。みんな、ほんとうにどうしようもなかったと思いますよ。今、考えると。」

中高では繁華街によく出かけていた。

「中学、高校はブクロとか新宿とかによく行っていたんですよ。今はもう行かないですね、繁華街は。疲れるから。しかも、すごい人ごみが嫌いなので、いつも車移動なんで。買い物とかができるとしたら、ショッピングモールぐらいしかないの。」

## アルバイト

高校に進学するとすぐにアルバイトを始めるが、途中でそれまで家業を手伝っていた兄の怪我がきっかけで、家業を手伝うようになる。

「(高校に入ってすぐは)一応、昼間はスーパーをやっていて、それで、夜、学校に行っていたんですけど。うちのお兄ちゃんが手伝っていたんですよ、うちのお店。でも、うちのお兄ちゃんが何か手を骨折したか何かで、配達の仕事なんですけど、できなくなっちゃったから、やってくれと言われて、スーパーをやめて、そこからお店をずっと今年の4月まで。だから、10年以上、私、ずっとやっています。

中華料理のお店なんですけど。配達。朝10時から夜、時間も結構、最初のころは夜の12

時までやっていたんですけど、10時にならなったり、9時にならなったり、結局、最終的には8時にならなりましたよ。まで、ずっとお店です、私は。」

### 高校卒業時

卒業時には家業を手伝うことに決まっていたが、友達も就職はしていない。

「(就職について考えるということは) 私はなかったですね。お店だったので。友達は別に。結構、結婚する子が多かったの。あと、どうだろう。普通にバイトとかしている子が多かったですね。あと、男の人だったら、男友達だったら、職人さん。ずっとそのまんま。就職とかはないです、定時というか、私たちの友達では。

多分、1人も就職はしていないと思います、うちの友達。そのまま持続みたいな。卒業してもあんまり変わらなかったですからね、遊んだりするのは。でも、会わなくなりますね。全然会わないです、今は。みんな働いたり、結婚していたりするんで。」

今から振り返ると、きちんと勉強して大学に行きたかったような気もする。

「やり直したいです。小学生から。大学に行きたいです。大学に行っている友達はいないんですけど、テレビですけど、見ていると、楽しいそうじゃないですか、大学生って。基本から勉強し直したいなという。もう小学校からちよくちよくちゃんと勉強して、高校も昼間の高校受かってみたい。勉強はしなかったの、今のところ、困ることはないですけど、将来、子供ができたときとかに困るじゃないですか、算数とか。だから、そういう面では勉強しときたかったなと思いますね。」

## 2. キャリア

家業手伝いを10年ほど継続したが、様々な事情でお店を閉めることになり、現在は近くの雑貨の卸売りでアルバイトをしている。

家業手伝いは長時間労働で拘束があったので、辞めたい気持ちもあったが、自分が辞めると家族みんなが困ってしまうというのがあったので、やめることは難しかった。

「(家業手伝いを辞めたいということは)ほんと、ずっと思っていました、それは。やっぱり親と一緒に働くというのはきつかったですね。やっぱりいいところもあれば、悪いところもあるような感じで。そのころにはもう親とはすごい仲よかったの、一緒に働くこと自体はいいと思って働いたんですけど、やっぱり家族だと甘えも出るし、きついといえはきつかったですね。それはもう自営業の苦しみというか、私がやめたらもう、みたいな面もある。(みんな、困っちゃうという) そう。

雨の日とかも、かっぱを着て、外に行かなくちゃいけないんですよ、大雨のときとかも。それが一番きつかったですね。一番きつかったですね。あと、雪とか、あと、風とか、台風

のとき。配達の仕事って、そこまで女の人っていないじゃないですか。それを雨でびしょびしょになりながらやるというのが、自分的にはすごい嫌で。」

現在の仕事は新聞の折り込み広告で見つけた。家に近く、時給が高いのが魅力だった。「だれかの紹介とかじゃなくて、自分で探して、面接行って、受かったところなんですけど。新聞の折り込み（で探した）。パソコンは持っているんですけど、基本、あんまり使わないんですよ、私。でも、そういうのは携帯とかでは探さなかったですね。知り合いに新聞屋さんがいて、日曜日になると広告が入るんですよ。それを毎週もらって、それで。まあ、近かった。大体、いつも時給とかも850円とかが多かったんですけど、そこ、900円だったし。親会社は卸会社なんですよ。雑貨屋さんとかも、いろいろなことをやっているところで、基本、私がやっているのは、雑貨屋さんで接客をしたり、あと、いろいろあっちこちに倉庫がすごいいっぱいあって、倉庫で検品したりとか。

今のところは、一応9時からなんですよ。終わる時間は、基本、あんまり決まっていらないんです、私の場合は。主婦とかが多いので、主婦とかは5時とか6時までとかって決まっていて、私は適当。（仕事）残っていれば。結構忙しい会社なので、遅いときは9時とか9時半とかまで。1日の半分ぐらい働いていてるときもありましたね。」

働くことが好きである。

「（働くことって苦にならないタイプですか）あんまりならないですね。お店をやっているときからそうだったんですけども、基本、ずっと働いていないと、私的に、家にいても何もすることないというか、だったら、働いていたほうがいいなと思う。家にいられないんですよ。事故して1カ月ぐらいもう家にはいるんですけど、こうやって出歩いたりたまにするんですけど、もうだめですね。うん、もう働きたくて。

多分、私、集中力があんまりないというか、だから、勉強という、机に向かって何かやるというのがだめですね。ずっと外で遊んでいましたから。遊んでいたいというのがありましたね。公園で座っているとかなので、別に動いたりはしてないんですけど。」

現在はけがのためアルバイトを休職中だが、早く働きたい。

「お金のありがたみも、多分、働かないとわからないです。今までずっと自営だったので、親から給料をもらうわけじゃないですか。だから、欲しいときにくれるみたいな感じだったので、どれだけ働いて、どれだけ給料をもらえるというのがなかったんですけど、今までずっと。今、働き始めて、働いた分だけお金をもらえる、長く働いた分だけ時給ももらえるというあれで、だから、今、働きたいですね。

事故っちゃったんですけど、1カ月ぐらいで。いい会社で、もう治ってからでいいとか、そういう、結構、みんな、何か家族みたいな感じの。人自体は30人以上はいるんですけど、

社長とか常務とかが親子だったりとか。しかも、昔から働いている、長い人が結構多いので。みんな、すごいいい人で、すごい働きやすくて。相当、仕事運がいいんですよ、多分。多分、主婦の方と違って、年間幾らまでってあるじゃないですか。だから、週5で、時間も短いかなんですよ。でも、私は関係ないので、働けるだけ働くみたいな感じなので、基本、そういう人が欲しかったみたいで。」

### 3. パートナーとの関係

結婚を今年か来年に予定しているが、パートナーは職人さんで朝が早く職場が遠いため、生まれ育った場所から移動しなくてはならないのが不安である。

「(結婚は)今年か来年ぐらいにしようかみたいな話はしています。もう7年ぐらいつき合っているのです。紹介みたいな感じで。ちょっと遠距離なんですよ。基本的には専業主婦になりたいですけど、家にひとりでいるんだったら、働きに出ます、私。子供がいるんだったら、子供と一緒にいたいです。前はあんまり好きじゃなかったんですけど、弟の、おいっ子が生まれて、めっちゃかわいくて、早く子供が欲しいって言って。うちの親というか、母親ですけど、早く結婚しなよって、早く子供産みなよってすごいずっと言っていて。早く子供は欲しいですね。結婚して、子供ができるまでは働きます、多分。お金云々とかじゃないんですけど、家にひとりではいられないです、絶対に。お金もたまりますし、そしたら。」

家族と仲がいいので地元を離れるのは嫌だが、やむをえないと考えている。

「こっち(彼の地元)に行きます。嫌です、絶対に、ほんとは。親から離れられないです。私、ほんとに親と仲がいいんですよ。仲がいいというか、ずっとママと一緒にいるんですけど。考えられないですね、多分、親と離れるというのが。おばあちゃんも大好きだし。でも、仕事があるので、どっちにしたって、私が行くしかないんですよ、多分。通うのが朝早い職人さんなので、だから……。そうしたら、ほんとに私はどうなるかわからないです。ノイローゼになるかもしれないし。多分、ホームシックにかかると思います。1回も家を出たことがないですから、私は。ひとり暮らしもないです。不安なことばかりですよ、多分。」

将来の夢は、一戸建ての家を建てることである。

「家を持って、ほんと幸せに暮らしたい。ほんと、それぐらいしかないです。買うということですよ。彼氏のほうが職人さんで、家を持つのが夢みたいな感じで。だから、一軒家じゃないかな、多分。」

子供は元気であればよい。

「元気ならいいかなと思います。自分も大したそういうのをやっていなかったですし、例え

ば大学まで行ってほしいとかもないですし。今回は多少勉強してほしいなと思いますね。やりたいと言えば、やらせてあげたいぐらいで、押しつけるというのがすごい嫌だったんですよ。昔から、私。親が、例えばバレエに行くよと言われてたとか、そういうのは嫌だったので、だから、そういう意味では、やりたいことがあったら。塾に行きたいと言えば、塾に行ってもいいよと言うし。」

#### 4. 友人関係

昔から人間関係で困ったことはない。

「人間関係はそこまで心配はないですね。なかったです、そこまで。昔から、社交的というか、人づき合いで困ったことはそこまでないんですよ。

だから、お店やっているときとか、スーパーとかも、結構、従業員の年配のおばさんたちとかとよくしゃべったりとかもしていたし。逆に（年齢が）近いほうが気を使ったりとか。

ちっちゃいころからも、どこにでも行っちゃう子だったので、人なれしていて。ちっちゃいころはおばあちゃんが結構来ていたんで、年配の方がすごい好きだったんですよ。

逆に年が近いと気を使っちゃって、だめですね、私は。だから、今の仕事場も、結構上の人もいますし、上の人とのほうが仲がいい。ずっと家にいるほうがだめですね。」

自分の社交性は、友達の中では珍しいように思う。

「うちの場合だったら平気なんだけど、たまに知らない人が来たり、違う人が来たりすると、黙っちゃう子のほうが結構多かったですね。

（ニートの友達）面倒くさいんじゃないですかね（働くのが）。そういう人って、多分、お金がなくても、どうにか生きていけるんですよ。だから、私の知っている、ずっと働いてない子は、携帯も持ってないですし。そういうのも全然いけるんですよ、多分。近くに仲のいい友達が1人だけいるので。私にはちょっと考えられないんですけど。」

趣味はギャンブル。

「ギャンブルかな。スロットとか。あんまり勝てないんですよ、私は。（笑）博才がないんですね、多分ね。好き。唯一のストレス解消みたいな。わからない。お金になるところ。（わくわくした感じ？）そう、そう。」

#### 5. 家族との関係

家族とはとても仲が良い。両親は「まあ、元気ならいいみたいな。自由ですから、自由、結構。」という教育方針だったように思う。

「うちのお父さん、18からもう中華のお店に入っているんで。それで、多分、自分のお店

を開きたいというので、開いた。小学校のときだったので。ママとパパがずっといなかった  
ので。でも、毎週火曜日はお休みだったので、いつも出かけていました。あと、旅行に行っ  
たりとか。基本、家族でどこかに行くのが、うち、すごい好きだったので。すごい仲いいで  
す。」

兄弟とパートナーも仲がよい。

「お兄ちゃんも弟もバスケットだったんです。この人もバスケットだから、一緒にバスケットをしに行っ  
たりとかもしたこともありますし。あと、どうだろう。あと、みんな車が好きなんですよ、  
お兄ちゃんも彼氏も弟も。だから、洗車しに行ったりとか。結構、兄弟とか家族ぐるみでみ  
んな、仲がいいので。」

現在は、父はトラック運転手に転職、母は専業主婦。2歳違いの兄も弟もトラック運転手  
である。

「今、お母さんはやっていないんですけど、お父さんはトラックの仕事。うちのお兄ちゃん  
と同じような仕事なんですけど、トラックの仕事をやっています。パパは大型まで全部持っ  
ています。」

## Aさん（専業主婦のため、参考）

24歳女性。短大卒。認証保育園→公立非常勤→公立正規保育士をしていたが、妊娠をきっかけに退職。

### 1. 学校時代

中学校時代はバレーボールの部活に打ち込んだ。中学時代から保育士になりたいと考えていた。高校は大学付属の私立高校に進学した。

「うちの両親も結構厳しい人で、公立に進んで、ちょっと乱れるといたら変だけれども、ちょっと道がそれたりとかするよりは、しっかりした校則があるところのほうがいいんじゃないかと言ってきて、私自身もそういう気持ちはすごくあったので、そうだなと思って。別に公立が悪いわけではないんですが、いろいろなこと、後先のこととか考えると、私立で附属がついていてといったほうが、金銭的にはすごく負担をかけてしまったと思うんですけども、いいかねと言って、といったのがきっかけですね、私立を選んだのは。」

高校卒業時に悩んだが、短大の児童教育学科に進学した。

「成績がいい順で、全附属高校の成績がいい順で好きなところに入れるので……。なので、うちの高校は附属高校の中でも、まあ学力的にいいほうだったので、みんな希望するところに入れたりとかはしたんですけども、ふだんの授業の成績というので、希望するところに入るか入れないかが決まってくるみたいなの。厳しい。附属なのだと思います。」

保育士になろうと思ったのは中学生ぐらいから。高齢者のお仕事もしたかったんですけども、すごい、どちらか迷って。高校生のときに、進学ですよ、進学するときいろいろ悩んだ結果、やはり子供のほうがいいなと思って、短大に入学するのにいろいろ勉強してという感じです。附属高校に通っていたので。もし高校の途中で違うことをやりたいと思っても進路変更できるようにと思って、総合大学がある附属の高校に入って、結局そのまま児童教育学科に……。」

### 障害者支援に関心を持ったきっかけ

「何のテレビか忘れちゃったんですけども、高校生のときに、児童養護施設のテレビをやっていたんですね。ドキュメンタリーで。それがすごく衝撃を受けて。自分の家庭環境からは想像できなかったといたら変だけれども、私はすごくほんとうに幸せな家庭に育ってきて、そういうことを全く知らなかったといたら変だけれども、わからなかったんです。こんな世界があったんだというのにすごく衝撃を受けて。」

短大では、保育士と幼稚園の先生と小学校の免許をとるため、朝から晩まで授業を受けていた。

「もう、土曜日まで、朝から晩まで授業を受けて。バイトする暇もなくて。短大はA県ですよ。結構実習先でいろいろな輪が広がるといったら変だけれども、東京に戻って実習はしたほうがいいんじゃないかと先生に勧められて。

実習先は東京でいろいろ探して。電話して。実習は寝られなくらい忙しいと聞いていたので、家から近いところをとりあえず探して……。自分が卒園とか卒業したところに連絡して、どこかご存じないですかというのを聞いて。断られたりとか、いろいろあったんですけども。

結構、自分で言うのは何なんですけど、ほんとうに動き回る、動き回るといったら変だけれども……。短大時代も、障害とか児童養護施設のところにしょっちゅう、自主実習といって、日曜日を使って、ちょっと勉強させてとって施設にお邪魔させてもらったりとか、そういうことをやっていたので。頑張りましたね。なので、そのままその自主実習をやっていたところ、障害だったりとか児童養護施設にそのまま就職ということもできたんですけども、戻ってきたらいいんじゃないと（両親に）言われて。」

### 最初の勤め先を自分で見つける

短大の友人は学校に送られてきた求人票の中から探していたが、東京に戻るため自分で開拓した。

「知るきっかけは、いろいろ調べているときに、障害のお子さんを持っている施設があるというのを見つけて、そういうところの施設での実習は、学校ではなかったんですけども、夏休みを使ってそこに連絡して、ちょっと、仕事じゃないけれども、実習でもないけれども、ちょっとお手伝いさせてほしいと言ってやらせてもらっていて、で、そのまま拾ってもらったという形です。」

## 2. キャリア

初職は、保育園から高齢者施設までもつ大きな組織であった。配属は認証保育園だったがあきたらず2年で辞め、公立保育園の非常勤保育士となり、試験に受かって正規の保育士になるも、1年で離職。

「いろいろな施設を持っているところで、障害関係の施設がある大きなところだったんです。私は学生時代、子供は子供でも障害のほうにという気持ちでそちらに入ったんですけども、配属された先が普通の保育園だったんです。2年間、とりあえずやるだけやってみて、その最中にやはりという気持ちが、異動なり転勤なり転職なり、何かいろいろ考えようと思っていて……。

学生時代に、ただの子供だけじゃなくて、障害を抱えているお子さんだったりとか、逆に児童養護施設といって、親御さんと離れ離れになってしまったお子さんを見たいという気持

ちもあって、2年間ここで、民間でやった後に、ちょっと考え直す時間が欲しいなというのが、この1年間（公立非常勤）だったんですね。で、結婚等もいろいろあって、主人や両親とか家族にはやはり反対されて。普通の仕事といたら変だけれども、普通の保育園やそういうところで働いてほしいって。そういうストレスがもしかかかってしまったときにと言われて、いろいろ考えて、公立受けて、公務員資格に受かったんですね。」

### 非常勤の時の状況

「非常勤やりながら、そこでもまた障害関係のバイトをしていたんです。かけ持ちで。ある意味、すごく忙しい。忙しくて大変だと思ってやめたのに、こっちのほうもまた余計忙しくなっちゃったんですけれども。3時ぐらいまで保育園で朝からやって。で、夕方からまた違うところに行って、夜までやってみて。そのときに結婚の話とか何かいろいろ出ていて、結婚する相手が家にいてほしいという気持ちがあるというのはわかっていたので、このまま結婚したら絶対後悔が残るからと思って。だったらもう、入籍する前の半分自由な、その時間を思い切り使おうと思って。ハードな毎日を過ごしました。その結婚やら何やらの話が出ているときに、やはり（配偶者が）障害関係はよしてほしいって。不規則、1日24時間運営しているようなところだったので……。ほんとうにやりたかったらいいけれども協力はできないみたいな。ええーと思いました。」

### 離職の要因

就職して1年目で結婚、出産というのがなかなか受け入れられない雰囲気だった。配偶者も家にいてほしいという希望だったため、離職となった。

「籍を入れたのは公立に入ってすぐだったんです。主人はもともと仕事をしてほしくないタイプだったんです。なので、受からないと思って半分、やっていたものですので。

まあ、私自身もやるだけやってみようかなという気持ちと、あと、非常勤をやっていたときに、皆さんにほんとうに、やってみなやってみなって言われて、やったら、受かっちゃったという言い方はすごく失礼なんですけれども……。あ、受かっちゃったけれどもどうしようみたいな形で。

で、私も悪かったと思うんですけれども、働きづらかったというのもあったんです。1年目で、結婚しますとって報告したときの反応だったり、何だかんだ、もう何かちょっと怖いという気持ちもあったときに、妊娠もわかって、やっていけるのかなという気持ちがちよっとあって。それで、主人もうちの両親も、別にそんな一生懸命仕事をする必要はないんじゃないかと言われて、考えて考えてという形で退職しちゃったんですが。うちの両親も主人も働いてほしく——働いてほしくないわけではないけれども、フルでというのはという気持ちでいて……。

私は、そうだなという。自分自身の性格とか、うちの母が専業主婦でやっていて、それを

見ていたので、そういう気持ちもあったんですけども、公立のいろいろな話とか聞いていて、続けられるんじゃないかって思ったんです。

やはり難しかったのかなという。つわりとかもあって。公務員として働いて、半年ぐらいして妊娠がわかって、やはりすごくひどくて、つわりも。そういうときに、でも休みづらいつて、1年目というのもあるので。何かいろいろ考え込んだりしたというの、精神的にもやられちゃってというのがあって。いっとき我慢とか、ちょっと苦勞、ちょっとほんとうに我慢すればよかっただけかもしれないんですけども、どうしようかなと思って考えて、決断して。

保育士や幼稚園とかって、私、小学校の免許も取ったんですが、そういうのって、資格があればほんとうにいろいろなところで、正規じゃなくても短時間でも仕事ができるなど思っている。だから、もう、いいって言って、割り切って。今は後悔ないんですけどもね。」

### 将来の展望

子供が小学校に入ったくらいでまた仕事をしたいという気持ちもある。

「やはり資格、せっかく取ったので、それを生かせる仕事をしたいなという気持ちはありますね。ただどれにしようかなと思いつながら。家のことを大切にしたいという気持ちと、自分自身も、退職して今、ゆっくりしたからわかる、自分自身がすごく気がやさしくなったというか、余裕が持てて、そういう気持ちがあるので、その気持ちを忘れたくないので。今、フルで働けるのが一番いいのかもしれないけれども、フルで働いてそういう気持ちも忘れないほうがいいのかもしれないけれども…子供も落ち着いたぐらいには、またちょっとやりたいなという気持ちもあります。」

### 3. パートナーとの関係

パートナーは経済的に安定しており、専業主婦を望んでいる。

「7つ上です。一番最初の職場の先輩の紹介ですね。全く違う会社なんですけれども、飲み会みたいなのがあって、そこで知り合ったのが主人という形です。(経済的に)安定しています。

私と主人の夫婦関係とうちの両親が似ていて、主人の考え方とうちの父の考え方が、親子なのかなと思うぐらい……。ほんとうに思うくらいすごく似ているので、私も、こうやってなっていくのかなと思っているんです。」

### 4. 友人関係

生まれ育った地元に住んでいる。地元の友達はまだ子供がいるが、短大の友達は働いている。

「結構みんなここが、ここが好きみたいで、離れないですよ、みんな。私も結婚したの

に、ここら辺に住みたいと。高卒の子もいたり、大学まで行ってちゃんとほんとうに就職している子もいるし、いろいろですね、ほんとうに。地元の友達は逆にすごく早過ぎたですね、結婚が。もう子供が2人3人いたりとか。

（短大の友達は）まだ早いとか、ちゃんと仕事をしている、ちゃんと仕事をしているといったら変だけれども、仕事をしている子からしたら、やはりその仕事が今一生懸命、すごく楽しい時期みたいで、話を聞いていても、いいなあと思いつつ。話が合うのはやはり、学生時代の、同じ短大の友達のほうが合うけれども、A県なのであまり頻繁に会えなくて、1年に1回とか2回ぐらい、みんなで集まってという形ですね。」

## 5. 両親との関係

両親、兄、妹の5人家族だった。両親は厳しかったが、自分も子供を同じように育てたい。「うちは、勉強しろということよりも、そういうことじゃなくてすごく厳しかったですね。ふだんの生活の中で、最後までやるとか、家のことをちゃんと手伝うとか、自分が結婚して子供が生まれると思うと、絶対自分もそういう厳しい親になるんだろうなというような気持ちにはなるんですが。

両親がすごく子供のことを思ってくれているのがわかっていて、3兄弟みんなバレーボールやっていたんです。うちの両親もバレーボールをやっていたんですけれども、家族みんなバレーボールをやっていて……。体育会系ですね。うちの母がまさに体育の教師だったんです。兄が生まれてから退職したのかな。なので、ほんとうに私も母と同じような道というか、母もやはり公務員で、中学校の教師として働いていて、公務員なのにもったいない、もったいないと言われていたから。」

---

労働政策研究報告書 No. 148

大都市の若者の就業行動と意識の展開  
－「第3回 若者のワークスタイル調査」から－

発行年月日 2012年 3月 30日

編集・発行 独立行政法人 労働政策研究・研修機構

〒177-8502 東京都練馬区上石神井4-8-23

(照会先) 研究調整部研究調整課 TEL:03-5991-5104

印刷・製本 有限会社 太平印刷

---

©2012 JILPT

\* 労働政策研究報告書全文はホームページで提供しております。(URL:<http://www.jil.go.jp/>)